中村古峽主幹

變態心理

第十一卷第四號

四月號

東京 日本精神醫學會 發行

大正十二年三月二十五日印刷納本 大正十二年四月一日發行(毎月一回)

□慈惠醫大教授
□精神病科專攻

醫學士　森田正馬先生著

神經質及神經衰弱の療法

四六版總布裝函入美本

總紙數六百八十頁

定價金　四．圓

書留送料拾八錢

滿鮮臺支・參拾錢

增補再版

精神醫學の最高權威

□松原醫學博士曰く――畏友森田正馬氏の近著「神經質及神經衰弱症の療法」を一覽するに、全く獨創的見地に立ちて自己の意見を縱橫に吐露せられたるものにして、近來の一大快著なり。廣く世界に於ける吾が精神醫學界一大權威として推賞すべきものなり（中略）森田氏の特殊療法は、全く同氏の獨創的發明にして、世界に誇るべきものとす。殊に其一期に絕對安靜を命じ、患者をして精神の自然發動、實驗體得により自己に對する從來の誤想臆斷を破壞せしめんとするは、甚だ面白き考なり。尙ほ氏の說得療法なるものも、從來のものと其型を異にし大に推賞すべきものなり。

□北林醫學博士曰く――森田氏の神經衰弱療法は頗る興味あり。該療法の行き詰れりと稱するもの彼所此所にあるの今日、君に倣うて其療法を實施するもの蓋し尠なからざるものあらん。隨つて氏の著書が專門に對しては親しき伴侶となり、凡俗に向つては良指針となり、好訓戒となり、嚴父となり、慈母となるの槪あるを覺ゆ。終りに余は君が本著によりて名をなし、君の積年の努力に對して斯界より多く認められんことを祈るや切なり。

□發行所　東京品川御殿山　振替東京三一一七七　日本精神醫學會

田中香涯著

民族中の低能惡性なる分子を淘汰し、健全優良なる者を増殖せしめて、民族の改善を圖らうとするのが優生學の本旨である。そして優生學の運動は歐米に於て着々その歩武を進め、吾國に於ても之を高調する學者思想家が多い。この時に當つて、斯界の權威たる田中氏が本書を公けにするは時機に適せる大業たるを失はぬ。優生學が、人生の健全、社會の進歩、民族の向上等に必要缺くべからざる意義と使命を有するものたることを力説しつゝ、然も不公正不自然なる現代の資本主義社會に於ては、優生學的改善の不可能なることを論じ、興味ある幾多の事例を網羅して、優生學と人生乃至社會の關係を説いた本書は、民族及社會の向上を念とする人々の見逃すべからざる好著である。

内容

一、優生學と道德及法律問題 二、實驗遺傳學とデモクラシイ 三、優生學と社會改造 四、優生學と戰爭 五、戰爭根絶の道 六、醫術進步の利弊 七、遺傳と教育 八、所謂文明病 九、人類の退化 十、進化と苦痛 十一、貴族の系統 十二、米國の移民拒絶 十三、人種的遺傳と日本民族 十四、白人種の生理 十五、女性の男性化 十六、產兒調節 十七、人類の本能 十八、生物學と社會改造 十九、優生學と孝道 二十、先祖もどり 二十一、男兒出產の增加 二十二、獨逸文化の將來 其他

四六版總クロース 定價二圓二十錢
極上製箱入 送料十二錢

東京今川小路
大阪三休橋南 大鐙閣 振替 東京三三六一八
大阪二七一五五

變態心理第十一卷第四號目次

變態心理

第六十六號

（第十一卷第四號）

皇后の釣

神功皇后、西征の志を立てゝ肥前の松浦郡に到り給ひ、玉島の小河の側にお出でになつた。此處で針を曲げて鈎を造り、粒(いひぼ)を取つて餌となし、裳の絲を抽いて釣糸とし、河の中の石の上に登つてそれを投げ込みながら「朕は今、西のかたの富める國を求めんとす、若し事成るものならば、河の魚かゝれ」と祈られた。

そして竿を擧げると小さい年魚(あゆ)が掛つてゐたので、「めづらしきものである」と仰せられた。それで、その土地を「梅豆羅國(めづらのくに)」と名けたのを、後には松浦と訛つていふやうになつた。

頃しも四月であつたので、以來土地の女は四月上旬になると鈎を投げて年魚(あゆ)を捕へる慣はしになつた。たゞ男だけは、釣をしても魚が獲れないといふ。

これは「日本書紀」にある話だ。

大正十二年四月一日發行

日常生活の精神病理

ギエンナ大學教授
墺國醫學博士　シグムント・フロイト

（三）固有名詞及び語句の順序の忘却

一　不快から生れた忘却

外國語の語句の順序の一部分を忘却する過程に關する前述のやうな經驗を聞いた者は、自國語の語句の順序の忘却は之と全く異なつた說明を要求するものだらうか知らと訝るかも知れない。成程、人は暗記した公式や詩が暫く經つた後には、語が變つたり缺語が出來たりして不完全にしか再現されなくても、別に驚かないのが常であるが、然し此の忘却は一緖に暗記した凡ての物に平等に影響を及ぼさないで、その中から或る特定の部分だけを選定してゐるやうに見えるから、かやうな間違つた再現の實例を二つ三つ分析的に硏究して見るのも、あながち無駄骨ではあるまい。

ブリルは次のやうな實例を報告してゐる。――

『或る日非常に名聲の高い年若い婦人と會話を交へてゐた時に、彼女は偶々キーツの詩を引用した。その詩は「アポロに與ふる詩」(Ode to Apollo) と云ふ題で、彼女は次のやうな詩句を暗誦した。――

'In thy western house of gold
Where thou livest in thy state,

間違があることが分つたので、彼女は非常に驚いた。正しい詩句は次の通りなのである。——

'In thy western *halls* of gold

When thou *sittest* in thy state,

Bards, that *erst* sublimely told

Heroic deeds and sang of fate.'

イタリックで書いた語が、暗誦中忘却されて他の語を以て置き換へられたものである。『彼女はこんなに澤山の間違があつたのを見て非常に驚いた。そしてそれを記憶の失敗に歸してしまつた。けれども私は、彼女の場合には記憶の性質または分量上の障害は少しもないと云ふことを、容易に彼女に信じさせることが出來た。そして此の詩句を引用する直ぐ前に二人が話してゐた事を彼女に思ひ出させた。

『二人は戀人同志は相手の人格を高く見積り過ぎると云ふことを論じてゐたのである。そして彼女は、戀は雜貨店の番頭をも天使にしたり神にしたりするものであるから、此の世の中で戀程偉大なものはないと言つたのは、ヴィクトル・ユーゴーだつたと考へた。彼女は更に言葉を續けて次のやうに言つた。「私達は戀に陷つてゐる時だけ人間性に對して盲目的信仰を持つものです。その時には何も彼

す。けれど、戀は不思議な經驗です。假令多くの場合恐ろしい失望がその後から來ても、そんなことには構はずにお終ひまで仕遂げる價値のある經驗です。戀は私達を神々と同格にし、さうして私達を鼓舞してありとあらゆる藝術的活動をさせます。私達は本當の詩人になります。私達は詩を暗記したり引用したりするばかりでなく、アポロその者となつてしまふことが度々あります。」彼女はかう言つてから前に揭げた詩句を引用したのである。

『一體彼女はその詩句をどんな時に暗記したのかと私が尋ねたところが、彼女はそれを憶ひ出すことが出來なかつた。彼女は朗讀法の敎師として常に非常に澤山の詩を非常に屢々暗記したので、此の詩句を暗記した時を正確に言ふのが困難であつた。「會話から判斷すると、此の詩は戀してゐる人の人格を餘り高く見積り過ぎると云ふ考に密接な關係を持つてゐるやうに思はれます。多分あなたは此の詩をさう云ふ狀態に居つた時に暗記されたのでせう。」私はかう暗示した。彼女は暫くの間ぢつと考へてゐたが、間もなく次のやうな事實を憶ひ出した。卽ち彼女はその時から十二年前に、彼女が十八歲の時に戀に陷つた。彼女は素人芝居に出演してゐた時に、相手の靑年に逢つた。その男はその時舞臺に立つ準備をしてゐたが、他日マティネの人氣者になるだらうと豫言されてゐた。彼はかやうな職業に必要なあらゆる屬性を賦與されてゐた。彼は體格がよく、愛嬌があり、衝動的で、非常に利口で、そして……非常に氣の變り易い男であつた。彼女はその男を警戒するやうに言はれたが、それを凡て忠告者の嫉妬のせいにして、少しも注意を拂はなかつた。數ヶ月の間は萬事順潮に進んで行つたが、或る日彼女は思ひがけなく、彼女がそのために此の詩句を暗記した彼女のアポロから、非常に富裕な或

る年若い婦人と駈落して結婚したと云ふ手紙を受取つた。その後數年經つて、彼女はその男が西部の或る町に住んで妻の父の事業を管理してゐると云ふ噂を聞いた。

『玆に於てか詩句の引用の間違がすつかり明らかになつた。戀人同志は相手の人格を餘り高く見積り過ぎると云ふ談議が、彼女自身が戀人の人格を餘り高く見積り過ぎた時の不愉快な經驗を、無意識的に彼女に憶ひ起させたのである。彼女はその戀人を神と思つてゐたところが、豈圖らんや彼は普通の人間よりも更に劣つた人間となつてしまつたのである。此のエピソードは、非常に不快で苦痛な考によつて限定されてゐるために、意識の表面に浮んで來ることが出來なかつたが、詩の語句を無意識的に變じたことが、彼女の現在の精神狀態を明白に示したのである。詩の表現は、單に散文的なものに變つただけでなく、此のエピソード全體を明瞭に暗示したのである。』

二　恐怖から生れた忘却

その當人のよく知つてゐる詩の語句の順序を忘却したもう一つの例を、ツェー・ゲー・ユング博士の著書（『早發性癡呆の心理』）から引用することにする。著者の言葉をその儘引用して見よう。

『或る人が、「一と本の松の木只獨り立ちたり」云々と云ふ人口に膾炙した詩を暗誦しようと欲した。「彼は睡氣を催しぬ」と云ふ詩句の中で、その人は「眞白き敷布に包まれて」と云ふ語句を言ひ澁つて、どうしてもそれを口に出せなかつた。こんな有名な詩句をかやうに忘れると云ふことは、私には寧ろ奇妙なことに思はれた。そこで私は彼に、「眞白き敷布に包まれて」と云ふ語句のことを考へるとどんな事が心に浮んで來るか、それを再現して貰ひたいと言つた。彼は次のやうな一とくさりの聯想

を述べた。『眞白き敷布は屍體の上の白い敷布を思はせます――〔言葉を途切らす〕――今私は近しい友人のことを思つてゐます――その友人の兄弟は極く最近に亡くなりました――彼は心臟病で死んだと想像されてゐます――彼はまた非常に肥滿しても居りました――私の友人も矢張肥滿してゐます。それで私は彼も同じ運命に遭遇するかも知れないと考へたのです。――多分彼は餘り運動をしないだらうと思ひます――私は此の死亡を耳にした時に、不意に怖ろしくなつて來ました。同じ事が私にも起るかも知れないと思つたのです。と言ふのは私自身の家系は肥滿する素質を持つてゐるからです――私の祖父は心臟病で死んだのです――私も稍肥滿し過ぎてゐます。そこで私は數日前に肥滿治療を始めたのです。』

ユングは次のやうに言つてゐる。卽ち『その人は白い敷布に包まれた松の木と自分を、無意識的に直ぐ同視してしまつたのである。』と。

三　思慮から生れた忘却

次に擧げる語句の順序の忘却の例は、私の友人であるブダペストのフェレンツィ博士に負ふものである。前の例とは異なつて、これは詩から取つた句に關したものではなくて、自分で作り出した格言に關したものである。これはまた、思慮分別が危く一時的慾望に屈服しさうになつた時に、その思慮分別の意の儘に忘却の起る稍異常な場合を、吾々に證明するものであらう。間違はかやうにして有益な作用に進歩するのである。後で心が落ついてしまふと、吾々は最初は忘却卽ち心的無能に於けるやうに不能によらなければ自己を表現することの出來なかつたその內的努力を、正當なものとして認める

のである。

『或る社交的會合の席で、誰かが「凡てを理解することは凡てを宥恕することである。」と云ふ文章を引用した。それに對して私は、その文章の前半だけで充分だらう、何故なら「赦免」は神と僧侶に委ねられなければならぬ免除だから、とかう言つた。客の一人は此の説を至極いゝ説だと考へた。今度はそれに勇氣づけられて、私は暫く前にもつといゝ事を考へたと言つた。多分それは好意を持つたその批評家の好意的評價を自分自身に保證するためだつたらう。ところが此の巧い考を將に繰返さうとすると、どうした譯かそれを想ひ出すことが出來なかつた。そこで私は直ぐ樣一座から退席して、隱匿思想を紙に書いた。最初に此の（所要の）思想の出生を目撃した友人の名前と、此の思想が生れたブダペストの街區の名前が頭に浮んで來た。それから次にもう一人の友人の名前が浮んで來た。その友人の名前はマックス（Max）と云ふので、吾々はいつもこれをマックシー（Maxie）と呼んでゐた。此の名前から更に‘maxim’（格言）と云ふ言葉と、その時にも今の場合と同じやうに有名な格言を造り變へることが問題だつたのだと云ふ考とが、頭に浮んで來た。不思議千萬にも、格言は一つも想ひ出されないで、「神は人間を彼自身の心象の中に於て創造した。」と云ふ文章と、「人間は神を彼自身の心象の中に於て創造した。」と云ふ、前の概念を變改したものとが頭に浮んで來た。すると直ぐ樣求めあぐんでゐた思想が浮んで來た。

『私の友人がその時アンドラッシー街で私に向つて、「人間的な物は何一つとして僕に縁の無い物はないよ。」と言つたのであつた。それに對して私はそれを精神分析的經驗に基づかせて、「君はもう一歩進めて、動物的な物は何一つとして君に縁の無い物はないと言ふことを認むべきだね。」と言つたので

あつた。

『然しかうして到頭所要の回想を發見してしまつてからも、尙ほ私はそれを此の社交的會合の席で語ることが出來なかつた。私が無意識の動物性を氣づかせてやつたその友人の若い夫人も亦その席に居つたのである。そして私は、そんな非同情的な見解を受け容れる用意がその夫人には全然ないと云ふことを、どうしても氣づかぬ譯には行かなかつたのである。だから私は忘却のお蔭で、彼女から數々の不快な質問を受けたり、望のない議論を戰はせたりすることを免れた譯なのである。そしてまさしくそれが「一時的記憶喪失」の動機だつたに相違ないのである。

『隱匿思想として、神を人間の發明に貶してしまつた文章が浮び出て來たと共に、求めあぐんだ文章の中に人間の動物性を仄めかしたところがあつたと云ふことを注意するのは、興味あることである。だから Capitis diminutio は兩者に共通なのである。事柄全體は明らかに、議論によつて刺戟された理解と宥恕に關する思想の流れの連續に外ならなかつたのである

『所要の思想がかやうに速かに現れて來たのは、矢張私がその思想の非難される社交の席から誰もゐない別室に退いたと云ふ事實に基づくものであらう。』

四　生理的變調と忘却

私はその後語句の順序の忘却または再現の誤の例を夥しく分析して見たが、その研究の首尾一貫した結果として、私は "aliquis" の例と "Ode to Apollo" の例で實證された忘却の機構が殆ど普遍的妥當性を持つてゐると云ふ假定を下すに至つた。かやうな分析を報告するのは必ずしも非常に好都合

な事ではない。何故かと言ふと、丁度前に引用した分析のやうに、かやうな分析は通例分析される當人の内密の苦痛な事柄に觸れるやうになるからである。だから私はかやうな實例の數をこれ以上殖さぬことにする。その材料の如何に拘らず、かやうな場合の凡てに共通してゐるのは、忘却または曲解された材料は何等かの聯想の路を通つて無意識的の思想の流れと聯關して來るものであつて、その無意識的の思想の流れが忘却となつて明るみへ出て來る感化力を生み出すのだと云ふ事實である。

今度は固有名詞の忘却に筆を戻すことにしよう。此の種の間違つた行爲は時々私自身に於て豐富に觀察することが出來るから、私は實例には困らない。私は今でも輕い偏頭痛に惱んでゐるが、その輕い偏頭痛の襲來はいつも固有名詞の忘却が起る前の時間だと云ふ先觸れになるのである。そして偏頭痛の最も激しい時――假令激しくても、その間仕事を放棄しなければならぬやうなことはない――には、私は凡ての固有名詞を想ひ出せないやうなことが度々あるのである。

然し私のやうな場合は、吾々の分析的努力に對する有力な反對說に對して論據を供給するものであるかも知れない。人はかやうな觀察から、忘却の原因、特に固有名詞の忘却の原因は、腦髓の血液循環または機能の障碍に求むべきものであると云ふ結論を下し、さうしてかやうな現象に對する心理學的說明を探求するの勞を免れることを餘儀なくされなければならぬものであらうか？　否々、そんなことをするのは、凡ての場合に同一である或る過程の機構を、その變體と取換へてしまふことを意味するものである。然し私は分析の代りに一つの比較を引用することにしよう。その比較が議論を片づけて吳れるであらう。

假に私が非常に向ふ見ずな人間で、大きな都會の附近の人家もない場所を夜散步して、追剝に襲は

れて時計と金入れを奪はれたとしよう。最寄りの警察署で私は事件を次のやうに報告する。即ち、『私はこれ〳〵の通りにゐました。そしてその通りで物淋しさと暗さに時計と金入れを取られました。』と。此の言葉は間違つた事は一つも言ひ表してはゐないだらうけれども、それでも私は——此の報告の言ひ方から判斷して——頭が少しどうかしてゐると思はれる虞があるであらう。前後の事情は、その場所が物淋しかつたお蔭と、夜陰に包まれてゐたゝめに、私は未知の犯罪者に貴重品を盗まれた、と言ふことによつて、始めてこれを正確に言ひ表すことが出來るであらう。

ところで、固有名詞の忘却の事情もこれと異る必要はないのである。疲勞と、血液循環の故障と、中毒のお蔭で、私は未知の心的力に、私の記憶に屬してゐる固有名詞に對する支配力を盗まれるのである。他の場合に、肉體的健康も完全であり精神的能力も旺盛である時に、同一の記憶の失敗を生み出すのは、同一の力なのである。

五　個人的複合體及び職業的複合體と忘却

私が自分自身に起るそれらの固有名詞忘却の場合を分析する時、私は殆どいつも、その抑壓された名前が私自身の人柄と關係を有する或る題目に對して何等かの關係を示し、且つ私の心の中に強烈な時として苦痛の情緒を喚起し勝ちであると云ふことを發見する。私はツーリッヒ學派（ブロイレル、ユング、リクリン）の便利にして且つ稱讚すべき方法に從つて、同じ事柄を次のやうな形式を以て言ひ表すことが出來る。即ち、抑留された名前は、私の心の中の『個人的複合體』に觸れたものであると。私の人柄に對するその名前の關係は思ひもよらぬものであつて、多くは表面的聯想（二重の意味

を持つた言葉や、發音の類似した言葉）によつて生ぜしめられるのである。それは一般に側面的聯想と名づけて差支へないものである。次に簡單な實例を幾つか擧げて、その性質を最もよく例證することにしよう。

(a)或る患者が私にリヴィエラの療養所を一つ推薦して貰ひたいと要求した。私はジェノアの直ぐ近くにあるさうした場所を知つてゐた。私は其處を管理してゐるドイツ人の同業者の名前も想ひ出した。けれどもその場所そのもの〻名前は、自分ではそれをよく知つてゐると信じてゐたにも拘らず、これを口に出すことが出來なかつた。患者に待つて呉れと言つて、大急ぎで家の女達に訴へるより外に道がなかつた。

『某夫人が非常に長い間治療を受けてゐる小さな病院をX博士が經營してゐる、あのジェノア附近の場所の名前は何と言つたけねえ？』

『勿論あなたはそんな名前はお忘れになるでせう。それはネルヴィー（Nervi）つて云ふ名前です。』

言ふまでもなく、私は大いに神經病（nerves）に關係してゐるのである。

(b)もう一人の患者が近くの避暑地の話をして、世人のよく知つてゐる二軒の旅館の外にもう一つ第三の旅館があると主張した。私は第三の旅館があると云ふことに抗論して、自分はその邊へ七回も避暑に行つたから、患者よりもよくその場所のことを知つてゐると云ふ事實を述べた。私の反對に唆かされて、患者はその名前を想ひ出した。第三の旅館の名前は『ホッホワルトネル』と云ふのであつた。勿論私はそれを承認しなければならなかつた。實際私は、自分が七回の避暑の際、その存在をかくも一生懸命で否定した此の旅館の近くに住んでゐたと云ふことを、告白しない譯には行かなかつた

のである。然し何故私はその名前と當の旅館を忘却してしまつたのであらうか？それは此の名前の發音が、私自身と同じ專門を業としてゐるヴィエンナの同業者の名前に非常によく似てゐたからだと思ふ。それが私の心の中で『職業的複合體』に觸れたのである。

六　家族複合體と忘却

(c)また或る時、ライヘンハル驛で汽車の切符を買はうとした時、非常によく知つてゐる次の大きな驛の名を想ひ出すことが出來なかつた。その驛は私が何度も通過したことのある驛だつたのである。その名は Rosen-heim（意味はローズの家）と云ふのであつた。私はどう云ふ聯想からその名を忘れたかを直ちに發見した。卽ち一時間前に私はライヘンハル附近の姉の家を訪問したのであつた。姉の名はローズ（Rose）であるから、從つて Rosenheim（ローズの家）ともなるのである。此の名前は『家族複合體』によつて取去られたのである。

(d)私は此の『家族複合體』の掠奪的影響を、複合體の連續の全體を通じて實證することが出來る。或る日私は私の女患者の中の一人の弟の青年から診察を乞はれた。私はその青年に何度も會つた。そして常に彼を名で呼んでゐた。その後彼の來訪のことを言はうと思つてゐた時に、私は彼の名を別に珍らしい名でもないのに忘れてしまつて、どうしてもそれを想ひ出すことが出來なかつた。私は看板を讀まうと思つて通りへ出た。そして看板が眼に觸れるや否やその名を再認した。

分析を行つた結果、私がその來訪者と私の實弟との間に對比を作つてゐたのだと云ふことが明かになつた。その對比は、『私の弟も、これと同じやうな場合には、此と青年と同じやうな振舞をしたらう

か？それともつとづつと反對の振舞をしたらうか？』と云ふ疑問に中心點を置いたものであつた。他人に關する思想と私自身の家族の間の外部的關係は、偶然にも兩者の母親の名がアメリアと云ふ同じ名であつたゝめに可能となつたのである。次いで私は、何等の説明もなく出しやばつて來た、ダニエル及びフランクと云ふ代用名も了解した。此の名はアメリアと共に、シルレルの『群盗』と云ふ脚本に屬してゐるのである。これは皆ヴィエンナの徒歩主義者のダニエル・スピッツァーの洒落に關係してゐるのである。

七　自己關係と忘却

(e)また或る時、私は或る患者の名前を發見することが出來なかつた。その名前は私の少年時代と或る關係を持つた名前であつた。その所要の名前が發見されるまでには、長たらしい廻り遠い道を通つて分析を進めて行かなければならなかつた。その患者は彼の視力がなくなりはしないかと云ふ危懼の念を漏らした。此の事が銃丸に擊たれたゝめに失明した青年を想ひ起させた。またこの事が更にピストル自殺を遂げたもう一人の青年の肖像を想ひ出させた。その青年の名前は私の最初の患者の名前と同じであつた。尤も二人の間には少しも親類關係はなかつた。ところがその名前は、この二人の少年患者から來た心配な危懼の念が私自身の家族の一員に轉移された後になつて漸く私に分つたのである。

かやうに『自己關係』の絶えざる流れが私の思想の中を貫流してゐるのであつて、私はその流れに關しては通例少しも知るところがないのであるが、然しそれはかやうな固有名詞忘却を通して自己を露はすのである。恰も私は他人に就いて聞いた事は凡て私自身の人柄と比較することを餘儀なくされ

るかのやうに思はれ、また恰も私の個人的複合體は他人から何か聞く毎に掻き立てられるかのやうに思はれるのである。これは私の人柄が個人的特異性を持つてゐるからだとは、どうしても考へられないやうに思はれる。その反對に、これは吾々が一般の事件の外部に於て摑む道を指示するものに相違ない。私は他の人々も私の經驗によく似た經驗に遭遇するだらうと云ふ假定を下して差支へない理由を、幾つも持つてゐるのである。

此の種の實例の最も好適なものを、レーデラーと云ふ紳士が個人的經驗として私に報告した。彼がヴェニスへ新婚旅行をしてゐた時に、彼はほんの一寸近づきになつてゐた男に邂逅した。そしてその男を妻に紹介しなければならなかつた。彼は餘りよく知らないその男の名前を忘れてしまつたので、第一回目の時はその名を分らぬやうに口の中で言つて困惑を脱したが、二度目にその男に會つた時には――兩方ともヴェニスに居れば、また會ふのは避け難いことである――彼はその男を傍へ呼んで、どうか彼が不幸にして忘れてしまつたその男の名前を彼に告げて困難から救つて貰ひたいと賴んだ。そのよく知らぬ男の答は、人間性に關する優れた知識を指示したものであつた。曰く、『私はあなたが私の名前を了解しなかつたと云ふことを容易に信じますよ。私の名前はあなたの名前と同じなんですもの――卽ちレーデラーつて言ふんですもの！』と。

人は自分の名前を他人の中に發見した場合に、微かに不快の感情が起るのを禁じ得ないものである。私は最近業務時間中にエス・フロイトと云ふ名前の人から診察を乞はれた時、それを非常にはつきり感じたのであつた。ところが私は、私自身の批評家の一人から、此の點に於ては彼は全く反對の態度を取ると云ふことを確言されてゐる。

(f)個人的關係の影響は、ユング(一)の報告した次の實例の中にも矢張これを認めることが出來る。

(一)『早發性癡呆の心理』四五頁

『Y氏は或る婦人と戀に陷つたが、その婦人はその後間もなくX氏と結婚した。Y氏はX氏の舊知で、X氏と商賣上の關係を持つてゐたにも拘らず、X氏の名前を何度も忘れた。そして、Xに文通しようと思ふ時に、他の人々にXの名前を訊かなければならぬことが度々あつた。』

然しながら、忘却の動機は此の例の方が前の例よりもづつと明白である。前の例は個人的關係の座の下にあつたのであるが、此處では忘却は明らかに幸福な戀仇に對するY氏の嫌惡の直接的結果なのである。卽ちYはXに關する事は何も知りたくないのである。

八　年齢の觀念と忘却の第一例

(g)フェレンツィの報告した次の例の分析は、代用思想(Signorelli に對する Botticelli-Boltraffioの如き)の説明によつて特に敎訓的なものであつて、此の例は自己關係が如何にして固有名詞忘却の原因となるかを、前と稍異なつた方法を以て示すものである。

『精神分析に關して何か聞いた或る婦人が、精神病學者 Young (Jung) の名前を想ひ出すことが出來なかつた。

『その名の代りに、Kl. (名前) ―― Wilde ―― Nietzsche ―― Hauptmann と云ふ名前が彼女の頭に浮んで來た。

『私はその Young (Jung) と云ふ名を彼女に話さないで、あらゆる思想に對する彼女の自由な聯想

を反覆して貰ひたいと要求した。

『Kl に對しては、彼女は直ちに同氏夫人のことを、年の割合に非常に健康さうに見える、おめかしの氣取つた人だと思つた。「あの人は年を取りません。」ワイルドとニーチェに關する一般的な主要な概念として、彼女は「精神病」と云ふ聯想を與へた。それから彼女は笑談に次のやうに附け加へて言つた。卽ち、「フロイト派の人達は、自分で氣違ひになるまで精神病の原因を探求し續けるでせう。」と。彼女は更に言葉を續けて、「私はワイルドとニーチェには我慢が出來ません。私にはワイルドとニーチェの思想が分りません。聞けば二人はどちらも同性愛に陷つてゐたさうですね。ワイルドは若い（Young）人達と關係して居りました。」と言つた。（彼女は此の文句の中で正確の名前を言つたにも拘らず、依然としてそれを想ひ出すことが出來なかつた。）

『ハウプトマンに對しては、彼女は half（半分）と云ふ語と youth（青春）と云ふ語を聯想させた。そして私が youth と云を語に對して彼女の注意を促した後になつて、漸く彼女は自分が Young（Jung）と云ふ名前を求めてゐたのだと云ふことに氣がついた。』

三十九歲の時夫を失つて、その後再婚する見込のなかつた此の婦人が、青春や老年を思ひ出させるやうな懷舊談を避ける理由を充分持つてゐたのは、明白な話である。玆に注目すべきは、所要の名前の隱匿思想が、何等發音上の聯想を伴はないで、單純な內容上の聯想として意識の表面に浮んで來たことである。

九　後悔及び嫌惡と忘却

(h)その當人が自分で說明を下した次の固有名詞忘却の實例は、前の實例よりも更に異なつた、非常に動機の美事なものである。

『下級生の課目として哲學の試驗を受けてゐた時に、私は試驗官からエピキュラスの敎に就いて質問され、彼の死後數世紀經つてその敎を繼承した者は誰であるか知つてゐるかと尋ねられた。私はそれはピエール・ガッセンディであると答へた。私はその二日前に、カフェーにゐた時、偶然にも誰かゞガッセンディをエピキュラスの後繼者として話してゐるのを耳にしたのであつた。どうしてこれを知つたと云ふ質問に對して、私は大膽にもガッセンディに對して長い間興味を抱いてゐたのだと答へた。此の結果私は magna cum laude と共に免狀を得たが、不幸にして後になつて矢張此の結果として、ガッセンディと云ふ名前を忘却する傾向が永續的に生じてしまつた。今でも尙ほ如何に努力して見ても此の名前を記憶することが出來ないのは、良心に疚しいところがあるからだと私は信じてゐる。私はその當時はその名前を知つてゐるやうな課程は持つてゐなかつたのである。』

此の試驗のエピソードの思ひ出に對する說話者の強い後悔の念を適當に了解するためには、吾々は彼がどんなにドクトルの學位を尊重してゐるか、またこれが他の物をどんなに多く代表してゐるか、それを認めてゐなければならない。

或る都會の名前を忘却した實例をもう一つ此處に加へて置かう。これは恐らく前に擧げた諸例程簡單な例ではないが、然しかう云ふ研究により親しんでゐる者に取つては、信ずることの出來る貴重な例に見えるであらう。或るイタリーの都會の名前が、或る婦人の名と發音が非常によく似てゐるために、記憶から退いてしまつた。その婦人の名は、此の報告の中では確かに遺漏なく取扱はれなかつた

ところの樣々の追憶に關係を持つてゐた。此の忘却の例を自分自身の中に觀察したエス・フェレンツィ博士は、それを夢若しくは色情觀念として取扱つたが、それは全く正當である。

『今日私は數人の舊友を訪問した。そして會話は北部イタリーの都市のことに轉じた。誰かが北部イタリーの都市は今尙ほオーストリアの影響を示してゐると言つた。かやうな都市が二三引用された。私も亦一つ擧げようと思つたが、自分が其處で非常に愉快な日を二日送つたことを知つてゐたにも拘らず、その名が頭に浮んで來なかつた。勿論これはフロイトの忘却說に少しは一致するものである。所要の都會の名前の代りに、「カプア（Capua）――ブレシア（Brescia）――ブレシアの獅子」と云ふ考が出しやばつて來た。私は此の獅子を大理石の彫像の形に於て客觀的に眼の前に見た。然し私は直きに、その獅子がブレシアの自由の像の獅子（私はそれを繪で見ただけであるが）よりも、私がルセルン（Lucerne）で見た、チュイユリー（Tuileries）で戰死したスイスの護衞兵の名譽を記念するために建てた記念碑の上の大理石の獅子に似てゐることを認めた。到頭私は所要の名前を思ひついた。それはヴェロナ（Verona）であつた。

『私は直ちに此の記憶喪失の原因を知つた。それは私がその時訪問した私の家の以前の女中に外ならなかつたのである。その女中の名はヴェロニカ（Veronica）と云ふので、ハンガリー語ではヴェロナであつた。彼女の顏付が無愛想であつたゝめと、聲がしはがれた金切聲で、我慢が出來ぬ程出しやばりであつたゝめに、（彼女は長い間勤めてゐたゝめに出しやばる權利があると考へてゐた。）私は彼女に對して非常な嫌惡を感じてゐた。また彼女が私の家の子供等に對して壓制的な取扱ひをするのが、私には我慢が出來なかつた。そこで私は代用思想の意味を知つた。

『Capua に對して私は直ぐ caput mortuum（死んだ頭）を聯想した。私は屢々ヴェロニカの頭を頭蓋骨に譬へたのであつた。ハンガリー語の kapzoi（强慾なこと）が屹度此の置換の決定要素を供給したのである。自然私は矢張、Capua と Verona を地理的觀念として、また同じリズムのイタリー語として聯關させたもつと直接的な聯想をも發見した。

『此の事はブレシアの場合にも同じであつた。此處でも亦私は隱れた觀念聯合の側線を發見したのである。

『その當時の私の嫌惡は非常に烈しいものであつた。その結果私はヴェロニカを非常な醜婦だと考へた。そして誰かゞ彼女を戀すると云ふ事實に對して、屢々驚愕の聲を發した。「あんな女に接吻すると嘔吐を催すに相違ないよ。」私はさう言つた。

『ブレシアは、少なくともハンガリーでは、獅子でなく外の猛獸と聯關して口にされることが非常に多い。ハンガリー並びに北部イタリーで最も嫌はれてゐる名はヘイノー將軍（General Haynau）で彼は簡單にブレシアの鬣狗と呼ばれてゐる。憎らしい暴君のヘイノーから一の思想の流れがブレシアの上を流れてヴェロナ市に達し、他の思想の流れが嗄聲の墓掘り動物（これは死者に對する記念碑の思想に對應するものである。）と云ふ觀念の上を流れて、頭蓋骨と、ヴェロニカの不快な器官に達してゐるのである。そのヴェロニカの不快な器官は、私の無意識的精神の中で非常に殘酷な侮辱を受けてゐたのである。年期中のヴェロニカは、ハンガリー人及びイタリー人が自由のために惡戰苦闘をした後にオートスリアの將軍ヘイノーがしたやうに、厭制的に支配してゐたのである。

『ルセルンはヴェロニカが主人達とルセルンの附近で過した夏の觀念と結合してゐる。スイスの護

衛兵はまた、ヴェロニカが家の子供達ばかりでなく大人までも虐げ、かやうにして「ガルド・ダーム(Garde-Dame)」の役目を演じたと云ふことを想ひ起させてゐる。

『ヴェロニカに對する私の此の嫌惡は、意識的には長い間壓倒されて來た事柄に屬してゐると云ふことを、私は明白に認める。その後彼女は風采も態度も變つてしまつた。それは彼女に取つて非常に得な事だつた。彼女の風采と態度がかやうに變つてしまつたので、私は眞面目な尊敬の念を以て彼女に會見することが出來るのである(勿論私はさう云ふ機會は殆ど見出さないのであるが)。けれども例によつて私の無意識は前の印象の方に餘計執拗にこびりついてゐるのである。卽ち私の無意識は昔の怨恨を胸に懷いてゐるのである。

『チュイユリーは第二の人物に對する暗示を示したものである。第二の人物と云ふのは、年を取つたフランス婦人のことで、彼女は實際に家の女達を「護衞」し、さうして誰からも非常に尊敬され、また幾分恐れられてゐた。長い間私は彼女のフランス語の會話の élève(生徒)であつた。此の élèves と云ふ語が、私が自分の現在の宿屋の主人の義理の兄弟を北部ボヘミアに訪問した時に、田舍の人達が山林學校の élèves(生徒)のことを löwen(獅子)と呼んでゐるので大笑ひしなければならなかつたことを想ひ起させる。』

十　年齡の觀念と忘却と第二例

(i)次に擧げる實例も亦、その當時當人を支配[一]してゐた個人的複合體が、廻り遠い方法を以て固有名詞の忘却を惹起せしめる所以を示すことが出來る。

（一）Zentralblatt fur Psychoaralyse 1,. 9, 1911

今から六ヶ月前にシ、リーを一緒に旅行してゐた二人の男――一方が他方より年上であつた――が愉快で面白かつた日の懐舊談を交換した。

『はてな、僕等がセリナントへ旅立つ前の晩を過した場所の名は何と言ひましたつけねえ? カラタフィニ（Calatafini）ぢやなかつたですか?』と年下の男が訊いた。

年上の男は次のやうに言つてこれを斥けた。『いやさうぢやありません。然し僕もその名を忘れてしまひましたよ。その場所の細い點は殘らず完全に想ひ浮べることが出來るんですがねえ。誰かが名を忘れた話を聞くと、何時でもそれが直ぐ私の中にも忘却を生み出すのです。一つその名を探求して見ようぢやありませんか。僕はカルタニセッタ（Caltanisetta）と云ふ名より外には想ひ出せません。それは勿論正しい名ぢやないんです。』

『いや、その名はWで始まつてゐるか、或はWを中に含んでゐますよ。』と年下の男が言つた。

『然しイタリー語にWはありませんよ。』と年上の男が答へ返した。

『實は僕はVと云ふ積りだつたのです。で、僕がWと言つたのは、僕は母國語ではWとVを取換へる習慣になつてゐるからです。』

ところが年上の男はVにも反對した。彼は更に語をついで、『僕は既はシ、リーの地名を澤山忘れてしまつたと思ひますよ。假に僕等がそれを探し出して見るとしませう。例へば、昔エンナ(Enna)と呼ばれた丘の上にある場所の名は何と言ひましたつけねえ?』と附け加へた。

『あゝ、僕はそれを知つてゐます。それはカストロジォヴンニ（Castrogiovanni）つて言ふんです。』

次の瞬間年下の男は忘却した地名を發見した。彼は「カステルヴェトラノ (Castelvetrano)」と叫んで、想像したVがその中にゐるのを實證することが出來たので喜んだ。

　年上の男は暫くの間は依然として再認の感じを味ふことが出來なかつたが、その名を承認した後になつて、それが記憶から逸してしまつた理由を述べることが出來た。彼は次のやうに考へたのである。『明らかにそれは後半の vetrano が veteran (老功の) を暗示してゐるからです。僕は年を取ると云ふことを自分が少しは考へたがつてゐると云ふことを、承知してゐるんです。そしてそのことを思ひ出すと、奇妙な反撥を感ずるんです。卽ち、例へば僕は最近非常に重きをなしてゐる或る友人のことを、彼は「づつと前に青春時代を過してしまつた。」と云ふ、最も明瞭な言葉で思ひ出したのでした。と言ふのは、これより前に彼は一度此の上もない阿諛的な口調で、「僕はもう青年ぢやないんです。」と言つたことがあるからです。僕の抵抗作用が Castelvetrano と云ふ地名の後半部に向けられたと云ふことは、此の地名の初めの音が代用名詞の Caltanisetta に戻つて來てゐると云ふ事實を見れば分ります。』

『Caltanisetta と云ふ名前そのものに就いてはどうなんです?』と年下の男は訊いた。

『そいつはいつも僕には若い女の氣に入りの名前のやうに思はれたんです。』と年上の男は是認した。少し經つてから彼はかう附け加へて言つた。『エンナに對する名前も矢張代用名に過ぎなかつたんです。そして、合理化作用の助けを藉りて出しやばつて來た Castrogiovanni と云ふ地名が、最後の地名の Castelvetrano が veteran (老功の) を暗示してゐるやうに、明白に giovane (若い) を暗示してゐると云ふことが、今僕の頭に浮んでゐます。』

年上の男はかやうにして此の地名の忘却を說明し了せたと信じた。が、年下の男をかやうな記憶の失敗に導いた動機は何であるかと云ふことは、研究されなかつた。

十一　固有名詞忘却の特性

場合によつては、固有名詞の忘却を說明するために、精神分析的技術のあらゆる方策を用ひなければならぬことがある。かやうな勞作の實例を讀みたいと思ふ者は、イー・ヂォーンス敎授の通信(一)を參照して貰ひたい。

(一) "Analyse eines Falles von Namenvergessen" Zentralblatt für Psychoanalyse, Jahrg II, Heft 2, 1911.

若し私が、後章の題目で考察される見解を殆ど全部此處で說明することを厭はなかつたならば、私は固有名詞忘却の實例を倍加して、更にづつと討議を延ばすことが出來たであらう。然し私は、失禮ながら此處に報告した分析の結果を若干の文章の中に包含せしめることにしようと思ふ。

固有名詞の忘却、と云ふよりも寧ろ固有名詞の喪失若しくは一時的忘却の機構は、その時は無意識な或る見馴れぬ思想の流れのために、その固有名詞の有意的再現が妨害されると云ふ點にある。妨害された固有名詞と妨害する複合體の間には、始めから關係が存在してゐるか、或はそのやうな關係が――多分人爲的手段によつて――表面的(外部的)聯想を通して作られてゐるものである。

自己關係複合體(個人的複合體、家族複合體、若しくは職業的複合體)が、妨害する複合體の中で最も有效なものであることを證してゐる。

幾多の意味を持つてゐるために若干の思想聯合(複合體)に屬してゐる固有名詞は、他の思想聯合

に屬してゐるより強烈な複合體のために、一連の思想に對するその關係を妨害されることが多い。記憶を通して苦痛の覺醒を避けるのが、かやうな妨害の動機の中に交つた目的の一つである。大體から言つて、吾々は二つの主なる固有名詞忘却の場合を區別することが出來る。卽ち、固有名詞そのものが或る不快な事柄に觸れてゐる場合、若しくは固有名詞がかやうな結果の影響を受けてゐる他の聯想と關係せしめられる場合がそれである。其故固有名詞は、それ自身のために妨害されるか、若しくは再現する場合の遠近の聯想的關係のために妨害されるものである。

此の一般的原則を再審して見れば、固有名詞の一時的忘却が吾々の精神機能の最も頻繁に起る間違つた行爲として觀察されると云ふことが、容易に吾々に信じられて來るのである。

然しながら、吾々は以上で此の現象の特異性を全部記述したとは到底言はれない。私は固有名詞の忘却が極めて傳染的であると云ふ事實に對しても、注意を促したいと思ふのである。二人の人が話をしてゐる時に、その中の一人がこれ〱の名を忘れてしまつたと言つただけで、同じ記憶錯誤を相手に誘發することが屢々あるのである。然し忘却が他から誘發された場合には、何時もその求める名はたやすく意識の表面に上つて來るものである。

また固有名詞が連續的に忘却される場合もある。その場合には、固有名詞の連鎖が一つ殘らず記憶から退行するのである。若し吾々が、記憶を逸した或る固有名詞を發見しようと努力してゐる最中に、それと密接な關係を持つてゐる他の固有名詞を見出す時は、かやうな新しい固有名詞も亦記憶から逸することが屢々あるものである。卽ち、まるで容易に除去されない妨害物が存在してゐることを示さうとでもするかのやうに、忘却がかやうに一の固有名詞から他の固有名詞へ跳んで行くのである。

醫餘偶語（三）

醫學博士　下田光造

「狂」

疾病を表はす言葉の中「狂」といふ言葉位不愉快なものはない。此語は精神病が一の疾病と認められなかつた時代の遺物として捨てゝしまひたいものである。英語の Insane 獨逸語の Irresein は此狂の字に相當する樣であるが、呉教授が癲癇狂だの躁狂だのと云つて居た從來の病名を廢して、躁病とか癲癇性精神病とかすべて「病」「精神病」といふ文字に更へられたのは最も適切なことである。

余は日々の新聞や雜誌に「狂人」とか「癲狂」といふ樣な文字を見る毎に名狀し難い不快感情の浮ぶを覺ゆる。恐らく誰でも左樣であらうと思ふ。況んや精神病者の家族、或は自ら一度精神病を經驗した人などには、此文字は如何に呪ふべき文字であらう。世人が今日でも尙ほ精神病院を怖れ、これに入院せしむることに躊躇し、治療の時機を失することの多いのは、種々の原因もあるが、此「狂」といふ文字が世に存することも大いに手傳つてゐると思ふ。

一體精神病者といふものは「狂人」といふ言葉から聯想さるゝ樣な不快な實在では決して無いのである。精神病院で半年か一年も病者を取扱つた人は誰でも彼等の憐むべく愛すべき者であること

を感じ、自然に「狂」といふ言葉を口にするのが厭になるものである。

素人はともかくとして精神病者に親しみのある人々、即ち醫師、看護者、變態心理研究者等は此「狂」なる不快な言葉を使はない様にしたい。實際また使ひ得ない譯なのである。

余は思ふ、精神病専門の醫師にして此語を口にし此文字を使用する者があるならば、そは決して精神病者の知己ではないと。

同性愛

若返り法で有名なスタイナッハ教授は、同性相愛症の本體に就いて特異な意見を發表してゐる。氏によると、同性愛は生殖腺の組織の異常に基くものである。即ち其人の生殖腺の中には、兩性の思春細胞(生殖腺の中には生殖細胞即ち精蟲又は卵を作る細胞の外に間細胞——ライヂッヒ氏——と稱する細胞があつて、此間細胞の分泌するホルモンによつて性慾乃至二次的性徴が發現するとの考——但し此考は今日まだ確定されたものではない——から、スタイナッハ氏は此間細胞を思春腺と名付けて居るのである。)が混在してゐるといふのである。氏は一九一八年に六人の同性愛男子の睾丸を檢査して此事實を證明したと云ひ、尚ほ同性愛者の睾丸を摘出し去つて其代りに健康人の睾丸を皮下に移植したところ、同性に對する愛欲は消失し、尋常の異性愛が現れたといふて居る。即ち同性愛は手術によつて治癒するといふのである。其後一九二〇年にミューザム氏は同性愛の二例を手術した。一例は睾丸を摘出せず其儘に置いて別に健康者の睾丸を移植し、一例は一つだけ睾丸を採り去り一つを植して他の睾丸を移植して見たのであるが、何れも同性愛が消失し異性愛が生じた。

此結果によると、同性愛は矢張り睾丸移植によつて治癒するが、併し其際本人の睾丸を摘出する必要はない。其儘に殘して置いて他の睾丸を一つ

餘分に附け加へればよいといふことになる。同じ年にフォン・ハンゼマンとベンダの兩氏は同性愛者の睾丸を顯微鏡的に檢査したが、普通人の睾丸と其組織に何等差異がないことを發見した。此主張は前のスタイナッハ氏の所見と大分違つて居るのであるが、スチーベ氏はスタイナッハ教授の論文やそれに附けてある圖など批評して、これはスタイナッハ教授が人間の睾丸の組織に關する智識が足らぬことを證するものであつて、男女兩性の思春細胞があると見たのは誤りであると隨分ひどく攻撃して居る。

斯樣な譯で今日では同性相愛症が生殖腺移植手術によつて治癒するといふことは略確實であるが、本症者の生殖腺が兩性的組織を具有して居るといふスタイナッハ氏の主張は、若し事實ならば非常に面白い發見であるが、まだ確定しないわけである。

それで今日のところでは同性愛症の原因はクレペリン其他多くの精神病學者の信ずる如く、變質や不良なる環境や教養に歸せらるべきものか、或は先天的に身體上の變調があるのであるか確定して居らぬ。

序でに余のところに最近通報せられた同性愛症の例を附記して置く。

その一

私の親しい友に其れは女性化した一人の男性がある。城崎驛から三つ東の驛所在の小やかな町に屬した或農家に生れた彼は、小供の時から遊び相手は女の兒ばかりだつた。

小學校に通ふ樣になつても彼は村の小娘等を家に招んでいつも遊んだ。其の頃から彼は彼の姉の傍にゐて姉に教はり乍ら、裁縫の稽古をし出した。料理もやつた。かうして全く女性としての凡ての技能を有して、彼は十五六歳で姫路師範學校に入學した。併し不幸彼は二年の始め何故か學校を廢めて家に歸つた。そして翌年其町の實業學校に入つた。

彼の名は〇〇〇。學生時代に「此の奧に眼あり」とか「章魚」とかいふ有難いニックネームを頂戴してゐた。彼は全く章魚の樣に煮え切らない男で、彼が學校で一番弱つたのは體操だ。就中兵式教練と機械體操には泣きたい樣にしてゐた。彼が師範を廢めたのも大抵そんな事かららしい。

彼は學生時代寄宿舍にゐてよく皆からからかはれた。彼は夜に

なると舍監に隱れてこつそり、寢室を脫け出して可なり隔たつた彼のクラスメートの一人のゐる室にと出掛けて行つた。兎角學生時代殊に舍生等にはよく「少年」とか「ユース」「稚兒」とか云つて美しい少年を愛する風習がある。所が彼のはさうでない。凜々しい色の黑い「根黑」といふ尊稱を貰つてゐた活潑な廣島縣の男で、年もかなりとつた男の所へ舍則を破つて寢に行くのだ。最初は彼も遠慮しい〳〵だつたが、終りには公然と行つた。そして消燈後ひそ〳〵と語らふ二人の聲がよく彼等の室から洩れてゐた。

或る時其の男が感冒の氣味で學校を休んで一週間許り寢てゐた。其の時彼は絕えず枕頭に侍して看護を一手に引受けてかひがひしい女房振を發揮してゐた。其の熱心と眞摯な態度には級友齊しく驚異の眼を以て迎へた。

彼は極く無口な、一言も口にせぬ日の多い位な、そして自分の責任を感じた事には勉强でも實習でも熱心に專心にやつたものだ。

彼は今頃はどうしてゐるか知らないが、恐らく女と結婚するなどとは考へてゐないだらう。

その二

私は土佐の片山里に浮世の風潮も知らず十九歲の今日まで育つてきた女ですが、不幸のため一家擧つて堺に來ましてある會社の女工と成つて其の日を送る儚ない女です。私が現在の會社に入社して働く樣になりました丁度其頃、上村樣とて今年二十三歲になる方が幡多郡の某村から當社に來て居られました。私も慣れるにつれて朝夕顏を合す度に言葉を交すやうになり、ことに同國人でありますせいか、種々と親切に世話をして吳れますし、私も異鄕の空で寂しく思ふ折、同國人の懷かしさ、休日には何時も上村樣と遊びに行きました。

頃しも七月の盆前の事でありました。餘りの暑さに近なる北濱公園に納涼に行きまして、とあるベンチに腰を下して眼前の海を眺め、種々と故鄕の噂や思出話に花を咲かせて樂しく語り合つてゐますうち、上村樣は思ひ出した樣に、

「K樣私折入つてお願ひがあるのよ。」と意味ありげに私の顏をのぞき込みますから、

「改まつて如何したのですか。」と尋ねますと、俄かに上村樣は態度が一變して言語が男性的になり、

「貴女はまだ何も知りますまいが、私は男女兩性ですよ。……………………………………………………………………………………………………。」とさも得意さうな顏をして、「お願と云ふのは他ではないですが、貴女さへ御迷惑でなければ將來私と精神的××的交際を許して吳れませんか。」と申しますから、餘りの事に私も暫らく呆然として何と返事の仕樣もありませんでした。それから五六日位經つて私の許に艷書を寄越しましたけれども、其儘打捨てゝ置きました。

或日上村樣は御自身に來られまして、私に厭らしい事ばかり申しますから、私も餘りの事に腹立たしくなりまして、

「絕對に出來ません。たつてと申さるゝなら仕方がありません。取締の方や皆さんに發表しますが構ひませんか。」と申しますと、俄かに優しく素の女の態度に歸り、

「K樣濟みません。決して再びと申しませんから、どうか今までの事は御氣に留めず水に流して忘れて下さい。御許し下さい。」と

詫びますから」私も別に人にも語らず其儘にして置きました。それから上村樣は今迄のやうに餘り私に言葉を交さなくなりまして、朝夕の挨拶位に過ぎませんでした。

斯うした間柄に成りまして以來、上村樣とは全然交りを絶ちました。田村樣と云ふ方の許へも艷書を送り、厚かましくも田村樣に直々「僕の要求を聞いて下さい。」等と膝詰談判に、田村樣も恐ろしがつて係の方にも無斷で自宅に歸りました。

其後花美樣と云ふ今年十八歲になる方が中國あたりから來て居られました。上村樣は早くも前同樣の手段で妾の如くして暮して居られました。何時とはなしに取締の方や會社側の方に知れまして、居るに居られず密かに退社して、目下關西の某會社に在られますとか。其後の噂は存じません。

上村樣は社内でも何時も男性的で、毎朝出勤の時刻になれば小柄な中肉の體を大股に步き、後姿は男性と少しも異なるところがありません。

人々の風評に上つた主眼は實物兩性で、…………日常の……………………………言葉は十中八九まで如何にも男性的です。

その三

私より三つ年上の從姉は卵巢の病氣で手術を受けました。其の後從姉は繪を學ぶために上京しましたが、時々私へ來る手紙にはおかしい事が書かれてありました。「あゝ早く成功して故鄕の人等を見返してやりたい、その成功の曉には可愛いゝ喜代ちやんと共同生活が出來る。」とか、「いとしい私の戀人よ。」とか、はじめの内は、從姉さん少しふざけてゐるのかしらと思つてましたが、だんだんと「喜代ちやんも獸の樣な世間の男性に誘惑されちや厭よ。何うか私一人の愛に生きて頂戴。」とか、「喜代ちやんは私の魂だよ。」なんて書いてあります。それがだん／＼と嵩じて來て「僕の戀人」「君は僕の××だよ。」と可成り露骨に、丁度男性が異性にでも云ふ樣な事が何時も書き列れてあります。

從姉の兄のKさんは私の宅へよく來られ、兩親もKさんを自分の子の樣にしてますし、兄妹の一人もない私もKさんを實の兄の樣に思つて、日曜などは一緒に寶塚や京都など〈遊びに行つた事を知らしてやりますと、

「喜代さんは僕を裏切るのだね。世界中の男性は皆獸のやうな者ばかりだと云つてるのに、Kだつてその一人だよ。僕は喜代さんに裏切られたらとても日本の地に止まつてはゐられない。旅から旅へ世界中放浪するばかりだ、何うか僕の魂よ。迷はずにお吳れ、僕を二度と悲しませずにお吳れ。」と、さう云ふ樣な事が幾枚もの原稿用紙に、くり返し／＼記されてあります。現在の自分の兄を、しかも不幸な妹思ひのやさしいKさんを、その後からは手紙毎に罵つて來ます。

ところへ最近寫したものだと云つて從姉の寫眞が送られました。それはこの春の事です。その寫眞を見まして家中驚きの聲を上げました。それもその筈です。あのあでやかな、そして人形の樣な美しい、靜かな面影は少しもなく、頭と云つたら引きつめたぐる／＼卷で、着物は上下揃ひのこまかい縞で、それも無造作に着て、セルの袴はいて鞄下げたところは、一寸見て男か女かの區別は付かず、丁度明治初年の荒くれ書生そつくりです。一目見た父まがるで「男ぢやないか。」といつた言葉に、私は何かしら胸がぎ

くりとしました。

この十月Kさんをいよ〳〵私の養子として、來年Kさんの卒業と同時に迎へる事が定まりました。その事を叔母からでも知らしてやつたのでせう。恐ろしい手紙を私は受け取りました。

「喜代さんはKと結婚するんだつてあれは嘘だらう。いやきつと嘘にちがひない。何うか嘘だと誓つてお呉れ。僕は喜代さんなしで生きられる身ではない。もし喜代さんが僕を裏切つて他の人と結婚するのなら、僕は自分の命をたつ前に喜代さんのその白い首を狙つてるものと思つて呉れ給へ。」と書いてあります。かうした手紙をもう五六通受取りました。ごく最近には、

「來年のお正月にはいよ〳〵散髪するのだよ。そして喜代さんを僕の宅に迎へて、僕は毎日小鳥の樣な若い喜代さんの手を取つて散歩する。」と云ふ樣な事が書いてありました。よもやと思ひつゝも私は近頃來る手紙〳〵に身ぶるひを感じます。あまり熱心のあまり氣でもふれなすつたのではないかしらと思つても、父へ來る畫伯からのお手紙には、「男性的な意志の強さと、その畫風は奔放自在だ。きつと閨秀畫家の一異才だらう。」と何時も賞められて書かれてあります。それを見ましてはまさか氣がふれたやうでもないのですのに。今まで從姉からの手紙は誰にも告げず、又見せずにゐましたが、從姉の要求が同性同志には云ふべからざるものなので、私も決心して皆兩親に見せました。この月のはじめそれがため叔父が上京しました。それにしても從姉があゝまで男性化した原因は皆の疑問ですが、もしかすると先年の卵巣手術が原因してるのではないかと氣が付きました。

「ほくろ」と腦

易者より見た黒痣（ほくろ）には色々の意味があるさうである。上唇の正中線に在る黒痣は好色を意味するとか、左の下眼瞼の一定の場所にあるのは子に縁のない徵であるとか、それ等人相學上のことは余は少しも知らぬ。只余の研究してゐる神經病學の方から見て黒痣には左の如き意義がある。

黒痣は赤痣、疣贅等と共に母斑といふ病名に總括せらるゝ皮膚の畸形である。卽ち先天性の變質徵候と見ることが出來る。此畸形は遺傳性のものが多い。黒痣の多い人を調べて見ると、大抵は兩親の何れかに黒痣が澤山あると答へる。

此皮膚の畸形が腦（或は精神）とどういふ關係があるか、一寸考へると腦と皮膚では大分かけ離れた身體組織であつて關係はなささうであるが、實は左樣でない。それは人體の發生學上から容易に推定さるゝことである。

精子と卵と結合して一の個體が生じ、此一細胞

が分裂して人間が生ずるのであるが、此原細胞が分裂して一つの纏つた個體の出來るまでの經過卽ち胎生期の極めて早期に於ては、分裂した細胞は只內外二層に竝列した袋をなしてゐるのみであつて、此外層卽ち外胚葉は後に腦と皮膚とに分れ、內層卽ち內胚葉から他の臟器が組成せられるのである。卽ち腦と皮膚とは胎生の早期には極めて密接の關係を有するものであつて、此時期若くは其以前に於て何か故障を受くることがあれば、後來それが皮膚と腦といふ非常に緣遠い臟器に分れた後に於ても、兩方は共通な性質を有することがあり得る筈である。

從つて皮膚に母斑の如き先天性畸形が顯著に存する樣な場合には、腦の或る部分にも類似の畸形の存することがあり得るのは不思議ではない。理論上ではさうであるが、實際上はどうかといふに、實際上にも左樣な事實が屢々存するのである。

結節性腦硬化症といふ病氣がある。その臨牀症候は白癡若しくは癲癇の症候と同樣であるが、解剖上には腦の處々に粟粒大から栗實大の大小不定の硬結を發見し、其硬結の組織は先天性畸形に相當して居る。此畸形によつて精神薄弱が起り、或は癲癇性痙攣が起るのである。卽ち此病氣の本體は腦に於ける此硬結に存するのであるが、然しそれは解剖上發見せられるものであつて、臨牀上には只精神薄弱又は癲癇發作を認むるのみである。然らば今精神薄弱又は癲癇の病名を見て、その人は單純の白癡若しくは癲癇者ではなく、結節性腦硬化症といふ興味ある病氣であるといふことを臨牀上診定することが出來るかといふに、或る場合にはそれが可能であるのである。それは本病者が屢々（約三十五%に）皮膚殊に顏面皮膚に一種の特有な母斑を持つて居ることによるのである。此母斑は一種特有な外觀を呈してゐる。矢弱り粟粒大から小豆大の小隆起であつて、赤味を帶びた黃褐

色を呈し脂肪で光つて居る。數は非常に澤山である。その發生部位が固有で、鼻梁を中心として左右相對性に頰部に散點してゐる。時としては其數が非常に多く、額や頤の部、胸部までも擴がつて居ることがある。此小結節もまた組織學上畸形に屬するもので母斑の一種である。時には外觀が一寸「にきび」に似て居る樣であるが、併し注意して見ると非常に違ふものである。此母斑はプリングル氏によつて皮脂腺腫の名を得て居る。ところで今日まで學者の觀察經驗によると、白癡若しくは癲癇者で同時に皮脂腺腫を發見するものは、必ず腦にも前述のやうな硬結を發見するのである。卽ち此顏面の母斑が腦の狀況を知る根據となることが確かである。

一體皮脂腺腫のみならずすべての種類の母斑が精神病殊に癲癇と白癡に多いことは、既に癲癇研究で有名なフエレなども記載して居る。殊に黒痣は癲癇者には非常に多いもので、フエレも癲癇者一六七八中一〇五人（六三%）に黒痣を見たといつて居るが、吾々の診察所に來る癲癇者にも黒痣を持つて居るものは可なり多い。勿論黒痣といふものは可なり多いもので、大抵な人に小さな「ほくろ」が一つや二つ無い人は無いが、それが癲癇病者には屢々非常に多數に且つ大きいのがある。顏面や首などに多い。

母斑の一種である疣贅もまた癲癇乃至白癡に多いことが知られて居る。殊に面白いのは其好發部位であつて、卽ち一つは頸殊に項部又は側頸部に多く、一つは腰部である。

之を要するに皮膚に黒痣、赤痣、疣贅等の所謂母斑が多數に存するといふことは、腦の狀況を察するに甚だ有意義のものである。

神經細胞の再生

吾々の身體各臟器は細胞及び其突起から出來て居るのであるが、併し其細胞は絕えず新舊代謝をして居るもので、昨日の皮膚は最早今日の皮膚で

はない。然るに此細胞代謝の決して行はれない組織が一つある。それは神經細胞である。吾々の神經細胞には再生機能がない。從つて胎生期から老衰死に到るまで同一の神經細胞として存續して居るのであつて、決して表皮細胞のやうに古いものが剝落ちて、新らしいものが幾らでも出來て之を補ふといふ樣なことはない。それであるから何かの原因によつて神經細胞の一個でも消失することがあると其代りは決して出來ないから、其細胞の受持つて居た機能だけは永久に失はれることになる。多くの機質的腦疾患が其疾病機轉は治癒しても、永久に癡呆狀態とか麻痺とか所謂脫落症狀を殘すのは此ためである。

此事實は一見甚だ不都合千萬であつて、神經細胞もまた表皮細胞と同樣に再生機能があり、從つていつでも古いものはなくなつて新らしいものが出來て吳れゝば、吾々の腦も日々に新たなりで、老人性癡呆などにならないですむと思はるゝかも知らぬが、實はさうではないので、現在の儘であつて貰はなければいけないのである。若し神經細胞が表皮細胞の如く日に日に新たになるのであつたならば、吾々の精神は何歲になつても胎兒乃至初生兒と同樣で、單なる感覺機能はあるかも知らぬが、知覺、記憶、聯想、其他あらゆる精神作用は行はれないことになる。何となれば新に生ずる幼嫩なる神經細胞は單に細胞としての性質を有して居るのみであつて、決して前の細胞の有する經驗的智能を持つて居らぬからである。

然らば斯く神經細胞が表皮の如く日に日に代謝しては困るが、左樣なことはなくて只病氣の爲に失はれた部分だけは、新らしい細胞が新生して補つて吳れたならよささうなものだと、造物主の不親切を恨むのもまた大間違ひである。今余が腦溢血を起し言語中樞が全然破壞されたとする。さうして其代りに神經細胞が新生して之を補つて吳れたとする。新生細胞は常に最も幼若なる細胞であ

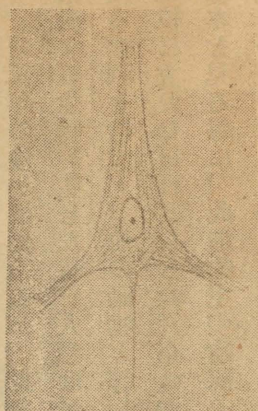
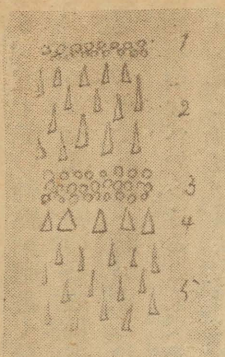
る。即ち胎兒に見るものと同樣である。白紙も同然であるから、これが私の發病前のとほりの言語觀念を得るには、四十年の同一經驗を反覆することが必要である。こんな細胞が出來て吳れたとてそれが私に何の役にたつものか。却つて他の古い細胞と新らしく出來た細胞との交捗關係から、精神に變調を來す樣なことが出來よう。造物主の仕事には矢張り粗漏が無い。

人間以上の動物

神經細胞の數は胎兒の時から既に一定して居り、最後まで不變である。其數は一體何程あるのであるか。腦脊髓全部の神經細胞の數は不明であるが、精神作用を掌つて居る大腦のみの神經細胞の數を調べた學者はある。初めマイネルト氏の計算によると、大腦神經細胞の概數は十二億といふことであつたが、米國でトムソン及びドナルドソン兩氏の研究では九十二億といふことになつた。概算とは云ひながら可なり著しい相違がある。ところで最近（一九二一年）ベルゲル教授が五個の腦に就いて可なり精確な方法で檢査した。其平均數は五十五億一千二百萬個といふことになり、丁度前二者の中間となる譯である。其計算の方法等から見てこれが實數に近い樣に思はれる。とにかく概數五十億內外と見れば差支なからう。

此驚くべき多數の神經細胞が各自に多くの突起を出して互に連絡をとり、吾人の精神作用を營んで居る譯である。斯樣に多數の細胞が働いて居るならば、人類は今少し複雜高等な精神能力を發揮してよい樣にも思はれる。

此問題を解決するのは次の事實である。胎兒の大腦の神經細胞は何れも其大さ、形狀略同一であつて、極めて單純である。圓形或は紡錘形をなして居ること圖の如くで、これは神經細胞に限らず、何れの組織の細胞にも共通な幼嫩形である。此神經細胞は其機能を開始すると共

に漸次發育する。其發育は單に大さの發育のみではない。大きくなるばかりであるならば神經細胞としての官能卽ち精神作用といふものは起らないのであるが、同時に分化である。卽ち細胞內に神經原纖維と名付くる細纖維を生じて來る。

此の原纖維の發生が實に吾人の精神作用の基本であつて、最も發達した神經細胞、例へば運動中樞の神經細胞の如きは其大さも大きいが、此原纖維の發育が極めて顯著である。而して纖維の發育と共に細胞は八方に突起を出すやうになり、そのために細胞の形狀は前の紡錘形や圓形を失つて圓錐形(ピラミツト)となる故に、發達分化した神經細胞は圖(右圖)の如き形を呈して居る。

扨て人の大腦の神經細胞は決して亂雜に存在するのではなく、整然たる層をなしてゐること圖(左圖)の如くである。此第四層には最もよく分化した大きな細胞があり、第二層がこれに次ぎ、第一層と第三層の細胞は非常に小さく且つ分化甚だ不良で、大部分は胎兒形の細胞である。動物例へば犬だの兎だのの腦を見ると、斯かる未分化の細胞が非常に多く、且各層に散點して居るのであるが、一般に動物が高等になる程分化細胞が多くなり未分化細胞が少くなるのである。併し人間でも前述の如く未分化細胞が非常に多い。全數の二割以上位はたしかに有る樣に思ふ。只腦の中でも最も發達して居る部分、卽ち運動中樞のみには此細胞が既に悉く分化して仕舞つて居るが、其他の部

分では學者でも天才でも普通人と同樣に此未分化の細胞層が存在する。實に此未分化細胞層が無くなり、五十億の神經細胞悉く分化活動するに至つて、初めて哺乳動物の發達は其頂點に達したものと認むべきである。而かもこれは吾々人間に於ては到底望むべからざることである。

　卽ち哺乳動物の腦は人間に於て其發達の極點に達して居るものでない。人間の腦には尙ほ未分化の神經細胞が非常に多數に存在する。而してこれは人間以上の生物のために殘されて居るものである。何萬年の後かは知らぬが、此細胞が悉く分化活動する生物が生じた時、人類は最早萬物の靈長たる權利を捨てゝ、他の動物と等しく被征服者の地位に立たなければならぬ。余は顯微鏡下に腦の標本を見る每に、此造物主の陰謀？を看破し得た樣な一種の悲しい誇りを感ずるのである。

Nakamura Kokyô Sama.

Kono hagaki wa kyonen no kure ni itadaite inagara, imamade henji mo sashiagezu ni ori-mashita. Sorewa mattaku isogashii tame to, mo-hitotsu wa moshi kaku-nara, iroiro kuwashiku kaite mitai to omou kokoromochi tono ryôhô kara deshita. Soremo omotta bakari de konnichi made nannimo dekizu ni toki wo sugoshite shimai-mashita. Tada yarippanashi dewa nai to iu koto wo môshiagetai to omotte konna tegami wo sashiage-masu. Izure yoi-ori ga ari-mashitaraba, iroiro sô-iu mondai ni tsuite anata kara no oshie wo uketai to kanete kara omotte ita koto deshita. Watashi wa, kono nikutai ga motte iru fushigi ni tsuite iroiro-na méditations wo shi-tsuzukeru keiken ga arimasu. Mochiron ohanashi no dekiru hodo no koto dewa naku, sore y rimo sono hashihashi ni tsuite oshie wo uketai to omou koto no hôbakari desu. Izure sono uchi ni kuwashii tegami wo sashiageru koto ni itashimasu, sorede kono hagaki e no gohenji no kawari ni.

3 gatsu 5 ka　Mizuno Yôshû.

老子に就いて

朝比奈支部　小野勝司

以前から例會の度毎に老子に就いて何か話すやうにとの事でしたが、私は何ら老子に就いて深い研究もいたしませんから、度々御辭退致しました。然し人は發表を辭退すればする程益々その發表を希望するものであります。斯ういふ心理狀態から辭退する事度々なればお勸め下さる事又再三、唯懇諭再三尙辭して承けないのは禮でありません。勿論自身もその研究が價値あるものとは信じません。又新年早々靜かに考へる暇もありませんので、お話しする方法も甚だ不備でありますけれども、老子に就いてホンの少しばかり思ひ付きを申し上げたいと思ひます。

有名な白樂天の詩に次のやうなのがあります。

言者不レ知知者默　此語吾聞ニ於老君一
若道老君是知者　緣レ何自著五千文

言ふ者は知らずに、知つてゐる者は默つてゐるといふことは老子に聞いたところであります。老子が果して知つてゐるならば、何によつて五千餘文字の本を書いてその自分の考を述べたのであるかと白樂天が言つたのでありませう。今こゝで自分がお話しようといふのは、老子の言によれば、自分の知らないといふ事を示すものであります。然し乍ら私は自ら知れる者なりとは信じません故に、敢て此處に出たのであります。

西洋の古諺に「光は東より」と言ふ言葉があります。太陽が東より出るといふ事實ばかりでなく、文明の曉の光が東から來たと解釋してよろしいと思ひます。世界の文明史を見ましても、その源は支那小亞細亞印度等であつて、歐洲文明も東である小亞細亞より來たのであります。その文明の源である支那の文明は二大潮流に分つて眺める事が便宜と思ひます。勿論老子は東洋文明の光の一方の明星であります。然らば支那文明の二大潮流とは何であるか。今日でも支那の天下は亂れて南北と爭つて居ります。それと同樣に支那の文明も南北に分つて見る事がよいだらうと思ひます。卽ち北は儒學の敎、孔子孟子の敎を中心とした黃河の流域に現れた文明であります。南は所謂江南千里の地に現れた文明で、その代表者は老子であります。遠藤隆吉博士は老子を南方文明特有の人物とする說に反對でありまして、何も殊更南北二派に分つに及ばないと說いてゐられます。然し從來我國の學者は多くは南北二派に分つて說いて居るやうであります。古い時代の本を見ましても、莊子には孔孟の敎を說く人の事を北儒と言うてあります。孟子に南方神農學者——卽ち老子の學を學ぶ人——北方に來りて聖人の學(孔孟の敎)を學べりなどと言つて居り、左傳にも支那文明の南北相違を說いてゐる事から見ても、この南北といふ二大潮流を認めて、老子を南方思想を代表する一大明星とするは說明上便宜であると信じます。元來支那民族は北より南に勢力を延ばして來たのであります。漢文などで今でも北といふ文字を逃げると讀みます。これは漸々南の方へ下つて來た支那民族が一朝敗北した時には又北の方へ引き退く。北にゆく事が逃げる事になるのであります。この事なども古來から支那に南北と分つ思想のあつた事が分ると存じます。

支那の南の文明の代表者としての老子は楚の國の人であります。この楚といふのは春秋戰國時代

以前の楚とは違ひまして、陳の國が楚の領地に併せられましたその地が老子の生れた所であります。だから普通には楚の人といひながら苦縣（陳國）の人と書いて居ります。

老子は近頃日本の讀書界に大變もてはやされて居ります。大泉黑石の著「老子」は五六十版になつてゐると思ひました。この理由は幾多ありませう。然し老子の思想の中に現代思想の要求に適するものがあるからではないでせうか。最近物質上の進歩追求のみ盛なるに對し、幾分反動的に精神的になつたといふのもその一つではあるまいかと思ひます。又著者の身分境遇等に關する興味、廣告の巧みなためなど色々の原因はあつたでせうが、兎に角今迄それ程注意されなかつた人に迄、老子の人物に哲學に思想に注意されるやうになつたのであります。

今こゝで老子の本文を順を追うてお話する事も出來ません故、唯その思想の眼目と信ずる所を述べて、その大體をお話しようと思ひます。その敎を一言にして言へば虛無恬淡であります。單に虛無又は無の一字を以て言ふ人もあります。

虛とは空の事であります。空とは不窮不滅の事であります。その例として老子は鍛冶屋のフイゴの事を言つて居ります。フイゴは中が空であるから常に無限に風を送る事が出來ます。凡てあればそれを失ふまいと、又なければそれをほしいと思ふ。何時でも心の動搖、心配は免れない。それではいけない。凡て物事に執着しないで心を空にする。心を空しうして總ての物を觀る。この心を空しうするといふ事が老子の第一の敎であります。

無とは無しといふ事であります。但し有無の無ではありません。物質的の意味の無ではありません。有限個々のもの卽ち差別あるものを、その差別を見ずに無差別に入れてなくして了ふ。卽ち差別があつてもその根柢には無差別なるものがあり

ます。これが老子の所謂無といふ意味であらうと考へます。草が生へる。花が咲く。我々にはそれはあると思ふ。そこにあるものも、そこにある現象も秋が來れば枯れて了つてその形はなくなつて了ふ。然し又春の雨春の風に逢へば又芽を出し花は咲く。これは有限だけを見るからかく變化があるのです。その有限だけ、個々だけを見なくて、例へば水が瀧となり川となり海となるその個々を見なくて、全體を覺るといふそこを無といふやうに考へます。この考へから平等思想なども現れて來るのです。虛無に就いては差別より無差別にいる事も一種の見方であるけれども、老子は必ずしも個々に卽して現れた差別そのものを殊更に自然に反して壞すといふ事は說かなかつたのであります。これを誤解すると現代の秩序破壞といふ意味になります。政治上に就いては無目的の暴動のやうになります。これは老子のいふ虛無ではないのであります。

恬は靜かといふ意味であります。水が風や何かのために動いてゐると、水本來の姿卽ち水の本性は現れない。水靜かなればよく顏を寫す事が出來る。それと同樣に人間の靈が靜かになれば總ての事がよく寫つて來る。總ての事がよく分つて來るのです。

淡とはあつさりといふ事であり、淡いといふ事であります。老子は常に水といふ事を非常に尊んだのです。上善は水の如しと言ひ、水は常に低きにつき低きに流れるものであります。人の好まない所でも何でも安んじて居ます。而も萬物を利益する所水より大なるはない。これからは謙遜といふ德や自家廣告不可といふやうな德も現れるのです。上善は淡き事水の如しといふその淡であります。老子の敎の大體は以上のやうであります。尙附加へて二三お話しようと思ひます。

老子の敎を道敎と何故言ふかと言ひますと、老子は前に申しましたやうに虛とか無とかいふ事を

說きます。ですからこれでなくてはならないと言ふやうな一に執着する事はないのです。これが眞理なりなどといふ事は言はないのです。それなら何故道といふ事を言ふかと言ひますと、唯假に道と名付けたのでありまして、有物混成。先天地生。……寂兮寥兮獨立不改。周行而不殆。以爲天下母。吾不知其名。字之曰道。……とありまして、分らないものと言つては分らないから、假に道と言つたのです。道ありて天地萬物生ずと。道ありてと言つても特別さうあるのではないのです。卽ち萬物の根、宇宙の始、人の言語を以て名狀すべからざる一元の理を假に稱して道として、これで總てを說明するから道敎と言ふのです。

次に虛とか無とかを說く事は孔子の說く所とは大變違ふのです。だから老子の思想は印度思想卽ち佛敎又はバラモン敎等から影響された事が多いと說く人もあります。それで老子の敎は純粹の漢民族の文明の產物であるか、又は印度思想と合成せられて出來たものであるかといふ事は、何人も斷言するものはないのであります。然し南の方で印度にも近いのですから、その思想も幾分這入つてゐるかも知れません。兎に角孔子の解く所とは大變變つてゐます。

然し仁義忠孝に反對するかと言ふとさうではない。孟子とか韓退之とかいふ儒敎一天張りの人は老子を惡く言ひますけれ共、結局正面と側面の差はあつても何れが正しいかと言ふ事は輕々に斷言する事は出來ないと思ひます。

約言しますれば南方の思想を代表する中心人物は老子であります。その敎は虛無恬淡といふ事であり、換言すれば靜と言ふ事であります。進取よりも保守を第一とし、剛よりも柔の部に屬する方であります。その考へ方から宇宙を考へ、處世上にもそれを演繹して來てゐると考へます。

以上甚だ要領を得ませんけれども、私の知れる老子の大體の事を申し上げたのでございます。

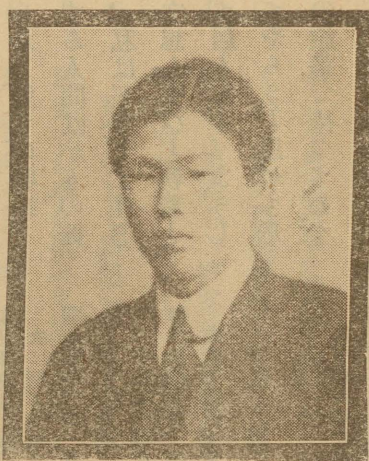
中村一義君の死を悼む

栗山生

一義さん——永の病臥に痩せ衰へながら、なほ強い生の執着を絶たずに、「早く歩けるやうになつたら……」といろ／＼な空想を私に洩らされたあなたも、到頭最後の息を引取られたと聞いて、私は心から涙ぐまずにはゐられませんでした。なすべき多くを殘して、若い身空で消えて行かねばならぬことは、あなたにとつて嘸かし殘念なことだつたでせう。子供の繪で有名な或る畫家は、その臨終の時、「死にたくない」と泣き喚き、病院の窓のカアテンを引千切つてもがいたさうです。あなたがそれに優るとも劣らぬ執着を抱いたまゝに去らねばならなかつたと思ふと、つく／＼運命の神は殘酷なものだと感じられます。

考へて見れば、あなたと私との交際はそんなに古いものではない。「變態心理」の編輯室で初めてお目に掛つてから、ざつと六年になる位なものですけれども、私の乏しい交友の中では、あなたが一番私の心に深く食ひ込んだ友人でした。雜誌の劃策に共に腐心した頃から、農商務省の囑託として玩具の研究指導に專心された最近まで、變らざる友誼を持ち得た人でした。お互に空想つぽい點に於て、お互に新しい感激を求め合つてゐた點に於て、お互に敎會の與へる神樣に滿足し得なかつた點に於て、お互に詩や歌を語り、美術や玩具に新しい世界を見出さうとしてゐた點に於て——あなたと私とはよく一致し、心から話し合ふことが出來ましたねえ。あなたと私とは、お互に半面を背負つてゐたのです。その半面がなくなつたのだ。つく／＼世の中は寂しいものだと思はずにゐられません。あなたが逝かれてから私に宛てゝ書かれた

繪葉書を遺族の方から受取りました。水戸の客舍で書いたまゝ、投函せずに篋底にあつたものださうです。それには「私は久し振りで或る感激に打たれて、涙ぐましい氣分を味ひ得た事を喜んでゐます。それは宿が靜かな事と、水戸城址の斷崖に立つて靜かな黃昏の空氣に此の二三日浸つて、持前の空想に思ふ存分耽り得たからでありませう」と空想を讃美し、更に「やがて歸らねばならぬと思ふと、又別な感激――反感と不辱――現實の悲哀を感じて、自憤の淚に暮れざるを得ませんでした」と、いたく現實を呪つてある。思ふ存分詩想に耽り得ずして、常に現實のために戰はねばならなかつた君の生涯は、實に苦の連續でありました。さうして、いつかな苦の果てを見極めることが出來ず、僅かに各地の旅にその鬱憤を晴らしてゐられたのだと思ふと、また更に悼ましい氣がせずにゐられません。

世の中には現實を呪ふ青年は隨分少くない。彼等はむやみに現實を呪ふ詩や歌を發表する。然し彼等の呪ひは、多く自誇に滿ち、呪ふことを快心とし、たゞ呪つて見たいために呪ふといふ傾きがある。呪ひたくもなく、たゞ見榮のために現實を呪ふ奴は僞善者だ。けれどもあなたに於ては決してさうでなかつた。あなたは自分に多くの空想と希望を持ちながら、常に現實のためにひん曲げられ、生活の重荷にへし潰されんとする大なる苦痛を直接に體驗して、そのために呪ひ拔いたのです。あなたが本誌に匿名で發表された「自殺の讃美」「ドリーマーKの悲しみ」などの詩歌や、「長野の旅より」「平凡人の通信」などの通信を見

故中村一義君

るとよく分ります。それを思ふと、あなたがともかく今日まで切り拔けて來られた努力に對して、私は衷心からの尊敬を捧げずにはゐられません。さうして中途半ばなその日を送つてゐる自己に對して、衷心から恥ぢずにゐられません。

全く寂しい世の中になりました。總ての物事を論理と數字から割り出さうとする人間ばかりの此の世の中に、あなたを失つて、私はどうして生きて行けるのでせう。あなたの空想と呪ひと執着とはまざ〳〵と私のうちに生きて居ります。さうして私はあなたの如く呪ひ拔いてやらうと思つて居ります。あなたは心安く、永の旅路で待つてゐて下さい。これだけが、私の貧しいたむけの言葉であります。（三月十日）

舍弟一義死去に就きましては、大方の諸君よりいろ〳〵御懇篤なるお手紙を賜はり、誠にありがたう存じます。爰にその一二を錄して、謹んで深厚の謝意を表する次第であります。

古峽拜記

○

大阪　川久保鐵三

拜復、陳者御令弟一義樣永々御病氣之處御養生不相叶遂に御逝去之趣、御一統樣御愁傷の極みと深く御同情申上候。早速御悔狀差出可申筈之處、一週間前より北陸地方へ出張致居、漸く昨日歸阪御手紙並に電報一時に拜見致候次第にて延引の段御海恕被下度候。（中略）玆に謹んで哀悼の意を表し申候。

次に斯る御取込の裡にも近世變態心理學大觀の豫約募集に奮鬪の壯烈なる一擧は、感涙滂沱として斷腸の思ひあらしむ。されど屈する勿れ、盤根錯節に遇はざれば何を以て利器を別たんや。小生も一部丈け豫約申込別箋之通り振替貯金に拂込置候間御承知被下度、尙ほ可及的勸誘可仕候。

先は御悔旁々貴酬迄如此に御座候。早々。（三月七日）

○

朝比奈支部　落合兼善

御令弟が逝かれたさうですれ。本日岡本からの通知に接して誠に驚きました。世の中の出來事は斯うもかたよりなものでせうか。御令息を失はれて幾何もならないのに、此のやうな御手紙を差上げなくてはならぬ事は誠に悲みに耐へません。先生の御胸中を御察し致しますの時、實に御同情に耐へません。

先生が、あらゆる世的の出來事を犧牲にして學界の爲めに御努力下さる事に思ひ到る時、何と御慰め致してよいやら……

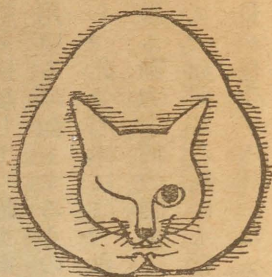
（三月十一日）

形外漫筆（六）

醫學士　森　田　形　外

科學者と神秘家

思を潜むれば世の中の現象に一として神秘たらざるものはない。

切りそろへたやうならば却つて恰好が良からうに、何故に人の指に長短があらうか。鼻もないのにどうして蚊や虱は人の臭ひを嗅ぎ別けて集まつて來るであらうか。大は天體のかゝれる、小は黴菌の内に更に寄生生物のありといへる事や、思へば世の中に不可思議でないものがあらうか。之が科學者哲人の以て懐疑し、思索し、研究せんとする題目である。

雨乞をして雨忽ちに來り、天理様のお水を頂いて拭ひ去るが如く頭痛が治つた。何たる有難い事であらう。或は夢に神靈の感通を得、或は念射透視の話を聽いて、直ちに心靈の存在を肯定し、不可思議を信じ、神秘を唱道する。之が神秘家、心靈派、迷信者の空想し、あこがれんとする對象である。

前例は理智から生ずる神秘で、智識慾から起る懐疑である。科學、哲學は之から出發する。後例は氣分から起る不可思議であつて、生存慾から發し、驚異の情から起る感服であり信念である。

神秘者は稀有なる特殊の奇蹟的の事に心醉、惑溺する事を悦び、科學者は一般に認めらるべき明かなる事實の神秘の奥を探らんとする努力を樂しむものである。神秘家は阿片を喫んで夢に華胥の國に遊ばんとするもので、科學者は單衣、粗食で人生の爲めに働かんとするものであ

る。

假想理學的療法の迷信

此頃オキシバサーとかいふ治療器具が盛んに流行して居るやうである。其廣告によれば、本器はダイアマグネチズムの原理に基き大氣中の酸素利用によるといふ。其製造は磁鐵鑛の中に種々の金屬をうまい工合に合金してあるとの事である。而して其用法は、其金屬棒の兩端に線を接續して、恰も電氣裝置を用ゆるが如くするものであるから、此金屬棒には、永久失はれざる動力と何の調節もなくして、如何なる病にも常に適度の量が發生する譯になるのである。これこそ本當の不可思議力でなくて何であらう。其効能はといへば、肺炎、流感、癩病、結核、癌腫、如何なる病にも神効のないものはない。其大冊の廣告書には、種々雜多ありとあらゆる病の著效例を擧げてある。

これが神秘でなくて何であらう。之はアメリカからの輸入品である。日本の醫者で之を推獎取次をして居るものがある。其價は大枚叁拾八圓との事である。

水天宮のお札や天理敎のお水は、宗敎的の迷信であるが、オキシバサーは理學的療法の假面を被つた迷信か、若くは大なる詐術でもあらう。アメリカは由來其建國から見ても、下等人の集團であつた。現在は世界の成金國である。迷信、詐術等、最も大袈裟に流行する國である。心靈問題とか、治療的宗敎とかいふものでも、最も盛んに行はれて居る處である。

今之を國家といふ見地からすれば、國民の迷信を去り、且つ保健、衛生のために、國家から學者に依賴して、之を學術的に實驗し、其無効無意義なものであるといふ事を一般に知らせる事が必要な事ではなからうか。若し其必要がないとすれば、例へば六〇六號の不正品でも之が有毒でない限りは、國家が之を

八ヶ間敷く檢査する必要も認めない筈であらねばならぬ。

生死と活動

折々はこんな事もいつて見たくなる事がある。何の事やら。

死を蟲けらのそれのおしからぬが如くに思ひすて、
生を豆の芽の石を碎くに比べつべく之に執着し、
命を春野に咲き競ふ花の盛なるに比べ、
努力を白鼠の車廻して撓まざるになぞらへ、
事業を鬱蒼たる大木の繁茂せるに擬し、
靈魂を日月の照炳、萬靈の無窮發展に較べつべし。

(註)豆の芽は其生長の力が或は大なる重量の石を持ち上げ、或は石の破れ目に入つて其石を碎く事ある事、學者によつて實驗された事である。

服從

常人は我を救ふものを歡喜希求し、吾を脅かすものを畏怖拒避す。これ吾人本來の感情なり。此歡喜と畏怖とは卽ち服從の情の起る處なり。此故に人は神に服從し、自然に服從し、人に服從し、我に服從す。

我に服從するが故に、分を知りて規を越えず。信念によりて自重し、我執を自省して之を愼み、慾情を畏れて之を自制す。

人に服從するが故に、他の長を採りて己の短を補ひ、他の善を學びて己の愚を導く。

自然に服從するが故に、宇宙の遠大の想ひを潛め、萬象萬靈の具足圓滿に心あこがれ、小我の偏執に拘束さるゝ事なし。

神に服從するが故に、無上智に導かれ、圓滿德の惠みに浴し、峻嚴の威力によりて邪惡道より救はる。

異常の人は此情の發動に齟齬、矛盾を生じ、或は吾を救ふものを猜疑し、或は吾を脅かすものに向ひて螳螂の斧を振ふ等の如し。此故に異常の人は神にも人にも我にも服從することなし。

夫れ神は深遠にして端倪すべからず。人は我に近くして最も神性を具備す。我に服從せず人

に服従せざるもの、いかで神に服従する事を得んや。自然に服従せざるものいかで我に服従する事を得んや。

風俗と嗜好

京都の雛妓は下唇に厚く紅を用ひて、しとやかにやさしく、東京の半玉は下唇に僅かに紅を點じて愛らしく意氣なり。支那朝鮮の妓は、額を剃り立て、頬に薄紅のくまどりして、人形の如くかたくなるなり。各其土地風俗に於ける氣質嗜好のほのめけるに非ずや。

履の鳴り皮

余の中學時代、鳴り皮入りといつて、歩くときに、よく鳴る履が喜ばれたものである。其音が下等なものは、グッシャ／＼と鳴り、上等のものになると、グッキュ／＼といふ音がしたのである。

氣の多い性

あれも讀み、これも調べたい。かうも考へ、あゝも理窟をこねくつて氣ばかりあせる其上に、庭を見れば手入れがしたい、友があれば將棋もさしたいと、やみくもに氣の多い事は、恰も輕度躁病のやうにも思はれる。さりとて之が我性分であれば仕方のない事である。只休むに似たる下手將棋よりは、幾らか取り所もあらうかと自分で辯護して見る事もある。我れ若し入獄の身ともなつたならば、少しはシンミリと思想も練り、歌や文章も物になる事もあらうなど空想する事もある。

叙情と叙事と

甲女「妾は情にもろくて、一寸憐れな人を見ても可哀想で仕方がない。」

乙女「妾もそんな風で困ります。……又他人は食物のことなど、よく考へるのに、妾は自分で食べることには少しも趣味が無いんですよ。」

甲男「僕は芝居で千代萩など、小供の出るのには、よく泣くものだ。」

乙男「……僕の友だちは食後散歩の時、ザル蕎麥を十二平らげたが、僕は昔片瀬の五厘饅頭を

一時に二十やつたことがある。」

女は其談話、よく抽象的に事實の觀察を度外視し、人は斯くあり我は斯く〳〵と斷定する事が多いといふ傾向がある。之は女が感情的で、從つて自己中心的となり易いがためである。男は之に反して具體的に理智的に事實を擧げ、徒らに總括的抽象的に馳することが少ない。此差別は無教育者と學者と、兒童と成人との間に於ても同樣の關係が認められる。歌や文章に於ても、女と男との間に、特に此差別があるやうに思はれるのである。

言葉の變遷

文覺上人が、寺院建立につき、賴朝公から喜捨を受けた禮狀の内に、「君」といふ字を用ひたことがある。賴朝は直ちに其返書の内に、「君は恐れ多くも上御一人の事である。」と申し送つたといふ事である。時は移りて五六百年、今は「オイ君やり給へ」とは、同輩以下に用ゆる言葉となつて、少しく目上の人には用ひないのである。又昔は女の名に「子」をつけるといふ事は、かしこきあたり若くは雲上人のことばかりであつたが、今は萬年町の人々まで競うて何子、かに子とつけるやうになつた。言葉の變遷も誠にすさまじいものではある。「妾（わらは）おさつを給（た）べ侍り：・そもじも一つ召し候へ」などいふことも、或は之が俗となつて聞き慣るれば、さほど耳ざはりにもなるまいと思はれる。

土佐の方言

余の少年時、我が土佐の國では、幼ない女の子を呼ぶに、下等社會のものは其名を呼び、町人は「あま」、士族は「いとさん」、上等の士族は「お孃さん」「お孃さま」といひ、華族を「お姫樣」などゝいつて種々の階級があつた。又男の子は、士族は「とん」(殿)「とんと」、其弟は「小とう」、「小とん」と呼んで居た。新潟邊の或人は、男を「との樣」と呼ぶ事があつたが、「との樣」は土佐では、唯大守のみに限つて居た。今は四民平等の時勢となつ

て、こんな事も次第になくなつた。又昔、男は、士族は其姓を呼び、平民は其名を呼ぶといふことに極まつて居たが、今は女でさへも總て其姓を呼ぶやうになつた。余が稀に郷里に歸るときは、今でも七十歳餘りの隣の人達は「森田のどんがもどつて來た。」といつて悦んで呉れる。昔が忍ばれて何となくうれしいものである。

おとうちやんより豪い

七歳の男の兒、或時展覧會に行つて、有栖川の宮樣の肖像を指して、密かに母に問うて云ふやう、「かあちやん、あれは、内のおとうちやんより豪いの。」

人生の活動

小兒は常に判斷、目的なく、衝動のまに〳〵止む事なく活動して居る。長ずれば絶えず思慮工夫が働いて、あれよこれよと努力する。不惑の年ともならば、さして工夫努力なく、なづみなく働いて規を越ゆる事がない。例へば小兒は琴の糸を譯なく搔き廻すが如く、長ずれば音の高低、節の長短、骨折りて稽古するが如く、不惑とならば指先自ら動いて音律自然にかなでいでられるやうなものである。小兒は豫備し、長じて習熟し、不惑は貢獻する。活動の止んだのが卽ち死と名付けてもよからうと思はれる。

大賢は大愚の如し

狂人に「ぼける」（不管性痴呆）といふことがある。何の氣分なく、考へなく、茫然として何事をも爲さゞるをいふのである。又興奮といふことがある。唯譯もなく、目的なく、あやつり人形の動くが如く、心のはづみのまゝに立ちさはぐをいふのである。又狂人の内にはよく作業しよく働くものがあるけれども、唯慣れた一定の範圍のことにのみ手足が動いて、工夫掛引が全くなく、器械のやうに働くものがある。是等は皆同一の病症から起るもので、唯其場合と時期とによつて異つて居る丈である。

呆けたものは無念無想であつて、危險が眼前に迫つても憶することなく動ずる色もない。余は之を似而非なる無念無想若しくは假性大悟と名づけてある。大悟の人は無念無想であつて而かも念々に心動き、理事無碍であつて、動せず憶せず、事に當つて快刀裁斷するがやうなものである。大賢は大愚の如しといつてあるのも、此樣な處かも知れない。

無念無想といふのは、刹那もひまなく絕えず心の働いて居る有樣であつて、汽車に乘つて、其汽車が快速力で走つて居る時に、少しも其運動を感ぜず、急に驅け出したり、止つたりする時に、特に激しく其運動を感ずるやうなものでもあらうか。之は相對原理で說明することが出來ようと思ふ。武道の達人が鍔(つば)の音にも目を醒すといふのは、一刹那も心にひまなく、而かも雜念がないからであり、似而非なる無念無想ではとても出來ない藝當である。

余嘗て數人の美術家を呼んで、いとふくよかなる一人の呆け女を見せた事がある。皆いと神々しいものよと賞讃して吳れたのである。恰も余の豫期した通りであつたから、余は卽ち其人々にいつた。それは痴呆は空虛であつて大聖は充實である。藝術家若し一歩を誤れば、此樣な空虛の神を造り出さぬとも限らないと、いふ事である。

又人に犬の如くよく忠實に、白鼠の如くよくまめやかに十年一日の如く立ち働くものがある。所謂愚直のやうなもので、狂人と餘り遠くないやうに見受けられるものが多い。吾人はするも、しないのも皆其事々に從つて、よく強く、よく大に、よく持久して心の働くことが最も望ましい處である。

十六羅漢の一人で、戒律第一と稱せられたるものに、說かず敎へず、自ら持すること峻嚴に、八十餘年を以て大沈默の生涯を全うしたとかいふものがある。沈默は最も大なる雄辯なりとも

いふが、是等は固より唯の呆けとは大に其趣を異にする所である。

爲るもしないのも、人は各其最も大なる努力を人生に貢獻せるものが卽ち最も大なる人生であつて、呆けてしないのと器械のやうに働くとは、共に人生に餘り價値のあるものとはいへないのである。

綽々たる餘裕

我がなすべき事をなし、用を辨じ事を始末し、明日の事を今日なし、夕の事を朝に用意し、事の大小を辨へて大をおさめ要を整へ、心に豫算ありて、やり繰りをうまくし、要領を捉へて些事を切り捨て、以て變に遭ひ事に當りて全力を盡して之に向ひ、徒らにあせらず、あれやこれやと氣をもむことなく、心に落ち付きあるのを綽々たる餘裕ありと名づけるのである。所謂流れ川に棒、行きあたりばつたり、諸行無常、運を天に任だね、成り行きに任すとかいふやうな放逸無賴の謂ではない。此兩者は其見掛によつて其觀察を誤る事が多い。餘裕ある人は、絕えず心の活動ある人であつて、流れ川棒の人は、常にうつとりとして餘裕あるが如くに見え、而かも事に臨んで心あせり氣を取り亂すものどもである。

最良(ベスト)は最も正しきものなり

人の誹るをも怒るに當らない。人の褒むるにも喜ぶに及ばない。何となれば我等の心は暗闇であるから、辨(わきま)へなくて爲し不知不識のまゝになすことが無慮に多く、知りてなし、辨へてなし、其善惡を知り分けて居る事は、極めて少ないからである。

而かも我が行ひは皆善である、正である。之をなすに恐るることなく、躊躇する處はない。何となれば其爲すことは皆我最良なるものであり、ベストであるからである。今日我が惡と知つた事も、昨日は我最良であつた。明日は善惡は知らず、唯今日のみ最良である。最良は最も正しいものであつて、善惡の差

別を超越した心境でなければならない。エマーソンも其自信論の中にこんな事をいつてゐるやうに覺える。

狂人の感想

狂人には、屢々自己の感覺若くば氣分を種々異樣にいひ表はすものがある。中には恰も吾々の夢の氣分のやうなものが多い。其一つ二つを書き付けて見れば次のやうなものである。

「心の錢まで取り立てられる。（人をたゞで使ふといふ事を意味するらしい）端書でも一錢五厘するんぢやないか。」

「段を下りる時に、腹の中ものが、ガクリと上の方に上つたまゝ、今にも下りて來ない。……胴中が重くて、手と足とがフラフラする。」

「胃がもめて、血が頭へ上り、耳も湧き、顏の色が黑くなるやうな氣がする。人の聲を聽けば、胸から背の方へはれる。又胸の處につまり、腹の處かカラになる。人の傍に居れば、呼吸が竹そゝらでつゝかれる樣に刺されて苦しくて居られない。二人の人の話を聽けば脊骨の眞中から聲が這入り、胃に浸み通り前の方に拔ける。あの人の頭の毛を見れば、胸から腹の方へ刺される。髮の香が、鼻から、眼から腹の方に浸み込む。」

「頭の毛孔から湯氣が立つやうに、ブク〳〵と何か引き出すやうに、あぶくの立つやうに苦しい。」

喜劇の悲劇

こゝは精神病院の患者面會室である。十歲許りの貧しい男の子が、長く病氣に惱んで居る母の代りに、時々菓子着替へなどを持つて公費患者の父を見舞に來るのである。物狂はしい父は威たけだかになつて、「汝は何者なるぞ。我は豐臣太閤秀吉である。さがりをらう。」などいつて、いきなり其子の持つて來た物を取り、直ちに菓子の袋を破り、「こんな下等なものを誰が持つて來た。」といひながら其鹽せんべを嚙り始めた。流石は我子とい ふ愛でもあらうか、其せんべ

の二つ三つを取り出し、「汝に之をつかはす、近う寄れ。」といつて差出すのである。我父なればにや、さほど恐れる樣もなく、子は唯あつけに取られて父の顔を見守つて居る。

亂心もの

年中帶を結ぶといふこととなく、食事の他は、終日頭から布團を被つて寢て居る四十歲餘の女がある。突然醫者の行く前に立ちふさがり、胸まで衣をまくり、陰部を暴露し、自ら首をたゝく樣して、恐れる相貌すざまじく「首を忘れなさんなよ、……いゝ婿をつれて來なさい……此馬鹿野郞」といひ捨てゝ、さつさといつてしまふ。

だしぬけや亂心ものゝ荒ぶれば夕立のごと暴風のごと。

痴愚者の信念

四十歲餘りの痴愚者がある。精神病院に收容されて十餘年にもなる。患者はこゝを我家のやうに心得てか、年中心のまゝにあれやこれやと立働き世話を燒いて居る。此男が常に或一つの珍らしい信念を持つて居る。それは「お月樣は自分ばかりに附添つて居て自分を守護して吳れる」といふ事である。「其證據には、自分が動いても走つても、いつも必ず自分と一所に動く。他の人が動いても決してそんな事がない。」と主張して居るのである。如何に詩人や思索家でも、まさかこんな事には思ひ及ぶ事は出來なからうと、神話のことなど思ひ合されて面白く感ぜられたのである。

竊盜症

痲痺性痴呆といふ病にかゝれる一人の患者が居る。いつもいつも他の痴呆患者の衣類を何時の間にか盜み取り或は窃かに剝ぎ取つて、夏もなほ時には四五枚の衣服を重ね着して居ることがある。之を責めれば「自分のものだ、名前を付けてある。」などいつて辯解をする。俗に人のものをせしめることを「着服する」といふが、思ふにこんな處から出た言葉かも知れぬ。

又此同じ病症の患者には屢々

甚だ奇抜な竊盜行爲が現はれる。或患者は食事の時の膳を盜んで之を背中に入れ、着物の上から其角張つた形があらはに見えて居る事があつた。又或患者は障子の紙を片端から、唾液をつけて破り取り、自分の布團の縫目を破り、其内に澤山にしまひ込んで居たものがある。何のためかと問へば、「歸る時に子供に土産にする積りであつた。今度から決して致しません。」といつて、ヘコ／＼とあやまつて居る。

警察の注意人物

嘗て余の精神病院に縊首者のあつた事がある。其時の夜警看護婦兩三者は、其當事責任者として過失殺傷罪の罪名のもとに科料に處せられたことがある。其内今も勤續して居る一人は、此病院にあること十五年にも餘り、年とつたやさしい女で、裁判所に呼び出されても口もろくにきゝ得ないものである。さて此事があつて最早三四年も過ぎた頃である。或日巡査が病院の玄關に訪ねて來て、此女の經歷、現狀など細々と調べるから、何事であらうかと其故を問うた處が、巡査は密かに其手帳を開けて見せて呉れた。見れば卽ち彼の過失殺傷罪某女と記したものであつた。扨ては此蟲も殺さぬ女が刑事の帳面の上では、恐ろしい社會的危險性の注意人物であつたのである。巡査も今其由來を聞いては、唯アッといふの外なくてそこ／＼に辭し去つたのである。

・・・前號正誤・・・

二〇一頁上段第二行
ほだされた云々は
ほごされた云々の誤り

三〇六頁下段第十五、六行
百二十六百二十七云々は
百二十六號百二十七號の誤り

最近の學說

勞農露國の反宗教運動

ポーランド公使　川上俊彥

革命後の二三年間は、オルソドックス教の寺院は、帝政の復活をゆめみて、當時の隆盛と特權の恢復を希望し、多數の信徒も永年植付けられた信念に支配されて、舊時を追懷して居つたのである。ソウエート政府は、革命の當初から、この寺院の勢力のあなどるべからざることを知つて居つた。然し革命戰爭と、政治上の革新とに忙殺されてゐた政府は、餘力を教育の普及には用ひたが、未だ宗教改革に迄及ぶことが出來なかつた。然るに恐るべきものは時勢の推移である。革命後滿五年を經て、第七年目を迎へた現在にをては、寺院も最早帝政復興の望みなきことをさとり、また一面に於ては、赤軍にありし兵士が續々田舍に歸還することによつて、國內の情勢がわかつて來たため、地方の農民の宗教熱も、舊時に比して大いにさめて來た。從つて寺院も、從來の方法を以てしては到底人心を捉へることが出來なくなつた。しかし此點では、都會と田舍とによつて大差がある。市民は大部分帝政の夢よりさめて、個人の自由を欲求し、世界の大勢を知ると共に、宗教の何たるかを理解してゐる。これに反して地方の農民の間には、なほ隨分舊信仰にかたまつてゐるものがあつて、一昨年の飢饉救濟の際、寺院の寶物を政府が利用せんとしたに對して、激烈なる反抗を起した實例がある。

こゝに最近面白い二つの現象が起つた。その一は、寺院がソウエート政府の途に動かすべからざるを知つて、寺院自ら宗教改革の運動を起し、帝政時代の憧憬を抛棄すること、勞農政府に敵對せざること、教育は勞働者を根據とすること等を主張するに至つたことである。これは卽ち寺院が、政府の鼻いきをうかがつて、その意に迎合せんとするものである。他の一は私がモスクワ滯在中、卽ち本年一月九日同市に起つた出來事である。共產黨員の說によれば、宗教なるものは、共產主義の社會には無用のものである。よろしく撲滅すべしといふことから、反宗教運動を起したのである。卽ち青年共產黨員と學生が數萬人、クラスナヤ廣場に會合して、その場に耶蘇、マホメット、佛その他現代あらゆる宗教の偶像をならべ、こゝに舊思想及び舊宗教を葬るべき大演說をなしたる後、その偶像を押し立て、市中を示威行列し、郊外に出て之を燒きすてたのである。しかして、政府は何らこれに干涉しなかつた。私は、この一事が濫觴となつて、或ひは反宗教運動が全露に蔓延するのではなからうか、といふやうなあはい豫感を、その當時持つたものであろ。

—東京日日(三月六日)—

現代の現實回避思潮

東大助教授　大島正德

現代には色々の主張があり、風潮があることは數へ切れない程であつて、其處に混沌たる狀態を呈してゐるのであるが、少くとも其處に大いなる基調をなしてゐる思想的態度は、自己の權利を主張し、自己の生活を保障することに大に力を注いで居るといふ點であらうと考へる。卽ち自己中心の

態度が極めて顯著に現はれてゐると思はれるのである。而かもその自己中心なるものが、動もすれば利己的な意味に於ての、自己中心の思想が顯著であるやうに觀察される。之も生活が諸種の方面から脅威される不安から起つた當然の傾向とも稱すべきだが、而かも積極的に之を是認し主張する氣分態度が顯著である筈である。勿論一方には所謂平等思想が唱へられ、社會關係が重要視され、所謂社會化、公平化、民衆化が求められてゐるのであるけれども、その之を求むる心理的根據に於ては、各自が自己の生活を維持せんがためにそれがために他人に少しでも自己以上の權利を握らせないやう、利益を取らせないやうに、而して場合に依りては人の有てるものを羨み憎むが如く思ひなして平等を唱へ、社會關係の公平を呼ばはるが如くに見える。平等思想、社會關係の論は極めて重要なる問題であるが、其の裏面の根據が獨り自己の生存のみを考へるといふ立場からは、決して強き根據をなすに至るものでないことは明白であると思ふ。他面に於ては他人を愛し社會を重んずる、謂はゞ愛他的精神もなければならず、而して其處に人格敬愛の思想が含まれてゐなければならぬが、今日の社會關係觀、平等觀は其の方面に注意することは薄く、專ら自己の生活保存、所謂自己の生存權要求と云ふ立場からのみ論ぜられてゐるやうに思はれる。云ふまでもなくその事の必要であり、心理的に當然であることは承認して差支ないと思ふが、然し他の半面のあることを忘るゝならば、社會生活を利己主義の基礎の上に立てようとすることになるのである。而して愈々互に他に對して求め合ひ、互に奪ひ合ひ、互に削り合ひ、而して寸分も自から損をしないやうに、他に利益をさせないやうにといふ、所謂いらいらした、あせるやうな生活を玆に現出せなければならなくなるのである。現代の狀態はさういふ風になつてゐるかと觀察される。

此時に當り、其のいら〳〵したあせるやうな氣分態度から逃れるために、一切自己の要求を否定し、何等求むる所なく、他人のために偏にと何事でもあれ、其の命ぜらるゝ儘に服從して極めて無欲の生活をするといふやうな心持が、他のあり得べき世界として玆に擴げられ、而してさういふやうな世界に心を置いた時に、何となく肩の重さを減じたやうな生活が經驗せられる氣持も起るであらう。卽ち自己を忘却し、或は拋擲し、自らのため少しも求むる所なく、たゞ他のまゝに身を託して存するといふやうなことは、是れ迄餘りに自己のために求めて來たことからの苦しみを一切脫却することにもなるのであるから、さういふ世界を初めて見せつけられた人には非常なる救世の如く思はるゝこともあるであらう。其の意味に於て現代の如き自己の爲めに求むる風潮の顯著なる世界に、斯る一燈園式の逃避生活が暫く歡迎されたことも、一應心理的に譯のあることと推察される。

然し乍ら之は前にも述べた如く現代風潮の反動として考ふべきものであつて、人間が全く自己を棄つるといふことは不可能であつて、棄つる所に却つて新たなる自己を立てなければ吾々は承知出來ないのである。故に初めにたゞ物質的の自己のためにのみ働いた人が、一切を他のために任せると考へて前者から生じた苦しみを脫却することが出來ても、單にそれだけ考へてゐるだけでは永持ちすることの出來ないことも明白であつて、又巡り來つては「己れのために」といふ問題に心を用ひて來なけれ

ばならぬのである。

—太陽(三月號)—

頽廢期の文學

早大教授　横山有策

　老いゆくものが既にその力を失うて、しかも依然として力ある者の如く裝ふところに、デカダンスの一特長は理解せられる。そこに悲しい模倣が生れる。獨創は力の現れである。力のないところ只模倣が行はれるのみである。模倣は幼年期の特長でもあるが、幼年期の模倣は、伸びんとするもの丶稽古臺であるから、そこに何のたくみ、何の紛飾もなく、大びらに率直に模倣する。之に反し、頽廢期に於ては模倣しながら模倣を隱さうとして、はかない技巧が弄せられる。模倣を潔しとしないながら、止むを得ないことを充分意識した模倣である。誤魔化しがある。(尤も支那や日本の文學は長い模倣の連結であるから、頽廢性は吾々の國民性であるかも知れない。それに今一つ此提言を立證するかのやうに我々には隱遁性がある。回避氣分が強い。奮鬪性と執着心とに足らない)

　あわたゞしい流行が文藝界を騷がし、吹きまくつて行くのも頽廢期の徵候の一つであらう。それは恰度風のやうに、その西に吹く時物みな西に靡いて行くが、一過し去ると何ものをも殘さない。殘るとしたら、騷ぎもまれた困憊と消耗とのみである。ポール・ブールジュに聞くと、デカダンスの文學は、社會に於てと同じやうに、部分のために全體を犧牲に供した文學である。一句のエフエクトのためには全文がどんなものになつても差支ない。文體として全部の布置構造を論じた甚だしく技巧的な修辭法はどこの國でも古くから說かれたものだが、そんなものは云ふまでもなく根柢から覆へされて、暗示に富んだ一節のためには、全文は首もなく尾もなくて結構であるといふことになつた。

　その上、頽廢期の文學は甚だしく晦澁である。大方、獨創力の消磨したのを蔽ふ心が晦澁を喚ぎ來るのであらう。唐末頽廢期中の勝れた詩人杜牧について、「杜牧の詩を作るや、平弱に流れるのを恐れるが故に、詞を措くに必ず拘峭、意を立てるに必ず奇癖である。多く飜案の語をなして一つも平生なるものがない。」と甌北詩話が云つたのは、よく此心事を道破したものと思ふ。無論彼等は只「平弱に流れる」のを恐ればかりではない。彼等は他と異らんとする心が強い。しかるに生憎、強い個性と秀でた獨創の力が缺乏してゐる時、彼等はたゞ小なる樂觀に進み進むの外はない。主觀の井戸を掘り下げ掘り下げて、最早その中に住むもの丶外、箇中の秘密は探れなくなる。深刻な思想とは何か。神秘の表現とは何か。最も深刻なものは最も單純でなくてはならず、最も神秘なものは又最も平明でなくてはならぬのに、一流の偉れた天分ある人々を除くと、深刻と一人よがりと、神秘と、曖昧とが混同される感がある。

—東方時論(三月號)—

映畫脚色の心理

橘高廣

　事件が澤山あつて、それが連續してゐるといふだけでは脚色といふ事にならない。それらの事件が因果律に依つて、論理的につながつて居るのでなければならぬ。脚色の力は因果律の上に土臺を置いて、意志の働き、そしてその反動であるとも解釋される。だから脚色するといふことは、鬪爭や苦悶に發端して解決すべき問題を提出するとか、又は錯綜させるのでなければなら

ぬ。さうなれば見てゐる人は、問題はどう解釋されるのであらうか。何れが勝つたらうか、苦悶の末どう決心するだらうか、「氣がかり」の狀態に置かれる。それが脚色の力の現れである。劇作家が常にストラッグルが必要だといふのは此處である。「氣がかり」の狀態に置くと云ふことは心理學的のトリックであつて、映畫劇では續いて出て來る繪畫で漸次解說されて行くものである。繪畫展覽會よりも、映畫劇の方が人氣がある、平民的に好かれるといふ一つの理由は、陳列名畫が靜的であるのに對して、映畫の方は動的であつて、その次には解いて明かに見せてくれる謎を、見物にかけるといふ事でもあつて、謎を解く、それは面白いといふことになる。だからアクションの中でも見物の興味をひきつけ、絕えず好奇心をそゝり、疑念を強く強く起させ、同情を失はぬやうに、そしてショックを與へる、單純には動いて居らず、何かしら意味があり、その後に出て來るアクションの條件となるもの卽ち次のアクションの原因となるもの、かうしたアクションが本統のドラマチツク・アクションであつて、脚色とは親類になる譯である。

所が、映畫劇の客觀性といふ所から、事件が物理的でなければならぬと考へる人があるかも知らぬが、心的であつたとて差支はない。取扱ひ樣による。一性格との鬪爭の相手が抽象的でも、道德的でもよい。場合によれば抽象的なものを具體化した人間を使つてよろしい。グリフイス監督リリアン・キッシュ主演「ブロークン・ブロッソム」の如き、慘酷とやさしみとの鬪爭である。もとよりかゝる場合には、人間の心の法則に從つて動いて居らればならぬ。論理的でもなければならぬ脚色の最もシンプルな形式は、古い例だが、人が木に登る、彼に石を投げつける、墜落する。であつて、アリストートルはビギニング・ミッドル・エンド卽ち映畫劇では適譯ではないけれど、前提、錯綜、解決と普通に云つてゐる。

前提に前置であり、豫め次に來るべき事をいふ。脚色の內意を暗示的に洩らすものである。プレイメーキングの著者ウヰリアム・アーチャーはアリストートルの形式で同書を記述してゐるが、同氏はかう云つて居る。上手な劇作家は、前置で自分が取扱ふ材料を巧く操りコナしてゐる。卽ち經濟的に注意力を働かせて明かに見物に十分に飲み込ませる。之に反して拙な作家となると、前置をサラリと見た位では、誰が主人公になるのか知れずに次のシーンになる。幾何學の基本定義を知らずに、次へ進むと薩張り分らなくなるのと同じ理窟で、アノ人はどうした人であらう、何故彼處へ來たらう、何時左樣なことがあつたらうとなる。芝居よりも見物同志で質疑應答を始める結果になる。

次に、前提の直接的結果として、紛紜・錯綜があるのだが、それは論理的に、因果律によつて自然に、當然の結果として生れて來るのであつて、前提に依つて劇の相場は極るものである。見物が心をひかされるか、されないか、その全部は前提の如何にひつかゝつてゐるのがある。それで錯綜する。所謂ストラッグル・コンフリクトで、個人的や集團的のものであるが、營業用映畫劇では「戀」の問題を要求するさうで、戀は一般的、世界的であるからかも知れない。そして鬪爭の畫面は、直ちにクライマックス、エンドになる。最高調の事件と巧く組合せられてゐなければならぬ。登場人物の心的道德的苦悶に對して、畫面的背景は、矢張り調子が揃つてゐなければならぬ。つまり

脚色の基調と背景の基調とが一致してゐることが必要である。上手なセットは、その演技の內容までを助けることになる。解決は脚色の終點、延び切つた所である。

—週刊朝日(二月十一日號)—

紐育の少年裁判所

在米　松岡朝子

私がニューヨークで第一に參りましたのは少年裁判所であります。控室には出頭を命ぜられた者、或は適當の保護を要請に參つたものなど百二三十人も居り、服裝や人柄等も餘りよくない人々の樣に見受けました。私は程なく廷丁に案內され法廷に參り判事のそばにすわり詳細に少年裁判所に付いてうけたまはり、しばらくの間種々の事件を見學致してをりました。法廷と申してもきびしい所ではなく、大机の前に二人の判事が座し、そこに順に呼び出された子供、付き添人が立つて調べを受けるのであります。ニューヨーク市にはたゞ今六ヶ所の少年裁判所があつて、私の見學致したのはマンハッタンのそれであります。當地には男女の實狀調査監視官或はビーグシスターと申す方々が、貧民窟或は特殊學校小學校生徒及び其家庭を常に調べ、適當の保護を要するもの惡風習あるもの、個々家庭內の困難事等總てに亘つて各自の調查報告書を作られてゐます。そしてそれは常に少年裁判所に保存され、事ある時に容易にその事情の判然する樣準備されてあるとの事であります。年齡は六七歲より十五六歲までの由でありました。その犯罪の種類は統計に取つて見ますと(一九二一年)

	男女合計數	男兒	女兒
人事			
傷害	三六三	三三六	二七
強奪	四九	四八	一
所有權侵害			
夜盜	一、一五七	一、一五〇	七
竊盜	二九六	二八六	一〇
小竊盜	八六九	八〇一	六八
不法占有	一〇一	一〇一	—
所有權侵害並公安妨害	六三二	六三〇	二
安寧秩序妨害			
騷擾	六一	六一	—
治安(賭博を含む)妨害	七三	七〇	三
兇器携帶	四七	三一	一
銃器發射	三一	三一	一
雜件	四三五	四三〇	五

これによると夜盜の合計一、一五七人が全體の二割三分一厘の多數をしめ、次に八六九人中男兒八〇一人が小竊盜にて一割六分一厘強をしめて居ります。そしてこれが提出者を擧げて見ますと大體左のやうです

少年犯罪事件提出者

少年犯罪事件	男女合計數	男兒	女兒
居合せし役人によりて	四	四	—
市民によりて	二八〇	二四六	三四
兩親、近親によりて	—	—	—
巡查によりて	四、五四〇	四、四五四	八六
小兒虐待防止會役員によりて	三一	二六	五

特別訴訟事件提出者

	男女合計數	男兒	女兒
居合せし役人によりて	二四六	二〇七	三九
市民、近隣の者によりて	—	—	—
兩親、近親によりて	一、五八六	一、〇五〇	五三六
小兒虐待防止會役員によりて	二、四七二	一、一三六	一、三三六
巡查によりて	一、二八六	八〇七	四七九

之は一千九百廿一年の合計で一九二〇年には一ケ年一一、五八二件、卽ち一、一三七件

な減じた譯であります。なほ私の見學いたしました時には大抵の被告人は判事の親切なる説諭にて歸宅させられし樣に見ました然して如何にしても惡習慣、惡癖のなほらぬものは感化院、或は小兒虐待防止會におくられます。―東京日日家庭マガジン(三月十一日)―

人魚の正體

農商務省水産局　能澤　鱗

人魚の傳説は(中略)誠に多種多樣なものでありますが、さてその人魚の正體は何―或は虚であらうかそれとも實か、抑も人魚は何物であらうかといふ問題に入りませう。

いかに大瀛は浩漠たるものであつても、清心丹の看板に見るやうな人面魚身の妖怪がゐる筈はありません。人魚は確かに海中に棲息する何等かの動物を誤認してそれが傳説化された者に相違ないのであります。

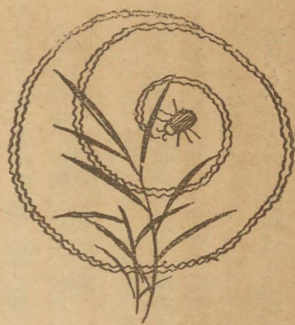
そこで海中の動物の中で、何が一番傳説の人魚に近い特色を持つてゐるかと云ひますれば、先づ儒艮(ジユゴン)でありませう。それから海牛(マナテー)、海豹(あざらし)、膃肭獸(おつとせい)、臘虎(らつこ)、海象(せいうち)、鮫といふやうなものなども、人魚の傳説を生んだ嫌疑者であると思ひます。

儒艮といふものは我國では琉球近海に多くゐて、琉球人はこれを「ざんのいを」というてゐます。現在三種類あつて、印度洋と紅海と濠太利亞の海岸とにゐる種類なのです。以前はベーリング海にもゐたさうですが、今は絶滅してゐます。身體の形は海豚(いるか)に似て、長さ八尺以上のものもあります。鼻の穴が小さく左右に並んで圓い頭の前の方にあり、唇は薄いとはいへませんが、口は大きからず、その邊りに軟かい毛が生へてゐます。齒はかなり發達してゐて、殊に牡の上顎からは、門齒が二本のびて牙のやうに出てゐます。しかし牝のはのびません。眼は至つて可愛く、耳朶はありません。肌は極滑かで短い毛が生へて居り、背中は灰色ですが、腹や脇は眞白です。前肢は鰭のやうになり、後肢は見えません。そして前肢には爪の痕跡もないのです。尾は新月形に分れて、恰度鯨の尾のやうに水平に擴がつてゐます。そして肩が左右によく張つて居つて、牝は胸に圓く膨れた二つの乳房を持つて居るのです。

儒艮の牝は一度に子供を一頭づゝしか生みませんが、琉球では三四月頃乳呑兒を連れて泳いでゐます。性質の極温順なもので又非常に子供を可愛がります。若し自分の子供を人に取られるやうなことがあれば、非常にその別れを悲しんで、自分もそのまま一しよに獲られてしまふ位です。そして子供に乳を哺ます時には屹度前肢で乳呑兒を抱き、その兒の頭と自分の上半身とを一しよに水上に現します。又食物などもよく前肢で口へ運んで食べるさうですしその泣聲が非常にやさしいものださうです。

儒艮が乳呑兒を抱きなどして、廣い／＼海の波の間に／＼浮きつ沈みつしてゐる姿を、遠くから眺めたならば、いかな人でも美しい女が泳いでゐるものとしか考へられないでありませう。そして最後にその水中へ沈む時、大きい尻尾を出すものですからこれを見た人は驚きのあまり海中に人面魚身の女性ありと噂するやうになつたのであらうと思はれるのであります。

今から六十年ばかり前に一度、又百年ばかり前に一度、サツフオークといふところで人魚を捕へたといふ話が殘つて居り、その人魚の首が今に保存してあるといふことですが、その首は儒艮の頭骨ださうであります。英國の解剖學者リチアード、オーウエンも、人魚は儒艮であるといつて居ります

―科學知識(三月號)―

裸體美術と性慾

美術界諸家

田中香涯氏執筆『變態性慾』第一巻第八號（十二月號）所載
『性的方面より觀たる裸體美術』に對する回答——到着順——

○

横井弘三

先日は御誌を有り難う存じました。「性的方面より觀たる裸體美術」に關しては、貴下より大に御教へしていたゞけたと思ひます。自分は畫家ですが、未だ一人の異性の裸體より他、よく見た事も研究した事もありませんから、美術としてもその御尋ねに對しては一般的の御返事は出來ません。從つて外人に對しての裸體は繪畫以外に知りませんから、第一の分らぬものに第二義的のものは眞實のところは分らず。日本人の裸體美術は醜いもので俗惡の感がします。むしろ日本人の異性の美はやはり衣服をつけた時に、日本人の女體の藝術美が作られるやうに思ひます。裸體美術については、モデル女を一度も見た事のない私には、貴下のおたづねに對して御滿足な御返事も出來ません。佛畫の半裸體の繪などは性慾とどう云ふものでせう。

○

池田永治

女の事はまるで分りません。あしからず。

窓越しに見ゆる軒端の花蕾
柳の芽生え雨にのびゆく

○

恩地孝四郎

御指定の論文については、不學小生の申上げる限りにあらずと存じます。小生一個の考へでは、裸體美術は性的素因の存す

るものもあると同時になきものもあるべく、その公開の可否については、公開しても寸毫もさし支へなき程の公明な感情を作者、觀者双方卽ち人間界全般に期待します。

○

廣川　松五郎

人體美に限らず、美感と慾望とが一如である事はお說の通り肯定します。その慾望に「性的快感」が潛在して居るか否か、および裸體畫取締に係はる啓蒙思想的當否の問題に就いては、私は丸で無省察だと申上げたい。此の一月末文化學院で展觀された梅原龍三郎氏の二十點に近い淡彩裸婦圖、あの實に素晴らしい裸體畫の前を行き戻りして居る際、何でそのやうな第二思念に襲はれる暇が心にあつたでせう。私の胸は名工が作つた一本の笛となつてあの會場の隅々まで鳴り渡つて居たとでも申しませうか、早春の庭に鳴き惚れて居る鳩の喉のやうに膨れて來るのを覺えたとでもお答へしませうか、たゞほんのそれだけです。感激はいつもだしぬけに無條件にやつて來ます。良質の美術品に觀惚れて居る心から「性的快感」だけを引拔いて見ろといふのは殘酷です。性慾學者は更らに梅原氏の Vermilion の諧調を指摘し、猿が赤いものを見て發情する實例と並べて、私の遊神作用を科學化しないものでもありません。咄！古詩に傍註して之を潰す輩です。お答へまで。

○

津田　青楓

大體に於てお說結構だと思ひます。美術も人間の仕事だから人間性を標準にしたらいゝでしよう。取締問題は厄介な問題ですが、兎に角感覺と云ふものが、一人々々の人間によつて異ふんだから厄介です。

○

寺松　國太郎

復。貴誌難有拜見仕り候。裸體畫に對する貴論一讀致し候。常識論として全部同感に候。立

論の基礎を純寫實的の作品卽ち自然模倣的低級藝術に置いてゐるので、右の斷定に了るは止むを得ぬ事と存じ候。日本に於ては大雅の作品、外國にてはマチスゴーク、ゴーギャン、セザンヌの作品を御熟覽の上再考を願ふより外、何等御答へする道がありません。

○

鹿子木孟郎

御送附の性的方面より觀たる裸體美術論を拜見しました。同感の所もあり、また論中前後矛盾の所もあり、歐洲を見ざる人の愚論とも見たる所もありましたが、兎に角面白く通讀致しました、卑見を申せと言はるれば、先づこんな事です。

○

小川千甕

性的方面から觀たらあの文章のやうに見えるでせう。他の方面から見たら又違ふやうに見えるでせう。目下小生是等に就いて考慮の餘裕なし。不惡御諒承を乞ふ。

○

倉田白羊

誠に多忙の爲め精讀の機を得ませんが、「肉慾感を離れた肉體美感は成り立たぬ」と云ふお說のやうに拜見しました。成り立たぬ場合もありませう。それは藝術價値を増減しないで濟みます。婦人を肉慾遂行の材料とのみ感ずる人は、風景を見て地積と木材價値のみを打算する人と同型でせう。展覽會の裸體畫を一巡查が見て風敎上害ありと認め、次に警視總監が見て何とも云はぬなどの場合、繪から發散するものより繪から吸ひ取るものゝ方が大切のやうです。裸體畫を特に神聖呼ばはりするのは變です。取り分け何と云ふ事もありません。

○

椿貞雄

性的方面と云つても私にはよくわからないが、肉感的と云ふ意味で云ふのなら、澤山いゝ繪があると思ひます。女の裸體なぞはこの感じが生かされて始め

て、女の裸體の持つ一種の魅力が表現出來る氣がします。しかし肉感そのものが美化されてゐなければ、美術にはならないと思ひます。

○

北林西涯

先日は雜誌を頂戴して有難う存じました。大變面白く拜見しました。御尋ねの一件は御說一々御尤です。私は其先を少しばかり申上げて見たいと思ひます。挑發的と云ふ事は最もよく出來た、最も品位の無い作品程惡い意味の挑發的と云へませう。男女七歲にして席を同じうせずと云つた、舊幕時代で裸體美術を見たくも無かつた以前と、若き男女が盛に交際し又裸體彫刻や繪畫を至る處に見る歐州人とを比較するならば、大した差は無いやうです。寧ろ許した方が好くはないでせうか。

私は裸體美術よりは、現在生きてをる美人の顏の方が遙かに挑發的であると信じます。顏には赤い唇があります。言語があります。香を知る鼻があります。涼しい目があります。月の眉があります。男女關係の第一歩は大概顏面であります。けれども顏はかくせません。顏は木や草の花であります。何の挑發もなく、何の快樂もなかつたら生物は絕えます。

挑發的は結構です。然し下品な趣味は御免です。夏の勤務演習の如く、人間生殖方法が無風流であつたら如何でせう。それこそ一大事です。造物者は流石によく考へましたね。又家庭に於ける婦人は夫に向つて、品の好い挑發的であつてほしいものです。

生兒の存在は認めて挑發はいけない、之は無理です。高尙な挑發性はあつて好いと思ひますね。いや無ければ人間は段々少くなります。さうして亡びてしまひます。裸體彫刻の如きは此一面に於ても好適のものです。どうする事も出來ない美と挑發性、自然であります。神の惠であります。下劣なる人格、變態

性の人又嫌な人は自ら別問題ですね。國柄や時代に依つて程度があるのは論をまちません。又作家も觀者も向上すべき事もですね。亂筆でお許を願ひます。

○

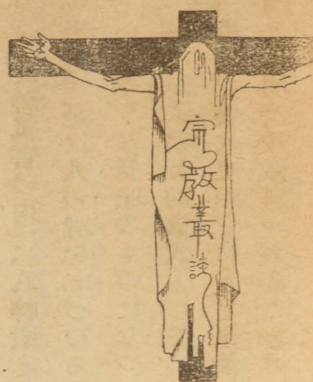
長沼守敬

裸體像に就いては、見樣、考樣に可據、人體を畫とし彫刻とする以上は益々奬勵し又研究するの要有之候ものと確信致候。裸體像を見、情慾を起すものに至りては度す可からざるものと考居候事に御座候。草々。

○

關口隆嗣

「性的方面より觀たる裸體美術」の論旨に於て、大體含蓄のある意見として立派なものと思はれますが、末尾に「‥‥然し私共の眼から見ても、純粹の藝術的作品とは云ひながら、裸體美術に對しては社會風敎のことをも念頭に置いて相當の監視と取締をなすことの要ある所以を切實に感ずるものである。」に到つては折角の名論文も臺なしですね。又ロダンやシンヂングの作品を評して「‥‥之を社會風敎上より見れば、慥かに風俗壞亂的作品である。」との御宣託であるが、商人が歳暮の頭痛の結果謝恩廉賣をやつたり、藥屋や福助足袋の廣告のやうに藝術は何も社會奉仕をしなければならんといふことはないでせう。「藝術は性慾なり。」と歌つて呉れた詩人もあります。藝術が性慾の變形であるとすれば、裸體美術が多少風俗壞亂的作品を齎したとしても、さういきり立つ必要もないでせう。猥褻を猥褻として率直に描かしめよ。藝術の視野は須く自由たらしめよ。巍々たる高山を描くも可。青樓を描くも可。閨房の痴態を描くも可。陰部を精細に描くも可。裸體美術を社會風敎上のため嚴重に取締れとは、ちと寢小便臭い御異見のように思はれますが？妄言多謝。

——以下次號——

日本古代に於ける信仰と性の思想（承前）

本誌記者　栗山信次郎

神懸りと信仰的行事

次の問題は、天宇受賣命が神懸りになつて踊つたといふ、その神懸りの意義である。それがどんな意味で描かれてゐるのであらうか。之を宗教的行事として解するか、またはそれ以外のものと解するかによつて、説明が分れる。

神懸りを宗教的行事として解する場合には、いろ〳〵な考へ方が起つて來る。

神懸りは、文字から解釋すれば、神が懸つて一種の正氣を失つた状態に入るのである。故に懸る神を必要とし、また神を懸ける目的を必要とする。この懸る神なる觀念の極めて明瞭に現はされた記述として最も古いものは、崇神天皇の御世に於て、疫病が流行したのを嘆かれ、大物主神の夢告を得られた場合である。

此天皇之御世、疫病多起、人民死、爲レ盡、爾天皇愁歎而坐二神牀一之夜、大物主大神、顯レ於二御夢一曰、是者我之御心、故以二意富多多泥古一而、令レ祭二我御前一者、神氣不レ起、國安平。

此記事では、神懸なる文字が現はれてゐないが、齋戒沐浴して床に就いて夢を得られたとあるからやはり特に神の懸ることを要求されたものらしい。之を「日本書紀」に就いて見ると、明かに龜トにより神明憑を得たとある。

更に之が進むと、特に審神者なるものを定めて、神の託宣を得んとするやうになる。仲哀天皇が熊襲を征された時、神功皇后に神懸りあつて新羅を征めよと敎へられた。天皇は之に從はなかつたので歿せられた。そこで神功皇后は改めて神の啓示を乞ひ、以て三韓を征伐された。その時、初めて武内宿禰を審神者として、神の御名を問うたことが記紀ともに出てゐる。そして紀の方に於て、この審神者なる文字が見えるのである。

かやうにして、後には宮中の一儀式となつた。卽ち「鎭魂」がそれで、「後妙華寺傳令聞書」の「職員令」に之を釋して、

「是は神祇官の内に、八神殿とてましますを祭る事也、是は人の魂をしづむる祭也」

といふやうな意味のものになつて來たのである。

かういふ宗敎的儀式としての神懸りを見て、前に擧げた神代史のそれとを比較して見ると、その間には明かな區別のあることが知られる。神代史の神懸りは、懸つてゐる對象の神がない。それから從つて、神懸りとなるに當り、神告を得るといふ目的觀が入つてゐない。ただ單なる失神狀態であつたと見る外はない。卽ち、これを宗敎的儀式と見るのは、聊か疑問になつて來るのである。

然らば、宗敎的儀式は、神代史のうちに全然現はれてゐないかといふに、決してさうではない。さうしたものは多くある。宗敎的儀式といふほどではなくとも、魔術的に、所謂目的觀を持つた儀式は明かに存在する。

例へば、岐美二神の子生みの段に、初め女神が先に物を言つたから惡い子が出來たといふので、更に神意を請ひ、やり直さうとすることがある。

於是二柱神議云、今吾所生子不ㇾ良、猶宜ㇾ白二天神之御所一、卽共參上、請二天神之命一、爾天神之命以、布斗麻邇爾ト相而詔之、因二女先言一而不ㇾ良、亦還降改言、

この布斗麻邇は占法であるが、明かに對象も目

的も持つた、宗教的と云つていゝ儀式である。

伊邪那岐神が筑紫日向の阿波岐原に於て禊をしたのも、また汚れを去るといふ一種の魔術的儀式であらう。

天照大御神と須佐之男命とが、その眞心を現はすために誓ひをして子を生むのも、一種の魔術といつてよい。

すべて魔術の初歩は、類似聯合の上に成立つものである。形の上の類似によつて、兩者の間の必然的關係を豫想し、その豫想によつて、一事又は一物から、他の事柄又は物を動かさうとするものである。さうして、その能動的に出づる場合と、さうでない場合とがある。後者は專ら、既に存在する神意とか運命とかを窺ひ知らうとする消極的のものである。例へば、雨を降らさうとするのは積極的魔術であるが、雨が降るかどうかを知らうとするのは消極的魔術である。此の事から見ると、「古事記」に現れた布斗麻邇、卜合、誓ひの類はすべて消極的魔術である。それには、神格を必要とするものもあり、また必要としないものもある。さうして此の外に神を祀ることもあるから、魔術的儀式と宗教的儀式とが、併存してゐたと見てもよいであらう。

ただ一つの例外は、大國主命が須佐之男命の娘須勢理比賣と婚して、蛇の室や蜈蚣と蜂の室に寢かせられた時、妻が比禮を授けてその害をのがれさせたことである。此の意味は類似聯合から來てゐないもので、信仰的行事として聊か緣遠いやうであるから、除外例としてもいいであらう。

かういふ風に見て來ると、神代史には、宗教的儀式も魔術的儀式も取入れられてゐることが分る。さうしてそれは現に、天石屋戸の條に於て、卜合なるものが記述されてゐることにより證據立てられる。

召二天兒屋命布刀玉命一而、内二拔天香山之眞男鹿之肩一拔而、取二天香山之天波波迦一而、令二占合麻

迦那波ニ而、

とあり、明かに鹿卜の行はれた事が記してある。この鹿卜の法は、果して何のために行はれたのであらうか。消極的魔術とすれば、天照大御神が石屋から出られるかどうかを占つたのであらう。然し積極的魔術とすれば、大御神を出さんとする、能動的の意味を持つてゐたものであらう。何れにせよ、目的觀がなければならぬ。さうして見ると、神懸の場合にも、目的觀はあつたに相違ない。それは最初から分つてゐる通り、天照大御神を出すことである。ただその出す方法としての神懸りの意味がはつきりしてゐないのであつたが、それに魔術的意義ありとして考へて見れば、この猥雜な踊りに於て、性が信仰のために役立つてゐるのか、または信仰が性のために役立つてゐるのかといふ兩者の結合の關係が考へられて來ると思ふのである。

信仰と性との交渉

この關係を考へることは、再び根本の問題に返つて來たので、そこでまた改めて岐美二神の子生みの段を繰返して見よう。

二神が、柱を廻つて美斗能麻具波比をしたといふことは、今迄も學者によつていろ〳〵に考へられてゐたが、端的にその事實を考察して見れば、柱を廻ることは一種の踊りであり、それに性交渉を結びつけたものに違ひあるまい。柱を廻るのに若し神を祭るといふ意味があるとすれば、その踊りは卽ちまた宗教的行事でもあつたであらう。さうしてこの宗教的行事が、また性的交渉のためにも利用されたのである。利用したといふよりは、兩者が同じことのやうに考へられ、行はれてゐたのである。丁度今日でも各地に殘つてゐる盆踊りの行事が、また男女の交會の機會となつてゐるやうなものであつたらう。

踊りをおどることによつて、二神の情熱は極致に燃え上つた。その燃え上つた所で性的交渉が起

つてゐる。さうして、それは神を祀る杜の周圍である。ここに、信仰と性とを一緒にして考へた形跡が見られる。

心理的に考へれば、宗教から來る法悦も、性慾から來る肉悦も、その感情狀態は同じものである。故に兩者は互ひに移行しやすい關係にあり、宗教の篤信者がその情熱の極致に於ては、神を戀人の如く感じたといふやうな例もある。かゝる密接な心理狀態を、上代人が區別して認識することが出來なかつたのは、或は當然のことと云へるかも知れない。

之から見ると、天宇受賣命が猥雜な踊りをしたのも、肉悦と法悦とを混合した一種の心理狀態になつて、無我夢中に踊つたのであらう。さうしてそれが、天照大御神を石屋から出すのに力があると、魔術的にも考へられたであらう。卽ちこの踊りは性的でもあればまた宗教的のものでもある。關係がないやうでも、大なる關係を持つてゐる。

次にまた、伊邪那岐命が黃泉國から逃歸る時、八の雷神の率いた黃泉軍が追うて來たのに對して桃の實を投げて追ひ拂つたといふのも問題になると思ふ。

到二黃泉比良坂之坂本一時、取下在二其坂本一桃子三個上待擊者、悉逃返也、爾伊邪那岐命告二桃子一汝如レ助レ吾、於二葦原中國一所有宇都志伎靑人草之、落二苦瀨一而、患惚時、可レ助告、賜レ名二號意富加牟豆美命一、

桃が魔を拂ふといふ力のあることは、支那思想から來てゐるといふ一說があるが、今日でも支那にある童乩（たんきー）といふ一種の神憑行者が桃の枝を用ふることから考へると、さういふことも事實かも知れない。もしこの思想が事實であるとすれば、それは性的の意味から來てゐるのでなからうか。桃に性的機關の寓意を帶ばせ、その汚れによつて魔を拂ふといふ思想、卽ち一種の物忌を利用してゐるのではなからうか。然し之は疑問で、之を立證

する文獻も民間說話も私は確得したわけではないから、今は疑問として指摘するに留める。

次には大國主命の條で、その嫡妻たる須勢理比賣命が非常に嫉妬深くあつたので、出雲から倭國に上らんとした時、馬の上から歌を詠み交して慰めた。そこで后も夫の意を察し、盞を交し、手を取り合つて契りをこめたが、之を神語（かむこと）といふとある。

如此歌、卽爲二宇伎由比一而、宇那賀氣理弖、至レ今鎭坐也、此謂二之神語一也、

この神語といふのは果して何を意味するのであらうか。夫妻間の戀歌を持つて來たあとで、直ちにこの二神を神として祀つたことを云ひ、その戀歌が神語であるといふ。いかにも釣合のとれない、出たらめの記事としか受取れない。然し之を、性的事實と信仰とが交錯してゐた上代人の心理狀態に置いて考へるとき、兩者が交渉して現れてゐるのも、また無理がないやうに思はれる。

之らのことから見ると、上代人には、極めて粗略ながらも、性と信仰とに關する意識があつた。然し兩者は、その性質の或部分が相似たるものであつたが故に、劃然と之を區別することが出來ず、時には之を混同してゐた。卽ち宗敎的行事が性的交渉に移行したり、性的昂奮が宗敎的情熱に移行したりすることがあつた。さうしてまた、桃の實の話を性的事實として解すれば、この兩者の相移行することよりして、性的の事項が魔術的の意義を持つと考へたこともあるらしく思はれる。

それからまた、單に物語の記述として、兩者を混同してしまつたことも見られる。卽ち、宗敎的の記述のうちに、性的機關のことを書き込んだりするが如きである。此の結合は無意味なものであるが、上代人が兩種のこと柄をはつきり區別してゐなかつた傍證としては役立つやうに思ふ。

むすび

今まで述べて來たことを綜合して、上代人の心

理に對する私の考察をまとめれば、先づ次の數條に要約することが出來る。

第一は、上代人が性に對して強い興味を持つてゐたといふことである。これは何處の原始人について見るも同樣であつて、之を度外視しては、古典や古代文化を本當に開明することが出來ない。從來の學者はとかく「臭いものに蓋」の主義で、此方面を閑却してゐたために、分るべきことも分らなかつたやうである。

第二には、この上代人の心理の根柢に橫はれる性的興味が、その心理の表面への發現を求めてゐる。その發現を求めるに當り、種々な假裝をして現はれてゐることである。近年フロイトが發見した精神分析の原理に從ふと、人間の感情が抑壓された場合には、それは壓伏されたまゝに終るものでなく、必ず何らかの方法で出口を求める。さうしてそれが、或は夢となり、或は妄想となり、或は強迫觀念となることを說いた。彼はこの論法で宗教的儀式の分析にも及び、「トーテムとタブー」なる著述を試みてゐる。この見解に從つて見る時、上代人の性的興味はいろ〳〵な形に現れてゐることが知られる。卽ち踊りとなり、信仰の形式となり、卜合となり、また飛び〳〵に諸所に現れる性的機關の敍述となつてゐる。故に之らの記載を解釋するに當つては、その根柢となれる心理的事實を分解して掛らねばならぬ。

第三には、以上の事實を知ることによつて、上代人の心理的發達の段階を見究めることが出來る。フロイトによると、人間の性的衝動は幼兒期から認められる。その幼兒期に於ては、性的對象が自己自身のうちに沒されてあり、そこに滿足を得てゐるので、之をオートエロチズム autoerotism の時代といふ。少し進んでは、自己自身が性的の對象となるので、之をナルシズム narcism の時代といふ。それから進んで、普通の外界に性の對象を求めるやうになるといふ。之を信仰心理の發達

と比較して、アニミズムの時代はナルシズムに當り、宗教時代は對象を要求し出す時代で、科學の時代が成熟期にあるといふ。（“Totem and Taboo” Brill 譯 P. 147—150）

この比較說が直ちに許容されるかどうかは疑問であるが、性と信仰とを明瞭に區別し得ず、對象を要する場合もあれば要しない場合もあり、いろいろなものを雜然と記述するやうな狀態にあつた神代史の說話者は、その心的生活に於て極く幼稚なものであつたことが知られる。

第四には、この原始人心理の考察から、道德とか法律とかの關係も觀察される。大國主命が一夫多妻を說明するいゝ例であるが、神代史に現はれたその話は、どうも單純な性的衝動に基く多妻だとしか考へられない。制度の上の一夫多妻觀では、父系制度が成立つてからであると考へられるが、心理的事實としては、衝動本位であり、それが彼等の生活の大要素をなしてゐた。その他の性的記述もそれで、極めて單純に、思惟し且つ行動してゐる。之によつて見れば、彼らの間に於ける道德は、思索の產物でなく、行動の產物である。行ふことが直ちによいことである。將來に對する豫想も豫備もない。經濟其他の關係に於て、どんな背景に立つてゐたかは、私の與り知るところでないが、少くともかういふ單純な心理的生活の上に立つてゐたのであらうと、私には推せられる。

まだ考察すべき點を大分洩らしてゐるが、今はこれで簡單に結論をつけておかう。（完）

生靈と夢と死

――前號「四つの夢と死」のつゞき――

淺草平富重

刎頸の友皆吉君

皆川壽生――彼は私の友人です。と只これだけでは世間に有り觸れた交友關係のやうにしか耳に響きませんが、それでは甚だ物足りなく思はれますし、第一これから書かうとする事柄を力強く言ひ表はす上に於て頗る拍子拔けの感がありますから、今少しく詳細に說明して置き度いと思ひます。

鹿兒島を南へ三百海里、太平洋上に點々として浮ぶ奄美大島群島、大島紬の產地として知られてゐる其の大島郡の中でも琉球に近い沖永良部島、其の一小島こそは私達の故鄕なのです。農を生業とする村で、同じく上流の家庭に同じ年に生れ、同じやうに育てられた關係からでゞもあるのでせうか、少年の頃から兩人は最も親しく交はり、數町とは距らぬ互の家を往來し、學級は一年だけ彼は私より後れてゐましたが、村から一里離れた高等小學へ通ふのにも、互に誘ひ合つて兩人は大抵一緖に通學すると云ふ風で、肉身の兄弟とは亦格別の親しみの、よその見る眼も羨む程の親交を續け、小學を出てからは修學の方向を異にした爲めに離れ〴〵になつたのですが、離れて居れば亦別趣の親しみを增し、いつぞや「刎頸の交」の意味を尋ねた時、家兄から、皆吉君とお前の交りがそれさと形容されたこともあります。その後お互に長じて、だんだんと世智辛い浮世の荒波に乘り出してからは、仕事を異にし、思想も同一ならず、又性格に於ても無口なるの點に於ては殆ど變りはなかつたが、私の熱情的なのに反し彼は冷靜の方であり、時に感情のうるほひを見せるかと思つても容易にそれを外面に現はさぬと云ふ風があり、(近來私が稍冷靜になりつつあるが如くに思惟されるのも、思想の變化と境遇との然らしむるところではありませうが、而かも彼の感化の與つて力あることを否む譯に行かないと思ひます。)氷炭相容れずと迄は行かなくとも、私は攻擊的で彼は守備的とでも云ひませうか、少くともそれだけの違ひはあつたでせう。實際時と場合に依つては、互に意見の戰ひを見たこともあり、又時に彼の强情に反感を抱くやうなこともありましたが、併しそれが爲に兩人の友情に及ぶと云ふことは更に無かつたのです。私も彼も、七八年も前から鄕里を飛び出して、海の彼方の島、郡の中心地に於て、彼は汽船會社に、私は畜產業に從事してゐた時、兩人で一軒の家を借り、飯焚きを賴んで一年近くも氣樂な自炊生活を送つたこともありますが、お互に勝手な熱を吹き、銘々の自由意志に依つてお互に隨分我儘な起居動作を敢てしたのですが、其の間に於ても、精神的にも亦物質的にも何等疎隔を來たすが如きことは微塵も無かつたのです。只體質に於ては著し

い相違を來し、身長の如きは殆ど高低なかつたが、私の頑健なのに反し、彼は外見無病らしく見えても、どちらかと云へば弱い方で、一年に何回となく病臥しては私を心細がらせ、或時の如きは旅先に於て病氣の報に接し、海を越えて彼の病床を見舞つたこともあります。されば私としては常にそのことに心を痛め「若し君が死んだらこの僕はどうなると思ふ。少しは僕の身にもなつて見るがよい。」などと怨みの手紙をよこしたこともありますが、數年來は比較的に健康體になり、肉付も血色も著しく勝れて、最早健康上の心配は無用かと思はれてゐたのです。

兩人の友情は斯樣に頗る密接なのでしたが、彼が當分實業方面以外に眼を向けんとせざるに反し、私は智識慾の旺盛なるを如何ともする能はず、せめて三十臺の內に都會地へ飛び出して、何か一仕事して見たいとの大それた望を抱き、茲に兩人は或年月の間別れることになりました。其の別れの期間が數年の短い年月か、それとも十數年の長きに亘るか豫知されないので、假令私の歸省に依つて互に相見ゆるの機があるとしても、離別と云ふことが既に感傷的になつてゐます。別れぬ前から互の心に寂しいと云ふ感を抱かずに居られないこと云ふまでもありません。別けても感情的な私は、この友との離別の哀感に、どれだけ心を痛めたことでせう。若しも私が去つた後、彼が病氣に苦しむやうなことがあつたらどうしよう……斯う思ふ時、私の都會へ出ようとの意氣込は鈍つて仕舞ふのです。で、そのことを彼に告げると、彼は事もなげに笑つて、

「大丈夫だ、君こそ都會の紅塵にまみれて、都會地特有の傳染病などの御見舞を受けないやうに用心したまへ。ナニ僕は此の通り大丈夫だ。」と腕を叩いて見せたこともあります。

兎も角別れることになりましたが、此の時私をして出發を躊躇させる或る意外なることが發發しました。それは一昨年のたしか七月の初め頃だつたやうに思ひます。私は午すぎから用足しに出掛けて四時頃下宿へ歸つたのですが、丁度其時、私は生來未だ曾て經驗したことのない、眞に不可思議なる事象に出會つたのでした。當時の狀況を詳說せんが爲めに、私は圖に依つてお話し度いと思ひます。

生靈！不吉の前兆！

當時私達兩人は友人永田君（假名、目下東京で或る種の事業を經營してゐます。）の經營してゐる旅館の一室を借りて下宿してゐたのでしたが、玄關よりはいつた私は、丁度眞夏の候で各室共明け放しになつて居り、當時六疊の室が空いてゐたので、點線の如く六疊の室を兩人の居室たる八疊の室へと通り拔けたのですが、其の八疊の室と隣室の四疊の室との間の唐紙が一枚明け放してあるので、何心なく振り向くと、四疊の室の緣近く、わが友の皆吉君（E）と下宿の主婦（F）とが三尺とは離れないで、此方へ背を向けて、裏庭を眺めて居るのです。只それだけならば何も不思議はありません。尤も其頃友は會社の事務多忙の爲に、いつも夕方の點燈時を過ぎて歸るのを常としてゐたのに、其日は早く歸つてゐたので、これは珍らしい、もう仕事は片附いたのかしら……と考へながら、

「只今。」と一寸挨拶しておいて、Cの着物掛けの處で、汗みどろになつた他所行の着物を手早く脫ぎ捨てゝ浴衣に着換へ、井戸端で汗でも拭かうとタオルをぶらさげて次の四疊の室へ行つた其間

僅かに一二分間、其處には最早友は居ないのです。

「皆吉君は？——また會社へ行つたんですか。」と私は主婦に問ひかけると、主婦は振り向いて、

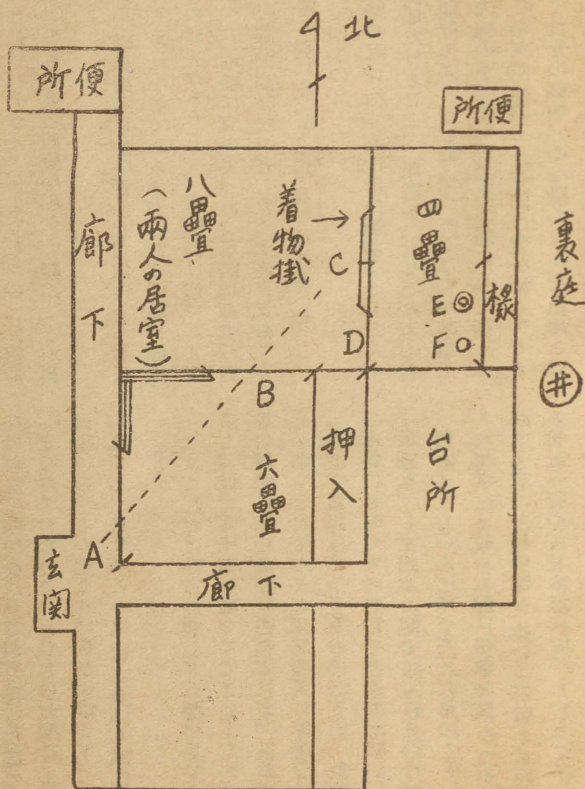
「あら……御歸りなさい——皆吉さんはまだ會社から御歸りにならないわ。」と意外な返事。

「冗談言つこなしですぜ。」

「だつて、まだ御歸りにならないんですもの。」

「冗談言つちやいけません。僕が歸つて來る時、現に其處へ坐つて居たぢやありませんか。」

「あなたこそ御冗談でせう。——一時過ぎに歸つてらしつて、お晝飯も大急ぎでおあがりになるとすぐ又御出掛けなすつたんですの。どうせ今日も御歸りは遲いでせうよ。」

北
便所
便所
裏庭
緣
四疊
E F
着物掛
C
D
八疊（兩人の居室）
廊下
B
押入
台所
井
六疊
A
玄関
廊下

「をかしいな。では今其處に坐つたのは誰ですか。」

「まあ！薄氣味の惡い……。どなたもゐやしなかつたわ。あんまり暑いから一人で涼んでゐたんですのよ。」

「奥さん！そりや本當ですか……」

「本當ですとも！……？」

此の明答を得た一瞬間！私は或何事かの豫感の爲に愕然として慄へあがつた。生靈……!?間一髮を容れず、絶望！と恐怖、それに悲痛の感情とがごつちやになつて、しかもそれが電光の如く疾風迅雷的に腦裡に閃いたと思ふ其瞬間、私は大鐵槌か何かを以て腦天を打ちのめされたかのやうに、眼がくらんで危くよろ〳〵と倒れんとするところを、漸くのことで踏みこたへました。そして殆んど失神したもの丶如く、呆然と佇立すること數分間、胸の動悸は早

鐘のそれにも増して激動してゐます。背中から冷水を被つたやうに、全身の毛がよだつてゐるのでした。

漸く意識が回復するに及んで、まだ靜まらぬ胸の動悸を押し鎭めながら私は只今の現象に就いて靜かに考へて見ました。主婦の明答に僞りがあるやうには思はれません。併しながら一二分前斯くも鮮かに友の姿を目擊した私自身の視覺を聊かも疑ふことが出來ないのです。

友は數ある着物の中で、琉球絣の單衣を好んで、常によく着てゐたものでしたが、只今もそれを着てゐるのでした。兩足は緣に投げ出して、左手は膝にのせてゐるらしく、右に斜に傾けた上半身を右後方へ疊に突つ張つた右手に支へて、あゝ草臥れちやつたと、彼がいつもする癖その儘の姿勢なのでした。主婦は女らしく愼ましやかに跪（ひざまづ）き、右手を疊に突いて上半身を心持左へ傾けて、兩人共私へ其後姿を向けてゐるのでした。

斷つておきますが、當時の私は何も心に思ひ煩ふこともなく、左程疲れてもゐず、近視眼なりとは云へ眼鏡をかけてゐましたし、それ故心の迷ひでも視覺の誤りでもなかつたことを確信します。夏の日の烈々たる光線の下、僅か數步の距離に於て斯くも明確に目擊したのです。その友が僅か一二分間に姿を消してしまつたと云つても、どうして自分の眼を、心を疑ふことが出來ませう。勢ひ主婦の言に疑ひを抱かざるを得ません。友が惡戲のつもりで隱れてゐるのではないかと、簞笥のかげや本棚の横、緣傳への便所の中、庭下駄を穿いて裏庭の隅々から、臺所、階下の各室を一廻り廻つて友を探しましたが、友の姿は見えません。二階へ上つて押入の中から戶袋のかげに至るまで、隅なく探し求めても、其處にも遂に友の姿を見出しませんでした。再び四疊の室へ歸つて、先刻友が坐つてゐた跡を眺めながら、生靈……!? と云ふことが腦裡に閃くと共に、何故とは知らず心の中に、萬事休矣! と絕望の聲を放ち、同時に眼は淚に曇つてしまひました。この態をけげんの眼をみはりながら無言の儘で眺めてゐた主婦は、

「どうなすつたの?。あなたのお顏はまつさをだわ。お氣分でもお惡いの。」と心配さうに問ひかけます。

「奧さん、只今のことは皆吉君にも誰にも話さないでおいて下さい。」

私はこれだけを言ひ殘して八疊の居室へ歸り、倒れるやうに橫臥し、頭から毛布を被つてしまひました。生靈! 不吉の前兆! 是等の觀念に私の心頭は占領されて、淚が潸然と頰を傳はるのでした。併しそれでもまだ先刻の不可思議なる現象を不吉の前兆として是認する譯にはゆきませんでした。枕元に坐り込んで、

「本當にどうなすつたの。なんだか氣がかりになるから譯を話して頂戴な。」と主婦が心配してくれるのに對して、

「何んでもないんです。死んだ母のことを思ひ出して悲しくなつたんです。」と泣いた顏に平氣を裝ひながら、私は起つて戶外へと出ました。一縷の望を抱いて三町とは距てゝゐない友の勤めてゐる會社へ行つて見る氣になつたからです。

會社の入口から覗くと、友はいつもの机の前に此方へ背を向けて、例の琉球絣の單衣を着て、一心にペンを走らせてゐます。嗚呼やつぱり駄目だつた! と思ふと同時に、迸り出んとする淚を漸く呑み込んで、そのまゝ歸らうとしましたが、何だか物を言つて見たくなつたので、友の傍へ進み寄り、靜かに肩へ手をおいたら、

友は振り向いて無言の儘一寸笑顏を見せるのでした。
「君はさつき下宿へ歸つてゐなかつたの。」
「そんな暇があるものか。晝食に歸つたばかりさ。」
「そりや本當かい。オイ　」
「本當だとも、この通りの始末さ。——なぜ?」
「なぜでもないがれ。——君、もう歸らうよ。」
「まだ仕事が片づかないんだ。君は歸つてゐたまへ。」
「さうか。ぢや今日は早く歸つて來たまへ。」
茲に於て私の一縷の望みもすつかり消え果てゝしまひました。即ち先刻目擊したのは友人の所謂生靈だつたのかも知れない。不吉の前兆! 若しも友の身の上に一大變事が突發するとしたら、おれは……嗚呼このおれは……。

生別又兼ぬ死別

其夜、友は七時頃會社から歸つて來ました。四疊の茶の間で兩人食卓を圍んでも、何故か私は友を直視するに忍びませんでした。食事が進まないので、私が箸をおくのを見て友は、
「どうしたんだ、顏の色が惡いぜ、氣分でも惡いのか。」と云ひながら無心に箸を動かしてゐるのが尙ほのこと私の心を曇らせます。
「少々頭痛がするのでれ。」
我慢にも其處に居たたまらなくなつた私は、これだけ言つて居室へと歸つてしまひました。
それから數日と云ふもの、私は一室に閉ぢ籠つて、人知れず泣いてばかり居りましたが、或日の夜晩く一人で『死後は如何』を讀んでゐる所へ、外出先より歸つて來た杉山君(假名。これも私達と同鄕の友人で、東京で大島紬を商つてゐるのを、品物仕入れの爲めに二三日前到着して、三人同じ室に居つたのです。)はいきなり私の傍へ坐るが早いか、
「オイ×さん、君は此頃一人で始終考へ込んで泣いてばかり居るさうだが、一體どうしたんです。故鄕が戀しくなつたんでせう。」
とからかひ始めるのです。この杉山君は少しいたづら好きで、チヤツプさんと云ふ尊稱を奉つておいた程で、今夜も又例のいたづらかと思つたから、
「莫迦を云へ。」の一言で相手にしないで、相變らず本へ眼を注いで居ると、
「本なぞどうでもよい。何故人の見ない所で泣いてるのかその譯を白狀に及べ。」とおどけまぢりに迫つて來るのです。元來この杉山君は商用の爲めに一年に何回となく東京から歸つて來ては、十日も二十日も滯在するし、商賣の懸引で皆吉君とは別趣の交友關係がありましたので、私は數日前の、彼の不可思議なる事象を委しく話した後、
「……さう云ふ譯で、僕が此の地を去つた後に於て皆吉君が病氣に罹るやうなことがありはしまいかと、唯それのみが何よりも氣がゝりになるから、萬一君の滯在中皆吉君が病臥でもするやうなことがあつたら、君賴む、僕の代りにまで看病して貰ひ度い。そして電報で僕に知らしてほしい。」と賴んだのです。此の淚ながらの物語りを聞いて、淚など滅多に見せることはあるまいと思はれてゐた彼のチヤツプさんの杉山君までが、眼に淚を一杯湛へてゐるのでした。
この事あつて以來、都會に憧るゝ私の心は益々鈍つて行くのです。私に所謂生靈を見せた友と別れて、海山數百里を距てた土地

に生活することの不安に堪ゆべくもないので、寧ろ前途の希望も、何もかも打つちやつて、私は只彼の不憫なる友と一所にいつまでもゐよう、一生を埋れ木となつて朽ち果てゝも構はない、皆吉と云ふ天にも地にもたつた一人の友あつてのおれだ、その友と別れてゐて何の樂しみがあらうぞ！斯うまで思ひ込んだのですが、併し友は――何も知らない友は、私が躊躇するのをもどかしいことに思ひ、

「僕だつていつかは飛び出す時機が到來しようではないか。君は先へ行つて根據を築いておきたまへ。」と頻りに私に出發を勸めるのです。其言葉に勵まされて、後ろ髮を引かるゝやうな思ひをしながら、愈々出發と云ふことにはなつたのです。

忘れもしない、それは大正十年八月五日の朝、名瀨の港に寄港した鹿兒島沖繩間定期航海の大義丸は、港町の隅から隅へ響き渡るやうな汽笛を間斷なく吹き鳴らして、船客の乘船を促してゐます。船頭は最後の艀船の纜を切らうと呶鳴つてゐます。蟲の知らせとでも云ふのか、友との離別の哀感、その斷腸の思ひに此の時まで乘船をためらつてゐた私は、友に促がされて最後に艀船に乘りました。艀船は沖の本船へと急ぎます。波止場に見送りに來てくれた多くの友人知己の間に、しよんぼり立つてゐる友――今日も例の琉球絣の單衣を着てゐる彼の哀しき友の姿を見失ふまいと、私は視線を少しも外しませんでした。やがて多くの見送りの人は西へ東へ立ち去つて行くのに、哀しき友は尙一人殘つてゐるではありませんか。艀船が沖の本船へ近づけば近づく程、友の姿は小さく見えるのです。本船に來り移つた時は、もう波止場にわが哀しき友の姿は見えませんでした。

斯うして兩人は別れたのですが、嗚呼この別れが、生別又兼ぬ死別にならうとは……。

二つの夢

先生。私の不可思議とするところは是丈にとゞまりません。このことを、次の奇怪なる二つの夢と結び合せて考へる時、私の疑惑は益々深まつて行くのです。

友と別れた私は、一時神戸に落ちつきました。其年の九月某日の午すぎ、下宿の二階に午睡を貪つた時の夢に、

――場所は鄕里である。門前に一人佇んでゐると、何處よりともなく、歌ひさゞめく聲に太鼓の音が賑やかに聞えます。通りがかりの人に、あれはどこの家だと尋れると、皆吉君が某女（名を祕す）と結婚して、そのお祝ひをしてゐるのだとの返答です。妻子のある皆吉君が某女と結婚したといふことにも、又太鼓の音が皆吉君の宅とは正反對の方向より聞えるのにも不審を抱かなかつた私は、皆吉君が結婚してそのお祝ひをすると云ふのに何故おれに知らさないのだらう、と考へた。――

夢はこれだけです。實のところ、別れてから一ケ月間、私の居所が定まらなかつた爲めに、その時までお互に音信はなかつたのですが、夢に氣がついて私は居所を知らせるべく友への葉書を認め、近所のポストへ投げておいて、再び午睡をつゞけてゐますと、又しても友の夢を見ました。此の時私の心頭に浮んだものは、彼の不可解の事象です。若しや……と友の安否が氣遣はれましたので、今度は手紙を書いて友の近況を尋れてやりました。その手紙には大體次のやうな意味を書いたやうに思ひます。

……午睡を貪つてゐたら、斯樣云々の夢を見たので、先刻葉書

を認めて出しておいたのだが、あの葉書を出してから、再び午睡をつゞけてゐたら、又しても君の夢を見たので、君の安否が氣遣はれるが、からだは達者か、實は僕が出立以前永田君(假名)の旅館に君と同宿中、君の身上に關して實に不可思議なる現象を目撃したので、僕はそれをいつも氣にして居る。當時君に其の事を告げようかと考へぬでもなかつたが、それが爲めに君の神經を過敏ならしめては困ると考へたから默つてゐた。若し君がその不可思議なる現象がどんなことであるかを知り度いと思ふならば、永田君の細君に聞けばわかる。兎も角からだを大切に。

其後十數日を經て、友からは次の意味の返事が來ました。

いつも變らぬ友情を有りがたく思ふ。實のところ昨今第二號問題が持ちあがり、その去就に迷つてゐるところだが、その事が君の夢にまで現れたとすると、勢ひ僕は第二號の方へ曳きずられて行かればならぬ運命にあるのだと觀念せざるを得なくなる。何事も運命だ。永田君の所謂神の攝理に從つてゐさへすれば、末は野となれ山となれ、何とかけりが自然につくだらう。

云々

冗談とも眞面目ともつかぬこの返事を讀んで、私の見た夢が強ち根も葉もないことでなかつたことを思ふと共に、所謂第二號問題に就いての詳細なる知らせを待つて私の意見を書いて送らうと思ひながら、ツイその儘になつてゐましたが、併しそれは嘘で、神戸の平君から、僕が結婚したとの夢を見たと知らせて來たから、からかつてやるつもりで、昨今戀の三角關係に迷つて居ると云うてやつたから、きつと怒つて手紙をよこすだらうと笑つてゐたと、これは當時友と一所に居た永田君から最近聞いたことです。

一つの夢は斯くの如く茶化されてしまひましたが、先生、次の夢を先生は何と解釋されるのでせう。

それは翌年、卽ち十一年の一月二十七日と八日の兩日(所謂生靈を目撃してより約七ケ月)私は仕事の都合で大阪に泊つたのですが、二十八日の夜の夢に、

──場所は何處とも判明せず、朝霧の立ち籠めた小高い丘の下に私は一人佇んでゐました。ふと丘の上を見ると、其處には鄕里の村役場の助役を勤めて居る山崎君(假名)が立つてゐて、四邊の景色を眺めてゐます。其丘が劇場の廻り舞臺のやうに一廻轉すると、其跡に是も同じく村役場書記の川田君(假名)が立つて、前と同じく周圍の景色を眺めてゐました。いつの間にか場所が變つて、前と同樣朝霧立ちこむる雜木林の中、此處は木がまばらに立つてゐる三十坪ばかりの平地に、友の皆吉君と私と兩人立つてゐるのです。と其處へ、木立の中から簑か何ぞのやうなものを着込んだ異裝の獵人がつか〳〵と立ち現れ、いきなり友へ銃口を向けて、激しき音響と共に銃口より火藥の煙が出たかと思ふ途端に、傍に私と並んで立つてゐた友はバタリと斃れてしまひました。續いて獵人は私へ銃口を向け、前と同樣の音響と共に銃口より迸り出づる火藥の煙を認めたのですが、何故か私は斃れませんでした。そして獵人は默つた儘、悠々と木立の中へ立ち去らうとします。私は彼の獵人を呼び止めて、

「何故皆吉君一人を斃しておいて、俺を殺さないのだ。死ねば一緒だッ！」と詰問しました。彼の獵人は振り向いて、

「お前の命はしばらく預けておく。」

是れだけを言ひ殘して木立の中へ姿を消してしまひました。

場面三度變り、此處は冬枯の曠野の眞ん中、三十四五歲の年輩の男が、天幕か何かを張つてその下に棚を三つ程並べ、其棚には二三斤づゝ長方形に切られた肉が處狹しと載せてあり、棚の下は三和土(たゝき)になつて居り、一方の隅に擂鉢やうの容器を置いて、棚の肉から滴り落つる血を溜めてあります。そして彼の男は棚の前に胡坐をかいてゐるのです。一人で此の場の光景を眺めてゐた私は、

「その肉は何だ。」と尋ねますと、

「人間の肉だ。赤肉が男の肉で、白肉の多い方は女の肉だ。」と毒々しげに答へるのです。此の「人間の肉だ」との返答に、氣の弱い私は危く倒れようとするところを、漸くのことで踏みこたへました。そして怖いもの見たさに、尙もおづ〳〵眺めてゐると、彼の肉屋の男は、いきなり傍の擂鉢――人間の血の滴りが一杯溜つて居る擂鉢やうの容器を兩手に鷲掴みにしたかと思ふと、グツグツと息もつかずに、血の滴りを一息に呑み干してしまひました。この物凄い光景に、私は遂に失神してしまひました。――

こゝで惡夢から覺めたのです。冬だと云ふのに冷汗が全身に滲んでゐる。胸の動悸は高鳴つてゐました。

實にいやな夢である。皆吉君が殺された――お前の命はしばらく預けておくと云つた――人間の肉――其人肉の血を一人の男が呑み干した。――

さらでだに夢に神經を尖らす私です。殊に彼の所謂生靈を目擊して以來、常に友の安否を氣遣つてゐた私が、この氣味惡い夢を見て、どうして平然として居られませう。翌二十九日は戰々競々の裡に暮れて、其夜の九時頃神戸の下宿へ歸つて、玄關で靴を脫いで居るところへ、女中は私へあてた一通の電報を持つて來てくれました。靴の紐解く手を休めて慌しく開けば……。

ミナヨシイマシス　ナガタ

感情に立脚して

先生。皆吉君と私との交友關係は前に述べた通りです。萬一皆吉君が早世するやうなことがあつたら俺はどうしよう。恐らく一人殘されて生きては居られないだらう……私は久しい以前から、時々こんなことを考へては、

「莫迦な、兩人の中一人が早く死んでたまるものか。」と自ら強く打消してゐるのでしたが、嗚呼その友は……私に其生靈を見せた哀しい友は……私としては天にも地にも代へ難いとさへ思つた皆吉君は、憐れ三十四の新春を一期として死んでしまつたと云ふではありませんか。

嗚呼、夢か……現か……。現か……夢か……。

友は遂に死んだのか！　わが皆吉君は本當に死んでしまつたのか！と思ふとき、私の天地は全く暗黑になつてしまひます。併し私は只今こゝに、徒に淚つぽい字句を並べるの迂愚を避けます。それは、あらゆる悲みの言葉を最も圓熟せる筆で書き列れても、友を喪つた私の哀傷の心は到底充分に言ひ現はし難いからなのです。そして、友の死に思ひを及ぼすと云ふことは、私に取つて何よりも苦痛とするところではありますが、併し彼の所謂生靈と、奇怪なる夢と、それに友の死、この三つの事柄に就いて、私は無關心では在り得ない。其處に何等かの心靈的作用が伏在するものゝ如くに思はれてなりません。以下少しく私の感想を記し度いと思ひます。

中村先生。前にも述べた如く、私は心靈的智識は全く持ち合さないのです。その癖迷信に類することが大の嫌ひで、一時郷里に在つて青年會などに關係して居つた時の如き、迷信を打破するのだと稱して、古來盛んに行はれてゐた巫女を斥けて、我が村へは巫女の足を一歩も踏み込ましめなかつたものです。さうして、村に不幸のあつた後には、きまつたやうにいろんな風說が傳はります。一例を擧ぐれば、やれ夜半に彼の家の附近で異樣な音響を發したとか、人の泣き聲を耳にしたとか、牝鳥が鳴いたとか、犬が悲鳴を擧げてゐたとか、米を搗く音を聞いたとか、是等が何れも夜半の出來事だと云ふのであまり好い氣持ちはしません。又烏が墓地と彼の家の屋根とを往來したとか、怪しい光を見たとか、甚だしきに至つては、死んだ人が其生前に於て墓地に立つてるのを見たとか、或は途上で出つくわしてふつと姿を消したとか（是等は所謂生靈を意味する）流言類りに起るのですが、私は是等を虛構の言だとして一も二もなく否定する。殊に其多くは婦人の口より出づるもの丶如く、人の死後に於て斯かる出鱈目の風說を言ひふらすことの輕擧に對して、少なからず不快の感を抱きつゝあつたのですが、先生、私は今日私自身の經驗に徵して、是等の風說の悉くを虛構だとして斥けることが出來なくなりました。私自身の經驗とは云ふまでもなく、友の死の七ヶ月以前に目擊した友の生靈なのです。「言海」には「生靈とは生きたる人のたましひの他に祟ること——いきすだま——死靈に對す」と解釋してあります。今日の進步した科學の上から考へて、生靈なるもの丶存在を肯定すべきや否やは私は知りません。

併しながら私の目擊した友の姿は、是を錯覺だとか、幻覺だとか云つて、私自身の心の迷ひから起つた現象だとするには、當時の私の意識は餘りに明瞭なのでした。私の目擊した友の姿も、又餘りに鮮かなのでした。其事あつて一年有半を過ぐる今日でさへ、尙ほ當時の友の　はまだ〳〵と私の心眼に現はれてくるのです。いつぞや讀んだ芥川龍之介氏の「二重人格」とか云ふ小說に、或人が自身の姿を、一度は往來の眞ん中で、一度は自分の書齋か何處かで、前後二回も目擊して、それが爲めに異常なる神經の興奮におびえてゐると云ふやうなことが書いてあつたやうに覺えてゐますが、作者は何かの學說に據つて其小說を書かれたのかどうかは私の知るところでありませんが、私としては是を一箇の單なる小說として讀過することは出來ませんでした。其處に何物かの暗示が含まれてゐるやうに思はれたのです。私の目擊した友の姿が、彼の小說に現れた所謂二重人格に類似のものかどうかも私は知りません。

むづかしい學理上の考察は無學なる私の能くするところでありませんから是を避けることゝして、感情に立脚しての私は、眼に見えぬ或偉大なる力を有する何者かゞ、神秘的作用に依つて、わが友の死を豫知せしめんが爲に、最も親しい私に友の姿を——生靈を見せたのだと斯う解釋せざるを得ません。さうして、斯くの如き解釋を下した私は、友の死後の今日、友の死に對する悲歎の感情とは又別の心の苦痛に堪へないものがあります。然らばその心の苦痛とは：：：？

先生。友の生靈を目擊したことに依つて、私が友の死を確實に豫知したかどうかは、私自身も明確に意識して居りません。併しながら彼の生靈を目擊した當時、殆ど直感的に不吉の前兆として

驚愕し、絶望と悲痛との感情の爲に數日間人知れず蔭で泣いてゐたと云ふことは、是れ卽ち友の死を豫知したのだと云へば云へぬこともなからうと思はれます。果して然りとすれば、其の事に就いて私は考慮をめぐらすところがあつたかどうかを考へて見るに、甚だ殘念ながら全く不用意だつたのです。常に友の身の上を案じては居りながらも、友の死の豫感に就いては別に何等の方法手段を構じなかつたのです。卽ち友の死の豫知を受けた友としての義務を果たさなかつたのです。然らばその義務とは…？

生靈を目擊したことを友に告げて、友に攝生上の注意を促がすことなのか。否、友は攝生上のことに就いては常に自ら深遠の注意を怠らなかつたのだから、私から殊更に注意を與ふる必要は無かつたやうに思はれる。又假令其必要があるにしても、あの事を告げて、友の神經を過敏ならしめるやうなことがあつてはならぬ。それは眠れる兒を叩き起すやうなものであるから、害にこそなれ、決して賢明なる措置ではない。だから私はその事を友に話しませんでした。（尤も夢の氣がゝりなるが儘に、神戸から手紙でそのことをほのめかしてやつたことはありますが）

次に考へることは、私の可憐の友と離れるのではなかつたと云ふことです。さうだ。私は死期の近づいて居る友——假令病臥してゐないにしても、死の黑き影は七ヶ月以前に於て旣にわが友の身邊を包んでゐたのであります。その可憐の友の側を私は離れてはならなかつたのだ。常に友の健康に深き注意を拂ひ、若し苟にも友の健康に異常を認めたならば、それは友の生命を奪はんとする憎むべき病魔の所爲であると云ふことを看破し、如何なることがあつても友の生命を彼の憎むべき病魔の手に渡してはならぬ。然るに私は此の義務を怠つたのです。智識慾の燃ゆるに任せて、憧れる都會へと志し、死の影に蔽はれてゐる哀しき友を殘して、海山數百里、互に遠く離れてゐたのです。何といふ不信不實の私なのでせう。

會社の用務を帶びて故鄕へ出張した友は、故鄕のお正月を眼前に控へながら（田舍の事とて正月は舊曆を用ひてゐます。）會社の用務終了を告ぐるや、倉皇として任地へ歸つた其翌日から風邪の爲に病臥し、これが腦膜炎に變じ、發病後僅か數日にして、あはれ遂に不歸の客となつたと聞いては、友の死を豫知して居つた筈の私でありながら、前に述べた義務を果さなかつたといふ自責の感に堪へないものがあります。尤も下宿の永田君夫妻の温情と、折りよく杉山君も來合せて居つたさうで、看病に聊かの手拔かりもなかつたらうことは確信してゐますが、併しそれにしても、この俺を嘸見たかつたであらう、物も言ひたかつたに違ひない、他の友達には遠慮氣兼ねをするとしても、おれには病故の駄々をこれるのも氣隨氣儘なのだ、兩親や妻子を離れて、旅の地の、病床に橫たはつて、四十度の熱に苦しみながら、せめて平が居つたならば……と、きつとさう思つたであらう。私としては又、晝も、夜もそれこそ不眠不休で病める友の枕元を寸時も離れないで、看病をしたかつた。とても助からない命ならば仕方はないが、それにしても息を引き取るまで友の手をしつかと握つてゐなかつた。病める友の心臟のはたと止まる一瞬時までも、友の命をやるまいと、憎むべき病魔と戰つてやりたかつた。それにどうだ、末期の水も、死出の裝束も、死骸となつて船に載せて故鄕の地へ送つたその道連れも、みんな人手に任して仕舞つたではないか。此の無

念さを私はいつの日忘れることが出來よう！

無念さは是ればかりではない。診察して貰つた懇意の醫者は、又例の持病だとして、死の數刻前までは重態だとは思つてゐなかつたらしく、漸く意識の明瞭を缺くに及び、三人の醫者が立會で應急の注射を施しても、最早遂に手後れの憾を遺したと聞くに及んでは、一層此の感が——友と離れて居つたことを悔ゆるの感情が、實に取り返しのつかぬ千秋の大恨事として犇々として胸に迫つてくるのです。

私が當時病める友の側に居つたからとて、死にゆく友の命數を繫ぎとめると云ふことの不可能なことはよく知つてゐます。併しながら、現在病める友の枕頭に在つて、彼の生靈のことに想到したならば、其處に或特別の注意を喚起しなかつたであらうか。少くも「手後れ」の憾を遺さずに濟んだのではなかつたでせうか。

おい！先生、何處よりともなく私を叱る聲が聞えます。

「——汝不信不實の者よ、默れ。今更辯解がましく何を言つてるのだ。友の死を歎く汝の涙、それは虛僞の涙なのだ。臨終の友の枕邊に在つて脈搏衰へゆくその手をしつかと握つてゐなかつたことを悔む汝の心、それもまた虛僞の心ではないか。汝は汝の其の涙と、其自責の心との爲に、恐らく汝の一生を苦しみ通さればならぬだらう。而してその堪へ難き苦しみで、是れ云ふまでもなく汝自ら求めた天罰と知れ。——」

先生。私はどうすればよいのでせう。

附　記

友の死の電報に接した當時、神戶の下宿では中野（假名）と云ふ同鄉の友人と一所に居りましたが、數日前から風邪の爲めに服藥してゐた中野君は、私が二日間大阪に泊り、前に述べた惡夢に襲ばれて歸つて見ると、ベツタリと病臥してゐました。皆吉君の死を悲しんだ後、力ない淋しい口調で、

「僕も死期が近づいてゐます。」と心細いことを云ふのです。

「どうしたんだ。」と聞けば、

「この二三日が最も注意を要する大切なる時期だ。咯血さへしなければ大丈夫だが、萬一咯血すると由々しいことになると醫者が云つたが、夕方遂に咯血してしまつたから、もう駄目だ。」と云ひも終らぬに、二回目の咯血は忽ち白のシーツを眞紅に染めてしまひました。一人の友の死に全く失神したやうになつた私は、今又此の肺を犯されてゐる友の看病をしなければなりませんでした。

一ケ月の入院で稍々少康を得たので歸鄉し、故山に病を養つた効あつて、漸次快方に向ひつゝあるとの知らせを受けましたが、同じ年の昨年九月、其の友も遂に不歸の客となつてしまひました。

或る男が人間の血を啜つた惡夢と、この友の咯血と思ひ當る節がありますから書き足したのです。

——（一九二三・一・二六）——

辭つて置きたいのは、私はこの稿の本文に於て、友の生靈という言葉を使ひましたが、あれは友の所謂生きた人の幽靈とでもいふことに改めたいと思ふのです。何故なら辭典には、生靈の意義を生きたる人の魂が崇ることと解釋してありますが、友の生靈が私に崇る譯がなく、又實際に於て崇つてゐるのでもないので、友の生靈といふ言葉はこの場合いさゝか穩當でないと思ふから。（二月四日）

科學を知らざる文壇人

井東憲

一

日本の文學者達が「科學」に無智なる事は、殆どあきれるより外はない。彼らは科學と云ふと、藥物でも分析する「化學」のことだと思つてゐる。少し頭のいゝ方になつて「科學」の意義くらゐ解つてゐる人でも、元來「科學」なぞと云ふものは、自分達の藝術とは全く關係のないもので、藝術家が其麽ものを研究するのは、藝術感の冒瀆であるかのやうに思ひ込んでゐる。まつたく恐ろしいほど齒がゆい事ではないか。

少くとも創作家なぞと云ふ人物は、時代の先驅者でなければならないのだ。しかも時代は、最も高潮した科學の時代である。然るに、其科學の時代に於て、時代の先驅者なる文學者達が、科學の何物であるかも知らないに至つては、恐れ入るの外はない。

例へば「貴下の變態心理は？」と云つて訊いて見るがよい。百人のうち九十八人迄は、自分の心理の異狀さへも氣が附かないのである。況や精神分析なぞに於てをやである。

而して、彼らは科學の無智なる上に立つて、科學を輕視してゐる。藝術の仕事に關與する者にして、科學なぞを研究するのは、邪道の如く思ひ込んでゐる。一體藝術と科學とは、彼らの考へるが

如く、全然かけはなれてゐるものであらうか。

二

彼らの多くの藝術に對する考へ方は、餘りに藝術至上主義的である。人生に於て、藝術は始めにして終りないと考へてゐる。假令言方はどうであつても。そして、その尊貴なる藝術の分野には、如何に重要なる事象と雖も、藝術感に非ざるが故に固く排斥しようとしてゐる。それが若し所謂藝術家の潔癖ならば、僕は彼らの無能なる潔癖を極端に輕蔑する。先づ、考へて見るがよい。藝術は人生の表現なりと云ふ。その人生の成立を。

Kと云ふ作家がある。彼は勿論人間として社會に生活してゐる。彼は豫定的自我と經驗的自我とを以て、自分の「人生」を摑んでゐる。其人生を藝術に創造したものが、彼の創作だ。(本誌二月號『創作の心理』參照。)さうすると、Kの創作の內容なるものは、彼の人生觀でなければならない。

ところで、又一度深く考察して見よう。Kと云ふ一九二三年度の文人の人生觀は、勿論現代の思想的流れの中に立つ「人生觀」でなければならない。で、現代の思潮の特質は曰く過渡期的である。ニヒリスチックである。科學的である。神經的である。Kの藝術が如何に古臭く、クラチシズムかロマンチシズムのものであるとしても、彼は矢張り現代に生きてる人間である。現代の神經を以て、現實の科學の空氣を呼吸してゐるものである。藝術はたとへ幽靈でも、Kは飯を喰つて、着物を着て、機械の御世話になつて生きてゐるのだ。この生活の中にこそ、彼の生きた人生觀があるのだ。然るに彼は、不斷に藝術の夢を見て、現實を無視しようとする。事實存在するものに、殊更に眼をつぶらうとする。

初めKは藝術は人生の表現なりと云つたではないか。然るに、現實に眼をつぶり、生きた人生から韜晦しようとしてゐる彼に、どうして人生の眞實なる表現が出來よう。

もう一歩下つて、Oと云ふ作家の藝術至上主義に就て考へて見てもよい。

Oは藝術家としては、藝術至上主義者だ。が、併し、人間としての彼はやつぱり一個の時代人として生きてゐるのだ。如何に彼の思想が古く、藝術觀が過去のものでも、人間としての彼は、陰に陽に今世紀の恩恵の中に生きてゐるのだ。

Kは無論の事、Oにしたところで、科學の世界から、彼らの自覺してゐると否とに係はらず出端れる事は出來ない。それが事實であるのだから。それが近代人の生活なのだ。此處に於て、藝術と科學との關係に就て考へて見る。

三

藝術は個性の仕事である。個性とはある小我の持つてゐるところの特質の事である。

で、小我とは、大我なる社會の一員たる個人の事である。だから、その個性が、個人の特徵である限り、當然その個人の生活する社會の影響を享けない譯には行かない。寧ろ其影響の中に、個性が發展するのである。其影響には、祖先の遺傳、ミリコー、教育、體驗、時代思潮等がある。

が、最も個性と關係あるものは、彼を包む時代の空氣である。彼の立つてゐる世界の影響である。之に依つて作者の生活は初められ、深化され、發展して行く。その過程は實に科學的である。

斯くの如く、藝術が個性の仕事であるなれば、最もよき藝術家は、最も深刻に自己を知る事が必要だ　自己を知る、それは云ふ可くして、却つて爲し難い仕事である。作家は先づ、自己を分析しなければならない。そして、自己の强味と缺點とを知り、それを抑壓し又は進展させるのだ。其處に立派なる創作の動機がある。

然らば、その自己の成立を分析するには？往時の藝術家達は、ひたすら沈默し默考した。そして、己れを發見した。が、それだけでは不充分である。稍ともすると、獨善の弊に陷り、非科學的、空想

的になつて了ふ。本當に自己を知り、個性を發展させる所以は、自分なる者を客觀的に分析する事である。精神分析をして見るのだ。

客觀は凡て冷酷である。分析は悲慘である。が、公平で深辣だ。だが、このくらゐの分析くらゐで倒れて了ふやうなれば、迚も時代の先驅者なる藝術家には成り得ない。

凡ゆる進歩は批判から出發したのだ。個性の進展は自己の解剖から始まる。藝術は到底個性の仕事である。其個性の仕事が、自己の成立さへも知らないものに、どうしてやり得られよう。自己の破壞と分析とのないところに、自覺した個人はない。勿論、個性など、そんな自己さへも分らない者に、どうして大きなむづかしい創造の仕事が出來よう。完全に自己さへも知らない、科學的世紀に住み乍ら、自己の精神分析さへも分らない者が、一體何を創造しようと云ふのだ。この點、迂闊なる日本の文壇人は嗤はる可きである。

云ふ迄もなく、藝術の創造は科學的發見ではない。が、個性の深化のために、自己を科學的に知る事は、少しも差し支へない。寧ろさうしなければ、本當の自己は分らないのだと云ひたい。僕は固くさう信ずる。今更事々しく云ふまでもなく、藝術と科學とは異るが、新時代の新らしい藝術を創作するためには、科學的分析、思考が最も必要である。かのドイツの表現派の諸作家など、藝術家にして又科學者である。表現派は、深刻鋭敏なる科學的思考の上に建てられた、最新の藝術觀である。(本誌三月號『表現主義と潛在意識』參照。)構想の自由、表現の直截、内容の力強さ、時代的先驅の思想等、科學的分析を經て來た自己の持主にして、よくなし得る創作である。

これらの文學者に比べると、日本の文壇人などは未だ十六七世紀の夢を見てゐる者が多い。それ自ら變態心理だ。僕は切に彼らの自覺を望んで止まない者である。(一九二三、三月)

懸賞應募

綽名のいろく

とんどうサン　本名は○田金○○と云ふ雑貨商で、土地で可なりの勢力家で、そして金持である。區會議員までやつた人で、本名よりもとんどうサンの方が分りがよいくらゐである。

其起りと云ふのは今から三十年頃も前の話、或る渓谷をせき止めて用水を造り、山の中腹にトンネルを掘り、これから稲田に水を導いたものである。其トンネルの工事費が區會に提出された。○田君隧道工事費と記載されてあつたのを、上の隧はトンと讀んだのは好いが、下の道をネルと讀まずに、文字通りドウと讀んでしまつて、此文字の意義が不明であると言つて、盛んに怒號したものだ。

「○田さん、もう一度讀んで見て下さい。落ち付いて見て下さい。さうむづかしくはありません。」と議長さんが幾度も注意しても、

「トンドウ工事費とは何事だ」と怒號した。

滿場爲めに失笑した。

それからは皆隧道（とんどう）さんと呼んで居る。今年取つて六十三歳。

安祿山

京橋　竹林生

安祿山　本名は吉田×と云うて、小學校の先生、教育令施行時代の先生と思ふ。久しく安祿山と呼ばれたものであつた。私はこれを雅號と心得て居つたが、何ぞ知らんこれも立派な綽名の一つであつた。其起りに就いては次のやうな話がある。

或る時、小學教師の受験の爲め出席し、歴史の口頭試問があつた。其時支那歴史で、安祿山とは何との問に、先生はたと困つた。山なる字からの想像かは知られど、支那の山の名だと答へた。然らば、どんな山かと問はれ、先生こゝに益々めんくらつてしまつて、

「日本の富士山よりも少し高うございます。」とやつた。

試験委員曰く、

「君は人間と思つたら山かね。」と。

翌日の新聞で一口話として報導されたが其名の由來。

楠正成（くすのきまさなり）　之も小學校の先生、丁度前者と相前後してのことで、本名は金木×××、矢張り小學校教員の受験の爲め、日本歴史の口頭試問で、楠正成と云ふ文字を指して何かと問はれて、クスノキマサナリと讀んだ。

試験委員曰く、

「マサナリとは何だ。」と。

答へて曰く、

「正成（まさしげ）のおとうさんで、やつぱり忠臣であります。」と。

三光丸

茨城　白鳥五郎

私の田舎に彦四郎といふ農夫があります。年は當年四十三才かと思ひます。一寸丈の高い、肉付の良くない、惡く言へば案山子といふやうな身體恰好であります。其の上に顔などはめつたに剃つたことがないと見えて、何時でも顔中一寸程もある鬚をぼやしてゐます。家は左程にも困窮してゐないのに、何時見てもボロ／＼な着物を着てゐて、見なれて居ればさうも思はないが、知らない者が見たら乞食としか思はないでせう。何でも話に依れば婿に來た者なさうです。おかみさんはかなりの美人であつて、子供も四、五人あります。

人彼を呼んで三光丸といふ。其の理由はかうです。この彦四郎といふ男は一種異つた癖があつて、人と向ひ合つて話してる間もぢつとしては居られない。人の見ない間に、ちよい／＼と自分の耳、鼻、目に代る／＼手を觸れます。そして少しでも耳糞や鼻糞や目糞があれば、それを指先で丸めて口の中に入れます。それがまるで普　人がよく越中富山から來る三光丸とかいふ丸薬を呑むが如くであります。

越中富山の「三光丸」といつても、必ずしも三色の丸薬が入つてゐるから、かゝる名を付けた譯でもなからうが、兎に角彼は、目糞、鼻糞、耳糞の三つを食べるところから、丸薬の名を取つて所謂三光丸といふ綽名が付けられたのださうです。

藥鑵先生

大阪　佐藤秋

私が子供の頃小學校の先生に綽名をつけることが流行つて、先生と云へば殆ど實名で呼ばれぬものゝ様になつて居たことがあつた。藥鑵先生と云へば説明を要せず禿頭の先生で、後には又ランプと改稱された。夕日の影法師と呼ばれた瘦せた丈高いヒョロ／＼した先生があつた。青瓢箪といはれた蒼白な肺病患者のやうな先生もあり、それと反對に豚先生とて肥え太つて強さうなのもあつた。

これ等は普通身體の特徴でつけたのであつたが、又別の意義のもあつた。コップ先生とて名高かつたのは、昔の教科に單語圖とて糸犬猫井豕蜻蛉など庶物の名を書いた掛圖があつて、主に漢字を教へるので、コップを鍾と書いてあつたのを郡内で首位にも居た先生が、聯合試驗場で鍾（つりがね）と誤書して其名を得た。

又或校長でかなり威張つて居た先生に都合先生といふのがあつた。教室で書簡文を教授する時、都合に依り云々の都の字の扁を者とすべきを教の字の扁の如く孝として、右に阝を書いて生徒に筆記までさせて、或生徒から尋ねられてそれでもよいと答へた爲め、都合先生の名は郡内に擴まつた。

江戸先生といふのは東北生れで、井戸を江戸と發音し其區別を知らぬ先生であつた。

又三角先生と綽名された女教師があつた。其容貌如何にも醜な婦人である上に服装も粗末なので、きたない先生といふ意味で、北なければ東南西の三角だともぢつたのであつた。

乞食丑

岡山　酒井信一

本名は丑之助といつて、相當の財產もあ

つて、村會議員をしてゐる。商賣は周旋のやうなことをやつてゐる。歩くのにもいゝ着物など着たことがない。紺色のうすつぱげたのを着て、繩のやうに細くなつた三尺帶を締め、いつも尻はしより。冬などでも餘り色の白い股引見たことない。夏は日に燒けた赤銅色のから脛。

雨降りでも天氣でもお構ひなしに下駄穿き、それも汚ないびつこの下駄ばかり。そして、名前にも似合はず、歩くのが素敵に早い。

どうしてそんなに下駄ばかり穿いてゐるのかと其の理由を問ふと、

『草履は切れてしまへば、後でたてても使はれない。下駄なら、鼻緒取替へればいつまでも穿かれる。』と答へる。

なるほど、草履なら捨てゝ置けば腐るが、下駄はそんなことはない。そこらにあるのを持つて來て、鼻緒をすげるので、いつも揃つたことがない。

『草履などより餘程徳用だ。下駄はいつだつて買つたことない！』と當人は言つてゐる。しかもそれを得意さうにいふのである。それでたいした譯もないが、汚ないなりして歩くので、人呼んで乞食丑々々と言ふ。その癖妾もある。そして妾の所へは毎月相當な仕送りもしてゐるさうだ。

猫

淀橋　玄　作

猫と言ふ綽名は親父がつけたのだ。幸、家庭から外へは餘り洩れずにすんだが、よく兄や姉達がお泣きの自分をいやがらせる時に使はれたもので、今でも兄等が『猫なんて親父が穿つた名をつけたもんだ。』など云ふ。親父は自分の六歳の時死んだ。親父は次の兄にも遲鈍な所があるとて豚と言ふ綽名をつけた。而もその親父にもグリと言ふ綽名があつた。町内の人からグリ留さんと尊稱つきで呼ばれてゐたさうな。何でもグリとは、頑固で一口に言へば氣が少さいと言ふ意味だらうが、確と知らない。

自分の猫と言はれるのは猫かぶりの略らしい。ぼんやりしてゐるから『こいつは馬鹿だな。』さう思つてゐると、突然考へもつかぬやうな利巧さうな事を言ひ出す。鈍で間に合はなくて、馬鹿たげ事をやる。注意しても又繰返す。こいつは駄目だな。』と思てゐると氣の利いた事をやつて人を驚かす。無口で溫順さうでゐて粗暴だ。『全くこいつは猫だよ』と、そんな具合だ。

が、自分は故意に猫をかぶつてゐる譯ではない。空想に許り耽つてゐて、小學校の時掛算が丸つ切り分らないので、教師から怒られた上、落第生の部へやられた。口惜しかつたので家へ歸つて、一心にやつて見るとすぐ分つた。翌日は試驗だつたが、一番早く出來て滿點だつた。こんな事もあつた。

柿のへた

京橋　O　Y　生

柿のへた　土百姓水上太郎〇〇と云ふ人で、或る秋の頃、柿盗人のあるを心配して毎夜のやうに見廻つたものだ。

或る晩のこと、土地の若者三人して柿盗みに出掛け、一人は樹に登り、二人は下で見張りをしつゝあつた。不圖見れば、見廻りの番人が來る樣子。見付けられては是一大事とこそ／＼と逃げ去つてしまつた。樹の上の若者は少しも知らぬ。番人はよき得物

と樹の下にしやがんで居つた。樹上の若者はそれとも知らず、見張の仲間と思ひ、澤山の柿を籠に入れ、よしか受取つて呉れと合圖をすると、番人はよしと合槌を打つ。籠の柿は全部番人に渡し、今度は鉈を落すからよけて呉れと云ふより早く其の番人の頭に落ちた。番人の驚きは一通りではない。頭は二つに割れたものと思つて、先づ顔を撫でて見た。流血淋漓、星あかりによつて見れば確かに血だ。早速に手拭で顔をかたく締め帶で縦横に繃帶し、川の水で顔を洗ひ、一目散に家に歸つて、無言の儘寢床に入つた。

寢られゝばこそ、疼痛甚だしく殆んど輾轉反側し、夜の明くるのを待ちかねて、醫者の診察を乞うた。醫者は徐ろに繃帶を解いた。何の傷もない。頭一面に熟柿はらけ、さうして柿のへたが頭に喰ひ込む程に固くしばられて居つた。之を取り除いだら痛みも立所に去つて何の事もない。鉈と思つたのは、實は熟柿が自然に落ちたのだと云ふ事が分つた。それを誰云ふとなく廣まつた。さうして太郎〇〇の綽名となつたのであるさうな。

岡蒸汽

牛込　ＫＮ生

綽名二三を申し上げます。其一人に岡蒸汽といふのが厶います。この人は仕事をしてゐる間に、一寸困難のことがあると、きつと『ホーガツカネー〳〵』といふのが口ぐせで厶います。岡蒸汽（汽車）には帆がありません。それで人呼んで岡蒸汽といふのださうです。今は故人となりましたが、本名は諏訪傳次郎と申します。

また小山の猿といふのが厶います。この人は他の人と喧嘩するとよく喰ひつくので小山といふ處に住んでをりますので、斯く名づけ、瓦屋が職業ですが、この仲間で「小山の猿」といふ方が通りよく、また知らぬ者は無い位に有名ださうです。

また明烏の金さんといふ綽名の人が厶います。この人は若い頃に女郎を盗みに行つたので、斯く名づけられたさうです。

なほまた私は新潟縣刈羽郡下宿村といふ處に住んだ事がありましたが、この村には大變妙な綽名の家が澤山ありまして、ガタ〳〵、すつぽ、ばな、大將などとて、よつて以て生じた所以は知りませんが、これがその村の通り名になつてをりまして、本名などは村長さんか御本人でも無ければ知らぬ位のものであります。なほヅゴド、チヤチヤなんて意味すらなしてならぬやうなものも厶いまして、東京から行きたての私には隨分と困つた事が厶いました。

次に府下王子町には、停車場前に金玉屋といふ商店がございまして、この町及附近町村までも有名になつてをります。この家の主人が持つてをるのが千金の價ある大きなものなので、斯くの如き綽名があるのださうです。

かちか先生

大阪　佐藤成義

私が北海道天鹽の一小學校に居た頃、隣校の校長寢元某と云ふ先生があつた。其頃四十四五歳でちよつと漢學が出來て詩なども作り、よく歌ひよく飲む方であつた。容貌魁偉で寧ろ怪異の方で、痘痕菊石の上に酒の爲め脂肪過多から來たものか、一種異樣な顔の持主で、どことなく北海道の沿海

に產する鰍に似て居る所があるので、かぢか先生と綽名され、兒童も父兄も蔭でそれを通名の樣にして居たが、流石に校長に向つて斯く呼ぶものはなかつた。しかし時には恐らく先生の耳にも入ることがあつたであらうと思はるゝ程廣く一般に知られて居た。

或時其學校で遠足があつて、校長は部下の男女教員にそれぞれ引率すべき各學年の組を配當して、自らは當年入學せる一年生の可愛い一組を引連れることゝした。該組に殊に可憐な一女生があつた。目もと涼しくパッチリと實に愛らしかつた。校長も其白い顔の頭にかゝる黑髮を撫でんばかりにして居た。其時上級なる彼女の姉が來て、何くれと世話し級に歸らうとした時、彼女は無邪氣にニコニコとして

「姉さんは〇〇先生につくの？私等は鰍先生の組よ。」と云ひ放つて校長の手に縋らんとした。

姉は狼狽彼女を睨めつけたが、彼女には何の意味か分らず、仰いで先生を見て例の愛撫を受くべく期したところ、先生顔色烈火の如く、惡鬼の相貌で睨み居た。蓋し彼女には鰍先生を鰍先生と呼んで甘え慕ひ縋つたのが、何故惡かつたのか了解し得なかつたらしい。

ガマ

北海道　田中畫衣

ガマ　之は僕自身が中學時代に級友の一部から有難く頂戴したものです。何でも二年の時だつたと思ふ。據つて來たる所以は、僕はよく居眠をしたものだが、其居眠振が折から其町の神道祭と云ふ祭禮に來た巡廻動物園に居た、臺灣產と稱するガマ犬の狀に似て居るといふところにあつた。

こいつは全くうまく穿つたものだが、畫家を志望して居た僕が英語の教科書に在つた米國の畫家ベンヂャミン・ウエスト（一八・三八年生）を愛誦し、或時眼を瞑つて、其レシテインショをやつた事から頂戴したベンと云ふ其後の綽名は、僕にとつて寧ろ懷しいものであつた。志した專門の畫家になれないで、碌々たる齒科醫として生活して居る三十三の今日も尙、其頃の愛す可き空想の焦點であつたベン（ベンヂャミンの幼時の習慣的稱呼）なる名前には、捨て難い憧憬の名殘と愛着とを持たれるのである。

さてガマの方は丁度其頃某農大にいつも首席を續けて居た兄の名前の音讀に過ぎないギマなる綽名に近く、更に兄の唇の厚く大きいのに基づいたガマ（蟇口の略）とは、意味こそ異れ偶然にも同音であつたのは一奇である。

弟ガマは幼時には神童と云はれながら、今は前述の狀態に沈湎して居る。兄ガマは次第に眞底の力を錬達して來て、今は農博となり世界屈指の遺傳學者となつて世に時めいて居る。而して此暮にも金壹百圓が、兄ガマから弟ガマへと與へられたのだつた。仲が極く良いのだ。

山櫻　中學時代の數學教師の綽名。出齒が鼻より先きに現れる處から。（花より先きに葉が出る。）

ボンちやん　長女和香枝に僕の與へたもの。女ながら態と坊つちやん〳〵と呼ぶ事を喜んだ僕が、其坊つちやんを更にもじつたのである。最初女だつた我子に對する親の愛情の一面を語るものだ。

クリクリちやん　次女イリスに僕が與へたもの。之は姉と違ひ眼鼻立が大きくて、動作も名づけたが如くにくり〳〵した感じ

を與へるところから。
扨て今度生れた長男槌彦には何もない。いくら考へてもつけるべく適當な綽名が考へられないのである。ガマと云ふ芳ばしからぬ綽名を取つた貧しいおやぢ、何となく嬉しがつて居る。

ポカチユースの岡蒸汽

千葉　山村順吉

名は體を表はすとよく古より傳はつて居るが、全く其の通りだ。殊に綽名程よく其の人の體を表はすものはなからう。もつとも綽名は其の人の癖を取つて名づけるのであるから無理もない。

漁夫で綽名をポカチユースの岡蒸汽と呼ばれた七十前後の老人があつた。二三年前に死んでしまつて、今では取殘されたおばあさんがせつせと働いてゐる。

綽名の起りは斯うだ。彼は年中煙管をくはへて居て放したことは殆どない。無論飯を食ふ時は放すだらうが、道を歩く時は言ふに及ばず、人に話をする時、仕事をする時はおろか、厩へ行つてゐる時でも銜へ煙管でゐるさうだ。其の煙管に煙草がつまつてゐても居なくても、そんなことは一向平氣だ。煙の出ない煙管をくはへて、時々其の吸口をかり／＼と音を立てる。

或る時一人の青年が、彼の家の厩の側を通ると、何だか厩の中からポーポーと煙が立つてゐる。青年は變に思つて節穴よりそつとのぞき込むと、其の中に、例の老人が、銜へ煙管で大便をしてゐたなどといふ話さへもあつた。

彼は腦溢血で水田の中で死んだのであるが、其時でさへも、銜へ煙管でゐたとのことだ。

彼の本名は忠助といつた。それで年中煙管を銜へて、煙草の煙を立てゝゐるところから、其の忠助を訛つてチユースとし、又絶えず煙を出してゐるものは汽船であるが、然るに彼は陸上で煙を立てゝゐるのを取つて岡蒸汽とし、遂に綽名をポカチユースの岡蒸汽と呼ぶやうになつたといふ話だ。

ボロ彦

大久保　澤田龜吉

ボロ彦　田畑数十町歩を有する或る豪農の綽名である。性質頗る吝嗇で、高利貸を業として居る。何處へ行くにも下駄を履いたことがなく、常に足袋跣足で往來してゐる。服裝の如きまるで乞食同様である。債權二重取の嫌疑によつて未決監に收監せられたとき、官給の鼻拭紙を大切に保存し置き、出獄の際自宅へ持ち歸つたといふほどのケチン坊である。

馬さん　町内屈指の資産家である米屋の旦那は、背の高い身體の頑丈な立派な男であるが、その顔が人並はづれて長いので、この綽名をつけられて仕舞つた。さう言はれて見れば、たゞ顔が大きくて長いばかりでなく、身體の恰好もどこか馬に似て、何となく、ぼうつとしてゐるやうに思はるゝのも不思議である。

前ツル先生　私共小供の時分、尋常小學生仲間でつけた先生の綽名である。深い意味はなく頭の前方が禿げてゐるので、無邪氣な幼い小供等が、童話にでも出さうな面白い名を奉つたのであつた。

鼻大公（びだいこう）　某官衙の受付係君は、鼻が圖抜けて大きく天上と睨めつこしてゐるので、同僚から此の綽名をつけられた。

雷

和歌山　宮崎伊佐實

僕が今茲に紹介せんとする綽名は、僕が嘗て軍隊生活をして居た當時、兵卒等が其上級者を呼んだ綽名であるから、從つて其多くは軍隊に因縁のある名であつて、一般社會へは多少通じ難い點があるかも知れないが、中には面白いと思はれるものもあるから左に述べて見よう。

雷　K大尉、體格は小さい方だが、緊つた凜々しい格好で、何時も苦蟲を嚙み潰したやうにむづかしい顔付をした頗る負けん氣の意地の強い人であつた。若しも部下の行爲が多少でも自分の意に滿たぬ所があると、毫も假借するなく忽ち滿面朱を注いで霹靂一聲怒鳴りつくるのである。又自分の言ひ出した事は中々後へは引かぬ。時によると横紙破りの態度に出でゝ、少々の無理でも通して仕舞ふ。

又の名、金州、金州とは至つて馭し難いどうかすると狂奔の癖あるK大尉の乘馬の名であつて、大尉の性癖が其乘馬の癖と相似通つた點があるから、馬名を以て主人公たるK大尉を呼ぶことになつたのである。

達磨はん　S大尉、身體矮少。肥大、圓き赭顔、鬼棕櫚の毛を向ふへ突出して植ゑたやうな髯、其歩行するや一歩一歩體の上部を斜左右前後に動搖する其狀宛然不倒翁の如くである。

ラムネ『Sの達磨は判つてゐる。僕の金州も僕の乘馬の名を採つたのであるから判つてゐる‥‥實は判つて居らない‥‥が、S'のラムネに至つてはどう考へても解し得ない。』とは、將校集會所に於ける機嫌の宜き時のK大尉の述懷であつた。兵卒の説明はかうである。

S'大尉は鳩が豆鐵砲を喰つた時のやうに大きく圓く、而かも驚きの情を表はしたやうな眼を持つて居る。さうして何時も其眼球を頻りに左右に動かすのが此人の癖であつて、それが非常に目立つて見ゆる。

空のラムネ瓶を手に提げて見ると、其口栓たる硝子玉が瓶の中でコロ／＼と左右に運動する。S'大尉の眼球の左右運動が此口栓の運動に似てゐると云ふ所から來たのであつて、これではK大尉の解し得ないのも無理ではない。

其後明治三十七八年戰役當時の事である。僕は充員召集を命ぜられ某隊へ編入せられた。其處には僕等と同じやうに召集を命ぜられた多くの人の中に軍醫も獸醫もあつた。

羅紗刷毛　T軍醫、背丈の高い、頭の大きい人で、頭髮に大分白いのが交つてあつた。それが年齡が若い丈けに餘計に目立つて見えた。羅紗刷毛とは兵卒の携帶せる雜具袋の入組品の一たる刷毛の名稱であつて、白と黑との毛を交へて植ゑ付けた刷毛である。

三角巾　N獸醫、顔面左側の頰に大にして深く凹んだ劍痕あり、從つて其反對側たる右側の頰は特に出つ張つた如く見え、顔面全體の形狀不等邊三角形を成してゐる。三角巾とは戰時出征軍人の携帶せる繃帶包の入組品たる三角形の布片の名稱である。

其後改名の二百十日は稻の結實する時期で早きは穗を出だし晩きは穗未だ出でず、卽ち田面の稻出た穗（頰）に出ぬ（穗）頰と云ふ事である。

其他M大尉は其顱と額卽ち顔面の上下兩部が突出して中央部が凹んでゐると云ふので花王石鹸又の名圓匙（土工器具の名稱スコップ）

S軍醫は兵卒が少しの外傷を口實に練兵休を得ようと思つて診斷を受くると、どんな傷でも大概のものは屹度絆創膏を貼り付けて就業さすので絆創膏。

T軍曹は其號令の聲が蛙鳴に似てゐると云ふので雨蛙。

H軍曹は島根縣の出身で、其お國訛りの言葉が通じ難いと云ふので英語。

選を終へて

孰れもとりどくに面白かつた。殊更な選評は抜きにして、感じたことの二三を述べて見よう。

安祿山、楠正成、とんどうサン、コップ先生、都合先生、孰れも自己の無識から招いて結構な綽名を頂戴した。

容貌や身體の恰好から來たものがやはり多かつた。山櫻、二百十日はしやれをれらつてゐる。言葉の癖や發音には、雨蛙、英語、江戸先生、ベンがあつた。「ホーガッカネー」の岡蒸汽もしやれをれらつた。岡蒸汽と云へば、ポカチュースの岡蒸汽、絆創膏、ポロ彦、乞食丑、三光丸は、いつも繰り返す動作から得た綽名であるが、そこへ行くと、たつた一度の行爲で附けられた安祿山以下の例、明烏の金さん、柿のへたに至つてはよくく拍子が惡いといはうか。煙草の煙から岡蒸汽の聯想も面白い。

性質から來た綽名には、大方有り觸れたものが多かつた。性質から見た猫だの豚だのと綽名をつけることは、それが暗示と成る恐れがあるから、兒童を愛する人のなすべきではない。暗示の心理を知つてか知らずか、弱い子を「虎」と呼び附けるやうな親なら頼母しい。(尤も虎から強いといふ觀念を起せるのであつて、間違つて動物といふやうな觀念を起させては何もならないが……ポンちやん、クリくちやんならまだ無邪氣でいゝが、それでもポンちやんと呼び慣れてお轉婆にしないやうに、そしてクリくちやんはその名の如く益々クリクリと可愛からんことを望みます。

綽名の見付けどことしては、三光丸が最も奇抜であらう。あまり上品ではないが。それから、ポロ彦、乞食丑は期せずして似たやうな人物が現れた。田舍にはよく見られさうな圖である。

柿のへたに至つては、臆病な粗忽者の動作がいかにも活躍してゐる。へたを見てさへまだ銑と言ひさうな男である。滑稽味も多分に含まれてゐて、このまゝ落語になりさうで、どれよりも面白かつた。

頁の都合で割愛したのがかなりあつた。

淀橋玄作氏、至急御住所御姓名御知らせ下さい。(記者)

懸賞募集

嘘の實例

罪のない嘘、罪の深い嘘、自分がいかにも巧みについた嘘、また他人からあべこべにつかれた嘘、そこには悲劇もあれば喜劇もありませう。法螺吹き、虚言症、詐欺、かやうな實例から彼等の心理も覗かれようと存じます。また、それらの嘘の構成に對する精神分析も面白からうと存じます。

□紙數は四百字詰原稿用紙二枚内外。
□締切は五月十日。
□當選文は七月號誌上で發表し當選者には薄謝を呈します。

疾病恐怖の一例
——附感動療法——

京橋　山野井織治

患者は六十二歳の男子、山路銀一郎（假名）と云ふ。生來神經質である。彼は盛岡の產、幼時漢學を專攻し、道義の念に固められた多血質の人で、二十幾歲かに飄然鄉里を辭し、單身橫濱で回漕店を營んだが、政治に非常な趣味を持ち、殆んど熱狂的であつた。島田三郎氏の子分として斯界に活躍し、今も自分の肖像の裏に島田氏の贊辭の記されたものを所持し、憂國の志士熱血男子山路君の文字を示して、其當時の有樣を物語るが常である。殊に國會開設せられて以來幾年間と云ふもの、京濱間の汽車中、彼が政談演說を聞かぬことはなかつたと云ふのを聞いても、如何に熱心であつたか知ることが出來る。汽車では幾分過激の言葉を用ゐ、時事を痛罵しても、官憲の迫る者がない代り、隨分壯士の爲め白刄を浴びせかけられたこともあり、又ピストルを以て脅迫されたこともあつたが、自ら淸貧に甘んじ、他人の迫害は勿論覺悟の事とて少しも恐れなかつた。主義主張の前には却つて身命を賭する覺悟であつたと云ふ。

爾來茲に幾春秋、年も老い、氣も衰へ、世も變遷し、仕事は志と違ひ、妻帶擧子四人、幾分生計の爲めにも心を勞しなければならなくなつて、志を政治に絕ち、遂に流れて東京日本橋に來たのは丁度四十五六歳の頃であつた。大飲酒家で、一日

一升五合位を傾けた。醉へば必ず議論を吹きかけ、家人を煙に卷くを快として居つた。いつも主義主張の前には利害の打算は全然なかつた。即ちこれが營業の振はない原因であることに氣が付いてからは、飜然前非を悔悟し、商人的の氣風に改め、一意專心業務の再興に心を注いだ甲斐あつて、歐洲戰爭の爲めに、非常な利益を得て、一躍富者の列に入つた。かうなつてはお得意樣に對しては只御機嫌を損じないやうに勉めつゝある。これが其經歷の一斑である。

　患者は昨年正月初旬、流行性寒冒に罹つて、二週間臥床した。其時以來禁酒すべきことを僕に誓つたが、根が酒好きの爲めに之を禁ずることが出來ない。或る夜二合程飮むと急に胃の痙攣を起した。モヒの注射で之を緩解せしめたが、以後は晩酌毎に必ず胃痛を覺えた。爲めに患者は非常に神經過敏となつた。或晩二時頃非常に痛むので往診を求めたが、餘り度々なので斷つた。其後二週間は全く容體も不明であつたが、或日の夕方又々往診を求めた。左程の痛みもなく、之と認むべき他覺的症狀もない。何で呼びに來たと問へば、夜中痛みを覺えても來診が願はれないからと云つた。そんな取越苦勞は無駄だと說明したが、今度は注射して吳れと賴むので、その必要がないと應じなかつた。患者は泣き出した。そして次のやうに語り出した。

『家人は私の病氣を非常に心配して居ます。全く酒の惡いのは分つて居ますが止められません。どうも胃癌でないでしようか。胃癌なら到底助かる見込はありません。若し胃癌とすれば、私は決心します。どうか專門の醫者に見せて確診を與へて下さいませんか。』

『胃癌だとは誰が云ふのですか。』

『家人が皆さう云つて居ります。』

『お宅の人は醫者ぢやないから分らう筈がない。』

『勿論さうですから、先生にお願ひして專門の醫

者に見て貰ひたいと云ふのではありませんか。』

僕は精神分析を試みる必要があると思つて、分析を始めた。そして次のやうなものを得た。

家人が胃癌らしいと云ふのは、患者をして酒を飲ませぬやうにと云ふ一種の禁酒宣傳で、それが病氣恐怖を起さしめた理由である。近頃顔色が惡い、瘠せたやうだ、胃の痛むのは酒の爲めだ、酒飲に胃癌が多い、先生が禁酒せよと云ふのは恐らく之を諷示したのだ、酒は止めなさいと日夜繰返されたもので、この爲めに患者は一種のヒポコンデリーになつた。其ヒポコンデリーを起すに就いても之を助けるものがある。患者の前身は非常に貧苦であつたが、昨今非常に蓄財を得たので、それに執着するやうになつて、日頃患者は漸く是丈の資産を得たが、之を失ふに忍びない。又之を如何に處理すべきか。今死ぬのは情ない。もつたいない。此心が煩悶卽ち心中の爭鬪であつた。その爲めこれ迄の仁侠の精神は全く姿を沒した。云はゞ患者は誤解の中にさまようて潛意識は全く顯意識の爲めに征服されつゝある狀態であることが明白となつた。此誤解を正し、潛在意識を活動せしめるが、其治療の方針でなければならぬ。彼の頭腦に爆裂彈を打ちつけて之を破壞した後で、方向の轉換を圖らなければならぬと考へた。これには說得療法より感動療法が有利であらうと、之を試みることにした。第一に患者の氣を挫く必要から僕はかう云つた。

『專門醫の診察と仰せられるが、專門醫とは何を云ふのですか。僕は胃腸病に就いて多年の經驗を有する專門醫であります。僕に向つて他の專門醫とは不都合です。加之胃癌を胃癌と診斷して、其死期を定めたとて何の利益がありますか。人は其死期を知らぬ處に生活の妙味があります。死期を知つたら、世の中に誰一人働く者はない。昔から云ふ通り、人は一寸先は闇だといふのは眞理です。又これあるが爲め毎日活動するのです。君にも似

合はぬ事をいふもの哉。更に一言附け加へたいのは、此資産に執着して死ぬにも死ねぬと云ふなら、胃癌ならずとも一寸先は暗の世の中。今日中に財産を處分なさい。僕は胃癌と云ふ診斷ではない。君の心が近來墮落したから、それに乘じて心に入り込んだ魔物です。物質主義の祟りであります。僕は今日迄山路さんなる人を買ひ被つたことを懺悔します。山路さんなる人は精神主義の人と考へて居りました。そして愛國の志士、熱血男子と思うて居りました。肉體は死んでも主義に生きる底の人としか思はなかつた。今日六十幾歳、片足棺桶につき込みながら、命が惜しいとは情ない男ではありませんか。山路さんの價値は肉體の生存にあるのでせうか。それ程命が惜しければ、汽車中の諤々の說は何の爲めです。少しは當時の山路さんの面目もありさうなもの。』と、殆んど一氣呵成的にやつてのけた。

患者は顏色土の如く又朱の如く、怒髮冠を衝いたが、暫くして冷靜に返つて、

『私も男です。よく分りました。今日迄の考は全く間違つて居りました。物質主義は捨てます。昔の人間に復活します。』と席を蹴つて起つた。

『それさへ分れば服藥の必要はない。今晩から安眠が出來ます。』と僕は慰めて歸つた。正に一年に垂んとする今日迄一度も胃痛に苦しんだことがない。又至極壯健で、全く壯者を凌ぐ程に矍鑠として、今も横濱へ毎日通勤して居る。時々思ひ出したやうに僕の宅を訪れては、

『先生が僕は天下の名醫と喝破された其御自信の力で、實際私は助かりました。其時の御言葉が未だ耳許に殘つて居ります。』と語つて居る。酒は相變らず晩酌壹合宛は許してある。家人にも徒らに不法な禁酒宣傳はせぬやう固く警めてある。

（大正一二、三、一一）

私の變態心理

某女學校生徒

□

私の心理狀態が變態であつたこと、卽ち常に或る事柄に就いて習慣的に、錯覺とか幻覺とか感じた事は、今までの經驗では思ひ出せません。然し一時的の錯覺、一時的の知覺の變態に就いては度々經驗があります。其の例はと申しますと、夜自分の影が人に見えたり、アサリ屋の賣聲が豆腐屋の賣聲に聞えたり、草原の中の繩が蛇に見えてびつくりした事は度々あります。

□

いつか叔父樣が御病氣の時、氷をかく錐がほつぽらかしてあつたので、それをいつもの所にしまはうと思つて立ち上つたまでは知つてをりますが、御座敷をどう歩いてその場所に行つて入れておいたか入れておかないか、すつかり夢中でしてをりましてそれなりどうしたか忘れてゐました。夕方御風呂に入つてゐると、小僧がその錐を私に尋ねました。私はハッとしましたが、それもそのはず、どこにしまつておいたか覺えがありませんから。それでも負けず嫌ひな私は、いつも入れてある所に入れたわよと、知りもしない事を言ひました。すると小僧は探して「ありました。」と云つたのでほつと安心いたしましたが、隨分不思議です。いつ持つて行つて入れたか知らないのに。

□

皆さんが夢を見て居る時には夢中ですけれども、後で氣が附きますと夢だとわかります。あるおそろしい物が追ひかけて私が逃げます。その時自分はいつでも夢を見て居るから安心とちやんと承知して逃げます。目がさめてからやつぱり夢だつたと思ふ事が度々あります。

□

昨年の夏でした。人と話をして居て一生懸命におぼえようと聞いて居たつもりだつたが、もう後になつて考へて見たがもうその事をすつかり忘れた事が一度あつた。(今考へればその事をよくおぼえて居る。)

□

この夏休み中の出來事です。じつとして居てもたへがたいやうな酷暑の日、少しのひまなく終日ノートの整理をした爲か大變頭がつかれたやうに感じて、何時もより早く寢に就きました。夏の事故障子は皆取り拂つてありましたが、雨戸は注意して、しめて休みましたのに、しばらくうと〳〵したと思ふ頃、

「うなされて居る」と、隣室から聲をかけられ、驚いて目を覺しますと、どうしたのでせう。枕元の雨戸があけ放されて、薄暗い中に井戸のあたりから、朝顏の垣根、物干竿まで見通しに見えます。ハッと思つて手さぐり、蚊帳を出て見ますと、ちやんと雨戸はしまつて居ります。朝顏も井戸も、見えないのみか今まで薄明るいと思つた、目の前は眞暗なのです。ドキ〳〵する胸を靜めて考へました。不思議なのはうなされたと云ふ事です。どう考へても、そんな原因はありませんし、其の夜は何の夢も見ない

で、いつもより安らかに眠りましたのに。

雨戸が明け放しに見えましたのは、一度盗賊が入り掛けたのを、夜中に目を覺した私が見附けてから、戸ぢまりが氣に成つてばかり居た爲でせう。

□

これは先生の錯覺の御話を伺つてからのちのことであつたと思ひます……

夕刻食事の用意の時でした。この仕事には庖丁が入用であると思つて、其の置場所を見た時は、丁度他で使用してをる爲め、其處にはなかつたのでした。そして庖丁の入用の時になつて、無いと知りながらも常の習慣から前の所を見ますと、確かに其處にあるので、おやと思つて見直した時にはやはりなかつたのでした。これが錯視であらうと始めて知ることが出來ました。

これはずつと以前のことでした。亡き叔父が枕元に來たと思つたことでした。私は生れてあれほど氣味の悪い思をしたことははじめてゝした。月日はよく心得てをりませんが、私が眞夜中にふと目をさましました。電燈も消えて眞暗で、電車の音もきこえない中で目をあいて居ると、いつも叔父の住まつてゐた部屋の方にあたつて、人のはつてあるく樣な音がきこえるのです。(叔父は足が悪くはつて歩いたからです。)其時は何かのまちがひだと思ひましたけれども、やはり心配なので氣をつけて音をきかうとしましたが、其時は何も音がしなかつたのです。すると急に前の障子が靜かに開いて、人のにじり入つた音がしたのです。其の時の心持が、よく云ふ水をあびせられたといふ心持ではないかしらと、今思出ひしても氣味が悪いやうです。其時私は父母を呼ばうとしましたが、少しも聲がたゝなかつたのです。それで布團をかぶつてしばらくたつてから、隣の父に燈をつけてもらつたのです。これはほんの少しの時間であつたと思ひます。しかしこれはたしかに私には判斷出來ませんが、やはり私の心の變態からなつたやうに思はれます。私の自分で氣のついたことはこれくらゐです。

□

或日出先より戻つて來て玄關へ入ると、何だか人が死んだやうな氣がして變だなあと思つて、母等の居る部屋へ參りますと、いとこの房子姉さんが今なくなつたと電話がかゝつて來たといふ話に大變驚いて、これ／＼だと申しますと、皆樣も大層おどろいて蟲が知らせるのかしら等と申して居りました。

これはいとこの小供の話で御座いますが、房子姉さんが亡くなつた時には、髪の毛を切つて白粉をつけてやりましたところが、小供には其の姿を見せもしないのに、或夜、

「父ちやん／＼」と呼び起しまして、「今お母ちやんが向ふの窓から入つて來て白粉を眞白につけ、髪をぼうやのやうに切つて、いらつしやい／＼をしたから厭だといふと、母ちやんが怒つて歸つてしまつた。」と申しました。あまり意外なので皆驚いてしまひました。あまり不思議で御座いますから一寸記しました。

□

私は或時それは大變に心持ちの好い日、代々木の原へ姉樣や姉樣のお友達と遊びに行きました。そして遊びつかれた私は、草のやはらかな上に腰を下しました。一人で下を向きながら、色々の事を考へて居りますと、何となく心持ちが好くなつて來て、自分の體に羽根でも生えて飛び立つやうな感じがしました。その心地はまるで夢見る國に遊んだやうな、何物をも忘れて！その

話をお隣りに居た姉樣のお友達にお話しすると、お友達が、
「それは不思議ね、どうしたのでせう。」と云はれました。

□

私は時々何物にかに頭をおしつけられたやうに重くなつてきて、何もわからなくなる事が度々ある。

□

時々頭が痛くなり、頭の上から何かでおさへられてゐるやうな氣持の時があります。又、寢てゐて急に起き上つた時に目がまわり歩く事の出來ない時があり、又其の時に疊をすつて歩く時サア〳〵と云ひます。其のサア〳〵する音の樣に耳の所で致します。又時々目の前にちら〳〵した物が見えてうつとうしい時があります。私は一體頭が惡い疾なので御座います。

□

私は何か仕事をして居て他の事を靜かな所で考へたりすると、氣がぼうつとして自分がして居る事がさつぱりわからず、まるで天にでも昇つて行く樣な氣がして、しばらくの間は何もわからない。

□

私はかつて生れ立ちより人樣よりも割合に身體が弱く、時々かんしやくを起して、家の者を困らせて居りました。今は少し丈夫になり、かんしやくも起さないやうになりました。大正八年の春一寸した事で、何か一人ぶつ〳〵すれて居りましたところ、姉の赤ん坊が、ふいにギヤ〳〵と泣き出しました。其の時私は何と思つたのか、大きな聲で赤ん坊の泣きまねをしました。（私は五、六年前より一寸咽喉が惡く、あまり大きな聲を出す事を、醫師から固くことわられて居りました。）そして母や姉が心配して止めるのもきかずに、一人外へ出て泣いたり笑つたりして居ました。もう其の時は大分身體に異常がありました。（後になつて醫師に云はれて分りましたが、私は本當に夢のやうで御座いました。）私は近所の溝の中へ足をつつこんだりして、未だ泣いて居りましたが、少したつと自分ながら氣が遠くなつて泣きまねして居る聲も、だんだん分らなくなつて、そしてバタリと倒れてしまひました。

世に生きず

大和　岸　ちか子

○
悲しみを祕むるに馴れし心かな
淋しき時は出でゝ山見る

○
思ひあまり夕暮の背戸をさまよへば
またも今年の椿咲きけり

○
世に生きず人にも生きず我れに生きず
只君の靈に生きむとぞ思ふ

○
生命あり大天地の片隅に
何待つらむや我れ生きてあり

○
つく〴〵と思へばものゝ寂しけれ
戯れて過ぐべき世となさずわれ

○
何事もわが運命ぞと諦めの
心に夕べひとり禱るも

○
呼吸絶ゆるその刹那をば樂しみに
今日もわびしく過しけるかな

プロバビリテーの話（承前）

本誌記者　川崎　清

私は第一項に於て、プロバビリテーの說明と併せて最も簡單な現象發生のプロバビリテーを求め、第二項に於て、二つ或は二つ以上の互ひに獨立してゐる事件が同樣に發生するプロバビリテーを求めました。

第三項に於て求めようと致しますのは互ひに相容れない事件の孰れかゞ發生するプロバビリテーであります。

第三項

〔1〕骰子の問題（その一）

今二つの骰子を唯一回だけ投げて、兩者の目合せて八を得るプロバビリテーを求めます。そして、この問題に依つて用語の說明を兼ねようと思ひます。

二つの骰子は孰れも六面を有し、合せて目の數八を得る場合は次の五通りであります。

	甲の骰子の目	乙の骰子の目
（第一通り）	2	6
（第二通り）	3	5
（第三通り）	4	4
（第四通り）	5	3
（第五通り）	6	2

この中どれかが發生してもよいけれど、同時には一方が發生すれば他方は發生致しません。何となれば、唯一回しか二つの骰子を投げることが出來ないから。

卽ち、かやうな意味に於て、この事件は互ひに相容れない性質の五通りのものから成り立つて居ります。そして、この**互ひに相容れない**といふ點が第二項に述べたところといさゝか異なる所以であります。

今、甲の骰子が二を出し、乙の骰子が六を出した場合、この兩者の間には、何の關係もありません。故に第一通りは二つの互ひに獨立してゐる事件から成り立つてゐます。甲の骰子が二を出し、乙の骰子が六を出すchanceはそれぞれ$\frac{1}{6}$であり、從

つて第一通りの事件の發生する chance は、

$$p=\frac{1}{6}\times\frac{1}{6}=\frac{1}{36}$$

であります。（第二項參照）

同樣に、第二、三、四、五通りの事件の發生する chance p_2, p_3, p_4, p_5 は孰れもそれぞれ $\frac{1}{36}$ であります。

しかし、この五通り凡てを殘らず一度に發生せしめるなどいふことは不可能であります。發生し得る場合は五通りありながら、しかも骰子は唯一回しか投げることを許されません。ここに於てか、この事件は互ひに相容れない五通りのものから成り立つて居ります。從つて、その孰れかは發生してよいけれど凡てが發生するといふわけには參りません。

故に、この問題に於て、求めるプロバビリテーは次の如くであります。

$$p=p_1+p_2+p_3+p_4+p_5=\frac{1}{36}\times5=\frac{5}{36}$$

なほ、引續いて次の抽象的な計算法をごらんなさい。

〔2〕計　算　法

二つ或は二つ以上の互に相容れない事件（Mutually exclusive events）の孰れかゞ發生する（Cœxistence）プロバビリテーを求める計算法。

今二つの事件の場合を考へ、假に第一の事件、第二の事件と名づけませう。もしも p_1, p_2 がそれぞれ兩事件發生のプロバビリテーであるとすれば、兩事件の發生の凡ての場合の數は $p_1N+p_2N=(p_1+p_2)N$ でありませう。何となれば p_1N, p_2N は互ひに相容れない性質のものでありますから。

かやうにして二つの互ひに相容れない事件の孰れかゞ發生するプロバビリテーは p_1+p_2 であります。

同樣に、二つ以上の互ひに相容れない事件の孰れかゞ發生するプロバビリテーは、それぞれの事件のプロバビリテーの和に等しいのであります。

ここにCœxistenceを孰れかゞ發生するといつたのは意味の上から解したのです。數學書には何と譯されてあるか調べる機會がありません。本來ならば共存とか同

在といふのでせう。從つて孰れもが發生するといふ意味でせうが、しかし、これはものの表裏二面であつて、言ひ方を變へただけです。といふのは、例へば上述の問題に於て之をまわりくどく說明して見れば、二つの骰子を唯一回投げて目の數合せて八を得る場合が五通りはあつてその孰れもが發生する同じ權利を持ちながら、しかもその中の一つ孰れかが發生するに過ぎないといつたやうなわけなんです。

なほ以下の問題を參照して下さらばお分りのことゝ思ひます。

〔3〕貨幣の問題(その一)

こゝに三つの財布があります第一の財布には一つの金貨、三つの銀貨、第二の財布には二つの金貨、四つの銀貨、第三の財布には三つの金貨、一つの銀貨が、それぞれ入つてゐます。今手當り次第に撰んだ財布の一つから一つ引き出された貨幣が金貨であるといふ chance は如何。

金貨が第一の財布から出るかも知れない。また第二のものか第三のものから出るかも知れない。卽ちこの問題は三つの事件から成り立つてゐます。

しかるに、第一の財布から金貨が出てしまへば、その他の財布から出やうがない。同樣に、第二、または第三のものから金貨が出ればそれぞれその他のものから出やうがない。卽ちこの三つの事件は互ひに相容れない性質のものであります。一方が發生すれば他方が發生しようにも出來ないものなのです。

次に、第一の財布から金貨が出る chance は、先づその財布に手が觸れなければならない。しかもそれとその上金貨が出ることとは互ひに何等の關係もなく獨立してゐます。

第一の財布から金貨が出る場合に、先づ第一の財布に手が觸れる chance は $\frac{1}{3}$ であり、(財布が三つなる故) その財布に於て金貨が出る chance は $\frac{1}{4}$ であります。從つて兎も角も金貨が第一の財布から出る chance は、

$$p_1=\frac{1}{3}\times\frac{1}{4}=\frac{1}{12}$$

同樣に、第二の財布から金貨が出る chance は、

$$p_2=\frac{1}{3}\times\frac{2}{6}=\frac{1}{9}$$

第三の財布から金貨が出る chance は、

$p_3=\frac{1}{3}\times\frac{3}{4}=\frac{1}{4}$

そして、前述したやうに、この三つの事件は互ひに相容れないものであります。故に求めるプロバビリテーは、

$$p=p_1+p_2+p_3$$
$$=\frac{1}{12}+\frac{1}{9}+\frac{1}{4}$$
$$=\frac{16}{36}$$
$$=\frac{4}{9}$$

〔4〕骰子の問題(その二)

今二つの骰子を三度投げて、少なくとも一度は同じ目の出るプロバビリテーを求めたいのであります。

	（第一回）	（第二回）	（第三回）
(I)	○	×	×
(II)	×	○	×
(III)	×	×	○
(IIII)	○	○	×
(V)	○	×	○
(VI)	×	○	○
(VII)	○	○	○

こゝで○印は同じ目の出る場合を示し、×印は然らざる場合を示すのです。兎も角都合七通りあります。そして、これが今求めようとするプロバビリテーの對象となるのです。この中どの事件が發生しても、少なくとも三度中一度は同じ目が出るのであります。卽ち、それが求める事件であります。

扨て、骰子は三度より投げることを許されません。(嚴密に云へば、三度を一くぎりとして何回でも大數に於て試みることはプロバビリテーの本質上當然でありますが、三度を四度とか五度といふ風にしてはいけないのです。)

兎も角、この七通りの事件の孰れかが發生すれば、その他の事件の發生しようがありません從つて、この七通りは互ひに相容れない事件から成り立つてゐます。

ところで、I の事件の發生する chance は如何といふに、先づそれがいかなる事件から成つてゐるかを見なければなりません。卽ち、第一回に於て、同じ目が出て、第二回、第三回に於ては、相異なる目が出なければなりません。そこで、第一回に同じ目が出ることと、第二回

第三回に同じ目が出ないこととは、そこに何らの關係もなく、全く獨立してゐます。

第一回に於て、同じ目が出るchanceは次の如く六通りあります。

甲の骰子の目	乙の骰子の目
1	1
2	2
3	3
4	4
5	5
6	6

即ち、第一回に於て、同じ目が出るchanceは$\frac{6}{36}$であります（骰子の問題(その一)の第二十八行目以下參照）

同樣に、第二回、第三回に於て、同じ目が出ないところのchanceはそれぞれ、

$$1-\frac{6}{36}=\frac{30}{36}$$

であります。(第一項〔4〕の3及び〔5〕參照)

そしてこの三回の間には、何の關係もありません。

故に、Iの事件は、

$$p_1=\frac{6}{36}\times\frac{30}{36}\times\frac{30}{36}$$

同樣に、IIの事件は、

$$p_2=\frac{30}{36}\times\frac{6}{36}\times\frac{30}{36}$$

IIIの事件は、

$$p_3=\frac{30}{36}\times\frac{30}{36}\times\frac{6}{36}$$

即ち、$p_1=p_2=p_3=\frac{6}{36}\left(\frac{30}{36}\right)^2=\frac{25}{216}$

更に同樣に、IIII, V, VIの事件は孰れもそのプロバビリテーが等しく、

$$p_4=p_5=p_6=\frac{6}{36}\times\frac{6}{36}\times\frac{30}{36}$$

$$=\left(\frac{6}{36}\right)^2\cdot\frac{30}{36}$$

$$=\frac{5}{216}$$

但し、積を構成する各因子の順序がそれぞれ違ふのは上の場合の如くであります。

最後に、三度共引續いて同じ目が出るVIIの事件は、

$$p_7=\frac{6}{36}\times\frac{6}{36}\times\frac{6}{36}$$

$$=\left(\frac{6}{36}\right)^3$$

$$=\frac{1}{216}$$

それ故、この七通りの事件の孰れかゞ發生すればよいわけであります。

即ち、$p=p_1+p_2+p_3+p_4+p_5+p_6+p_7$

$$=3\cdot\frac{6}{36}\left(\frac{30}{36}\right)^2+3\cdot\left(\frac{6}{36}\right)^2\cdot\frac{30}{36}+\left(\frac{6}{36}\right)^3$$

$$=3\cdot\frac{25}{216}+3\cdot\frac{5}{216}+\frac{1}{216}$$

$$=\frac{91}{216}$$ （後段別法參照）

或は之を次のやうな考へ方でやつても宜しい。

少なくとも一度同じ目が出るといふことの裏を考へて見れば三度引續いて同じ目が出ないといふことが發生しないわけであります。そして、かやうな事件のプロバビリテーを求めるといふことになります。

今三度共同じ目が出ないといふことが發生する chance を求めますのに、第一回に同じ目が出なくても、第二回、第三回に同じ目が出るとも出ないとも限らない。故に、この三回の間には互ひに何らの關係もありません。

ところで、第一回に於て、同じ目が出ない chance は

$$p_1=1-\frac{6}{36}=\frac{30}{36}$$

であります。

故に、三度共引續いて同じ目が出ない chance は

$$p'_1=\frac{30}{36}\times\frac{30}{36}\times\frac{30}{36}$$

$$=\left(\frac{30}{36}\right)^3$$

であります。

ところで、そのまた同じ目が出ないといふことが發生しない chance こそ、とりもなほさず今求めてゐるものです。

即ち、$p=1-\left(\frac{30}{36}\right)^3$

之を今の問題と對照するため少しく書き換へて見れば、

$$p=\left(\frac{6}{36}+\frac{30}{36}\right)^3-\left(\frac{30}{36}\right)^3$$

$$=\left(\frac{6}{36}\right)^3+3\left(\frac{6}{36}\right)^2\cdot\frac{30}{36}+3\cdot\frac{6}{36}\cdot\left(\frac{30}{36}\right)^2+\left(\frac{30}{36}\right)^3-\left(\frac{30}{36}\right)^3$$

$$=\frac{91}{216}$$ （前段參照）

〔5〕 貨幣の問題（その二）

三人の人が引續いて代る代る一つの貨幣を投げます。そして最初にその表を出した者に褒美が行きます。褒美を手に入れる三人それぞれの chance は？

甲、乙、丙三人ゐます。貨幣は一つあります。甲がそれを投げて表を出し得れば、褒美は甲

へ行きます。ところが、甲が失敗すれば、褒美は乙へ廻ります。乙も駄目であれば、丙が褒美を取るかも知れません。丙も失敗すれば、再び甲が試みます。かやうにして、兎も角表の出るまでは引續いてやるのです。

先づ、三人中、甲が褒美を得る chance を求めます。

ところで、甲は第一回で褒美を得るか、第四回（乙が第二回丙が第三回）か又は第七回（乙が第五回、丙が第六回）か以下かやうに續いて參ります。そして、第一回に甲が褒美を得れば、勝負はそれで終つて第四回まで行きません。同様に、甲が第一回又は第四回で褒美を得れば、第七回は發生しません。從つてこれらの事件は互ひに相容れないものであります。

そこで、甲が第一回に褒美を得る chance は甲が最初に試みるのですから、表さへ出れば褒美が得られます。

故に、貨幣の表の出る chance は$\frac{1}{2}$で、これとりもなほさず甲が第一回に褒美を得る chance であります。

しかるに、甲が第四回に褒美を得る chance は如何といふに、先づ甲が第四回に褒美を得るためには、第一回に甲自らしくじらなければならない。同様に、乙、丙がそれぞれ第二回、第三回にしくじらなければならない。そして、第四回に甲自ら成功しなければならない。この四つの事件が同様に發生しなければ、第四回に甲が褒美を得ることが出來ません。

ところが、第一回に甲がしくじる chance は

$$p_1=1-\frac{1}{2}=\frac{1}{2}$$

であります。同様に、乙、丙が第二回、第三回にそれぞれしくじる chance 亦$\frac{1}{2}$であります。それから、第四回に甲が成功する chance は$\frac{1}{2}$であります。そしてこの四つの事件は、その間に何らの關係もない。何となれば、第一回に甲が成功するともしないとも、そんなこと言はれず、乙、丙の場合亦同様です。

扨て、甲が第一回に成功する chance は、

$$p_1=\frac{1}{2}$$

第四回に成功する chance は、

$$p_4=\left(1-\frac{1}{2}\right)^3\cdot\frac{1}{2}$$

第七回に成功する chanceは、

$$p_7=\left(1-\frac{1}{2}\right)^6\cdot\frac{1}{2}$$

こんなことがずつと續いて行くわけです。故に、甲が褒美を得る chance は、

$$p_A=p_1+p_4+p_7+\cdots\cdots$$

$$=\frac{1}{2}+\left(1-\frac{1}{2}\right)^3\cdot\frac{1}{2}+\left(1-\frac{1}{2}\right)^6\frac{1}{2}\cdot+\cdots\cdot$$

$$=\frac{\frac{1}{2}}{1-\frac{1}{8}}=\frac{4}{7}$$

（上式は無限等比級數であります。從つてその答を無限等比級數の總和の公式 $\frac{a}{1-r}$ に依つて求めました。卽ち、初項 a は $\frac{1}{2}$，公比 r は $\left(1-\frac{1}{2}\right)^3=\frac{1}{8}$）

次に、乙が褒美を得る chance は如何といふに、第二回では、

$$p_2=\left(1-\frac{1}{2}\right)\cdot\frac{1}{2}$$

第五回では、

$$p_5=\left(1-\frac{1}{2}\right)^4\cdot\frac{1}{2}$$

同樣に、第八回では、

$$p_8=\left(1-\frac{1}{2}\right)^7\cdot\frac{1}{2}$$

故に、乙が褒美を得る chance は、

$$p_B=p_2+p_5+p_8+\cdots\cdots$$

$$=\left(1-\frac{1}{2}\right)\cdot\frac{1}{2}+\left(1-\frac{1}{2}\right)^4\cdot\frac{1}{2}$$

$$+\left(1-\frac{1}{2}\right)^7\cdot\frac{1}{2}+\cdots\cdots$$

$$=\frac{\left(1-\frac{1}{2}\right)\cdot\frac{1}{2}}{1-\left(1-\frac{1}{2}\right)^3}$$

$$=\frac{\frac{1}{4}}{\frac{7}{8}}=\frac{2}{7}$$

最後に、丙が褒美を得る chance は第三回では、

$$p_3=\left(1-\frac{1}{2}\right)^2\cdot\frac{1}{2}$$

第六回では、

$$p_6=\left(1-\frac{1}{2}\right)^5\cdot\frac{1}{2}$$

第九回では、

$$p_9=\left(1-\frac{1}{2}\right)^8\cdot\frac{1}{2}$$

故に、丙が褒美を得る chance は、

$$p_C=p_3+p_6+v_9+\cdots\cdots$$

$$=\left(1-\frac{1}{2}\right)^2\cdot\frac{}{2}+\left(1-\frac{1}{2}\right)^5\cdot\frac{1}{2}$$

$$+\left(1-\frac{1}{2}\right)^8\cdot\frac{1}{2}+\cdots\cdots$$

$$=\frac{\left(1-\frac{1}{2}\right)^2\cdot\frac{1}{2}}{1-\left(1-\frac{1}{2}\right)^3}$$

$$=\frac{\frac{1}{8}}{\frac{7}{8}}=\frac{1}{7}$$

〔6〕結　末

プロバビリテーそのものは、私共の主觀的意識狀態と獨立に存在する客觀的の關係を意味します。そして、外見上簡單な場合は兎も角、實際の場合は多くは非常に複雜であつて、數學的にただ形式上からそのプロバビリテーを決することは出來ません。かやうな際には、過去の經驗、特に統計に基いて未來をトさなければなりません。もしその基礎となるべき統計が、時間的にも空間的にも廣い範圍に亙り、且つ精確なものであれば、プロバビリテーの計算も精確に參りませう。生命保險や、その他の保險事業などは、かやうな經驗的事實に關する精密な統計に基くプロバビリテーの計算を利用して成立してゐるのです。

かやうに、プロバビリテーはひとり物理界の現象に對してのみならず、人事界の現象に對して廣く之を應用することが出來るものであつて、社會現象、經濟現象、心理現象に對する數理的確實の知識を得ようとする企圖は、漸く盛んとなつて參りました。そして、このプロバビリテーは年と共に、數理的科學中の最高貴にして、有力なものたることが證明せられつゝあります。

實はこれで先づ濟ましたつもりですが次號でもう一回申し上げます。それは反プロバビリテーとか證據のプロバビリテーとか申して、少し毛色の變つたものです。

なほお斷り致しますのは、實は本號でプロバビリテーの懸賞問題を提供したかつたのですが問題をこしらふ間がなく次號で「玉轉がし」でも調べて來て問題の一つにする考へですが、いゝ思ひつきの問題があつたなら提供して下さい。思ひつきだけで結構で、計算や答までつけるに及びません。（以下次號）

編輯室日誌

——二月、三月——

二月十二日（月）午後主幹警察講習所講演。其れより所用にて文部省普通學務局訪ふ。

十三日（火）主幹、贊助員杉村楚人冠氏、河東田經清氏、栗田文學士、葛西文學士を歷訪す。

十四日（水）主幹、贊助員飯田義一氏を訪問す。

十五日（木）「近世變態心理學大觀」豫約出版保證金を警視廳に納附す。

十六日（金）午前會友福島縣山田弘氏、藤田仁助氏來訪。

十七日（土）午後、主幹神奈川縣社會事業協會に於て講演、夜、會友山田弘氏再び來訪。

十八日（日）午前會友眞鍋正夫氏（海軍機關中佐）、午後法學士豐水道雲氏（東京地方裁判所判事）來訪。

十九日（月）午後主幹根岸病院訪問。

二十日（火）本日より近世變態心理學大觀內容見本を發送し始む。編輯室內殆ど上を下への大混雑を呈す。

廿一日（水）大觀見本發送。

廿二日（木）同じく。

廿三日（木）午後主幹常磐松女學校講義。大觀見本發送例の如し。

廿四日（金）大觀見本發送例の如し。會友今井兼弘君も來て手傳ふ。

廿七日（火）川崎栗山兩氏も來りて大觀見本發送を手傳ふ。

廿八日（水）大觀見本發送漸く一段落を告ぐ。廿日より本日まで約五萬部を日本全國各所に配布し盡す。每日朝は八時より夜は十二時に至る。社員一同綿の如く疲勞す。

三月一日（木）「變態性慾」三月號發送。

三日（土）午前、主幹帝大に贊助員牧野、永井兩博士を訪問す。午後杏雲堂病院に小熊氏を見舞ふ。

四日（日）昨年四月以來病臥中の主幹令弟一義君本日午前七時遂に逝去せらる。謹んで哀悼の意を表す。「變態心理」三月號發送。

正午主幹、東京驛ホテルに贊助員望月日謙氏、兵藤榮作氏を訪ふ。夜、川崎記者寄稿依賴のため、成女學校長宮田修氏を訪問す。

五日（月）夕方、川崎記者寄稿依賴のため、理學士北山心寂氏及び北野博美氏訪問。

七日（水）午前三時、北品川袖ヶ崎大火、幸ひに本社は風上に當りしを以て危險を免れたれど、前日森田醫學士に送りし「神經質の療法」三十部は、郵便局と共に燒失す。

八日（木）午後、森田醫學士來訪。

九日（金）夜、會友大戸徹誠氏來訪。

十日（土）午前、栗山記者來訪。

十二日（月）「變態性慾」四月號原稿田中香涯氏より到着す。

十三日（火）更に大觀見本約三萬部を日本全國各書店に發送す。

十五日（木）栗山記者關西旅行に出立す。

十六日（金）市內各所に近世變態心理學大觀豫約申込所の立看板立つ。午後、主幹常磐松女學校講義。

十八日（日）夜、主幹贊助員大野德三郎氏を訪問。森田醫學士とも落合ふ。

十九日（月）午後、雨を衝いて、大野氏

を嚮導に、森田醫學士、佐藤政治氏、主幹、川崎記者等大擧して程ヶ谷の某所に向ひ、夜に入りて歸京す。其の要件は暫く天機漏らすべからずとせん。

•

新刊紹介

□優生學と人生

田中香涯著

「現在の如き資本主義的經濟制度の社會に於ては、いかに優良の遺傳を有するものでも、貧窮なれば其の能力を發揮すべき機會が與へられず、之に反して低能不良の者でも權門富家に生れたものは、社會に上位置を占め得らるゝが如き不公平正自然なる世相を根本的に改造するに非ざる限りは、到底民族の優生學的改善を期待することは出來ない。現代の社會經濟制度を是認して優生學を高調するが如きは、所謂楯の一面のみを見て他の一面を閑却せるものである。」

著者はこの見地に立つて縱橫無盡に論じてゐる。本書章を分つこと二十三、優良の遺傳を有する者の生存を脅かし、或は其增殖に障碍を與ふるが如き現代の社會的缺陷に對しても亦、著者は忌憚なき所見を披瀝してゐる。民族及び社會の改善向上を念とするの士の一讀を薦む。（四六版三〇〇頁定價貳圓貳拾錢　東京神田今川小路大鐙閣發行）

□西太平洋の神秘境

太平洋諸島に住居せる諸人種の研究は、文明や人工のために變形せられざる人類其者の姿を如實に知ることであり、吾等の有する本然の性質を確實に把握することになる。諸種の人事的科學は、到底此等の原始的人類の研究を缺いては其堂奧に徹し難い。本書は「日本讀書協會々報」第廿九號所載の一にして、英國ブロニスロー・マリノウスキイ博士の著である。著者は南洋諸島に在つて親しく其土人の間に生活し、精細なる人種學的研究を遂げた人で、本書はその一部なるニューギニア附近の諸島嶼に於ける土人の經濟的方面の研究を述べたもので、本書の價値は、科學研究者の陷り易き外的な理智的方面にのみ偏せずよく土人の感情的な内面生活にまで入り込んで其眞生命を捉へんと努力した所にある。なほ本書は我が日本の古代文化の研究者に對して、幾多の興味ある材料と暗示とを提供してゐる。

南洋諸島の沿岸土人はキュラといふ一種の貿易を試みてゐる。本書の目的はこのキュラ・システムの研究であり、之は實に是等諸島の土人の生活其者であり、彼等の感情や、誇りや、迷信や、魔術や、其他の樣々なものがそれに織り交ぜられて、美しい原始生活の活畫圖を展開するのである。而して著者が最も永く滯在したトローブリアンド島の生活は、不斷の贈答と give and take の連續である。與へることには必ず何等かの權利が伴ひ、受ける方にはそれに相當する義務が伴ふ。酋長の權力でも、又彼に對する服從でも、近親の關係でも、社交でも、彼等の社會組織は此の關係が骨子をなして居るかの觀がある。キュラの制度も實に此の慣習が生み出した特異な貿易の方法に外ならぬ。著者はこの土人の經濟思想を詳細に述べ、それから、カノーの出發から、航海の有樣や、其取引の狀態等を記し、其間それに必然的に伴ふ魔術迷信や、又キュラに關する神話に說き及んでゐる。（東京京橋西紺屋町　日本讀書協會事務所發行）

現代の縮圖

—大正十二年二月—

犯罪

■大阪市南區廣田町うどん屋關林方の出前持黑×田鶴(一五)と云ふ少女は、同町廣田神社前の下宿屋ぬいや方へ度々出前を持つて行くが、女中や下宿人に惡罵されるので癪にさはり、七日午後四時半ごろぬいや二階の下宿人にきつねうどんを持つて行き、歸る時に階下四疊半の空部屋に忍び入り、新聞紙を襖の破れに突込み放火したが、襖を燒いたのみで消し止めた。

■東京府下西大久保栗×はな(三三)は數年前夫に死に別れて後家暮しであるが、去る一月十七日頃嬰兒を生み落したにも拘らず最近突然嬰兒の姿が見えないので、附近では他殺の噂が專ら高いのを聞き込んだ淀橋署では秘密に內偵中、床下に嬰兒の屍體を埋めてあることを突き止め、十日係官同家へ出張して取調べの結果、噂の如く同家床下に菓子瓶にアルコールに漬けた嬰兒の屍體を發見したので、はなを引致の上嚴重に取調べた所、はなは昨年二月以來府下戸塚町白木屋呉服店々員戸×秀×(四〇)と附近の長唄師匠へ通ふ內情を通じ、去る一月十七日女兒を分娩したが、其の處置に窮し遂に自分の股の間に女兒を挾んで壓殺したことを自白したので尚取調中である。

■十三日朝一時頃市內三河島植木職齋×孫×郎方に同居の同職西×春×(二六)は外出先から泥醉して歸り、丁度停電で家の中が眞暗なのに乘じ、孫×郎の次女とき(一九)を呼び起して用意の短刀を拔いて、兩腕に切り付け重傷を負はせ、ときは悲鳴を擧げて昏倒した。その物音に驚いて起きたときの母まき、祖母ふみ(七九)實兒重吉(一九)にも斬りつけ、暗の中で大騷動最中南千住署から係官出張し犯人春×を逮捕した。原因は加害者春×が被害者ときに戀したが何時も刎ね附けられ、失戀の結果遂に自暴の兇行を演じたものである。ときと祖母ふみは共は重傷にて、母まきは生命危篤、重吉は輕傷である。

■二十日大阪船場署で二名の貴婦人らしい女を萬引の嫌疑で引致取調べたが、右は兵庫縣川邊郡神×ポンプ製造株式會社々長神×又×郎の妻郁子(二〇)とて、昨年梅田女學校卒業後神×家へ嫁したものであるが、同日は女中一名を連れ白木屋呉服店內で、二百餘圓の反物を萬引したもので、尚外一名は大阪市外螢ヶ池金貸業江×寛×妻ふみ子(二三)といひ、何れも百萬圓以上の資產である。

■千葉縣勝浦町料理店島村事吉×もと方へ數日前東京市麻布區根×清×郎(二〇)が來り、村×りゑ子(二四)といふ女を自分の妻だと稱し、三百圓の前借を受け取り女を酌婦に住み込ませたが、二十二日夕刻清×郎は女を誘ひ出して勝浦驛から逃走しようとした處を勝浦署の手に取押へられた。取調べの結果右の女は同人の妻とは眞赤な僞りで、實は三重縣津市杉×病院長杉×三×氏の令孃きみ子(二四)と判つた。きみ子は大正九年の春三重縣立女子技藝學校を卒業後大金を拐帶して無斷家出し、大阪の寶塚歌劇團に投じ女優になつたが、兩親を口說き落して每月三百圓の仕送りを受け、千圓餘のピアノや其の他も買つて貰つたが、いつかきみ子は同歌劇團の俳優教師兼新派俳優

の三×潔(二二)と戀仲になり、大正十年七月兩名は手を携へて東京へ駈落し、夫婦氣取りで新富座へ出演してゐるうち、其の日の生活にも困るやうになつた。此の前後から三×は漸く色魔の本性を現し、友人清×郎と共謀して數回に亙つて杉×病院長を脅喝し一萬數千圓を捲きあげた揚句、更にきみ子を囮に惡事を働くやうになつたので、勝浦署では餘罪ある見込みで目下きみ子と清三郎を嚴重取調中である。

■二十七日午前六時三十分頃池袋農石×甚×郎は自宅に於いて養子銀×郎(二九)の頭部を仕事用の鍬で亂打し其の場に即死せしめ、直に自宅を抜け出して行方を晦ました。急報によつて巣鴨署から係官出張取調べる一方犯人の行方を極力搜査せるが、七時府下板橋町の居酒屋で飲酒中の擧動不審の男あり、板橋署の刑事が認め引致すると、前記の次第を自白した。甚×郎は大正六年に妻を失ひ、九年に銀×郎を養子として迎へたものであるが、銀×郎は大の變り物で常に折合が惡かつた。兇行の原因は今朝銀×郎夫婦が睦じげに同衾してゐるのを見て嫉妬を起した結果であると。

家出

■富士水電沼津事務所在勤技師、靜岡縣富士郡遠×一×(三二)は非常な利己主義の男で、兩親とさへ衝突勝であつたが、數日前妻俊子(二四)を連れ、老いた夫婦と自分の幼兒とを置きざりにして家出した。彼が兩親に當てた手紙は誤れる自由思想を遺憾なく發揮してゐる『資産は父の所有する物故自由にして可なり。我等夫婦は先代の遺物たる舊思想の醜き犧牲となるを要せず。妻は夫に隨ふべきをもつて、夫の親に背くことゝなるは責むべきにあらず。よつて妻と共に家出す』とある。父も手の着け樣がないとて、十二日廢嫡の訴へを起した。

■赤坂區一木町元村井銀行員岡×長×郎四男下澁谷府立商業學校三年生隆×(一八)は廿日朝學校に行くと見せかけ、六十餘圓記入の郵便貯金通帳を持ちだしたまゝ歸つてこない。岡本家は岡本氏と妻きぬ(四九)との間に四人の子供があつて、長男は慶應醫科大學生である。隆×の家出について岡本氏は『別に原因といふほどの事もありませんが、私が一月中旬病氣で寢てゐた時に隆×が枕もとに來て、「私に學問したところで、益々激しくなる此生存競爭に打ち勝つて成功し得るとは思はれない。幸ひ他人よりも健全な體格を持つてゐるから、海外に出たいから學校を三月かぎり退學する事をゆるして下さい。」といふので、私はその不心得をさとしその場は濟んだが、また二三日たつとおなじ事を繰返してゐました。これが原因といへば原因です。家出した日に芝局の消印ある手紙が來た。内容は決心した事は飽くまで貫徹する。心配させる事は申し譯ないが、是非成功するまで暇を下さいといふ意味です。學校の成績も問ひ合せたが中以上で別に心配もない。机の抽斗にある旅行案内を開いて見ると、臺灣行の汽車の時間及び賃金の所にのみ朱線をひいてありました。どこにいつてもかうなれば運にまかせますが、心配なのは市内に潛伏して不良少年に誘拐されはしないかといふ事です。隆×は冒險が好きで、活動寫眞等も冒險のものばかり見てゐたやうです。』

情死

■岐阜縣警察署勤務高×龜×(二五)は豫てから金津遊廓上本樓娼妓梅若(二五)と深く馴染んで居たが、女が先頃名古屋へ鞍替した後、去る三日名古屋から逃げ出して來て男を訪れたので、高×は職務を拋棄して行方不明となつ

たので、岐阜署では爾來同人の行方捜索中六日夜不破郡垂井町驛前の某旅館に潛伏中を取押へ、七日朝女の家人が梅若を連れて歸らんとする途中、女は豫て覺悟の昇汞水を嚥下して自殺を圖り、男も同樣昇汞水を嚥んで自殺を圖つたので、直に大垣驛に到着すると同時に附近の病院に擔ぎ込み應急の手當中。兩名とも生命危篤である。

■十二日午前九時愛媛縣北宇和郡御槇村槇川の山中に男女の情死死體を發見、男は同村御内農梶×兼×(三四)女は同村槇川村會議員福×美×造妻いよ(三〇)と判明した。いよは子供三名もあるに數年前より兼×と關係し、遂げられぬ戀を悲觀して兩名は一月末駈落し行方不明となり、美×造より其筋に保護願中のものである。

■石川縣片山津溫泉湯の出旅館へ十三日午後七時自動車で乘込み、宿帳に福島縣西白河郡古若村戸口虎之助(二四)妻きよ(二一)と認め泊つた客があつたが、十四日午後四時半頃奥の離れ座敷で黃金木綿で互の體をしばり、炬燵へダイナマイトを投じて爆死した。遺留品中には現金約一百圓、猫イラズ等があり、男の名刺に栃木縣太田原町金東釀造株式會社員穗×豐、女の鑑札に太田原遊廓娼妓赤×とらとあり。遺書に依れば女は九年七月七百圓で娼妓となり、目下負債千餘圓に嵩んだのを悲觀してと。

■新潟縣村松聯隊軍曹塚×恒×(二六)は、十四日村松町中町の自宅で、許嫁の妻きみえ(一七)村松高等女學校五年生と情死を企て、共に猫いらずを飮みたるが、夜に入りきみえは死亡し恒×は治療中。原因は恒×が十一日親戚方で酒を飮み、歸途狐に魅まれ道に迷ひ歸營時間に遲れたるを、常に規則正しき男とて面目なしと悲觀し、きみえは之れに同情したる結果。

■宮崎縣東臼杵郡細島尋常高等小學校訓導原×正×(二一)は大正十一年四月本縣師範學校を卒業後、前記細島校に赴任したものであるが、同人は養子として妻子あるに拘はらず、何時頃よりか細島町料理屋イロハ樓酌婦イリ子(二一)と馴染を重ね、屢々嬶曳を續けて居る内兩人の仲は益々濃厚なるものありて、鄕里にては薄々耳に入りしより、二十一日親族の者を態々迎ひに赴かしめ、正×を連れ歸るべく學校にも內談を遂げたので、正×は事故缺勤をして一應歸宅する事となり、一度連れ立ちて歸鄕の途に就いた所、正×は途中より引返し豫て牒合せあつたものと見え、一方イリ子には午後七時頃芝居見物に行くと稱して外出し、正×と共どもに小學校に赴き豫て職員室に格納してあつた科學實驗用の鹽酸四百五十瓦入の瓶を持ち出し、運動場の一隅に於て互ひに之れを嚥下し情死を圖つたが、稍あつて正×が苦悶を初めたるに、イリ子は自分の苦痛を打ち忘れて正×を勞り看護に盡してゐたが、軈てイリ子も亦苦悶し初め、今は堪へ兼ねてイリ子は悲鳴を擧げ救を求めた。正×は同日午後五時頃に至り遂に死亡したが、イリ子は生命には別條なしとの事である。

自殺

■長野縣諏訪郡氷餅製造業小×光×(四一)は二日夜九時頃雜貨店にて萬引を爲したること發覺、四日兩巡査が同人を伴ひ自宅に至り贓品調査中警官の隙を窺ひ六疊の間にて村田銃を以て悲慘なる自殺を遂げた。同人は村內で中流の生活者であるが、昨年中も各所で竊盜を働いた形跡があると。

■橫須賀所屬軍艦千早乘組二等機關兵秋×市×(二二)は四日午後三時艦內第一號機關倉內で西洋剃刀を以て下腹部並に咽喉部を美事に切斷して自殺を遂げたが、原因は東

京市本所に居る一人の姪宮子(一八)と婚約があつて、去る土曜日宮子を尋ねて婚約の履行を迫りたるに、宮子には既に昨年夏から那須温泉で板橋町長上×秋×長男法學士上×定×(二八)と戀仲に陷り、既に結婚の契約を爲したとの事で、女の薄情を憾み自殺をしたものである。

■埼玉縣北葛飾郡杉戸町に起つた小作爭議は四ヶ月の長きにわたり、一月漸く和解を遂げたが、小作人組合はなほも奬勵米の增額をせまり、これが實行を見ぬ內は絕對に小作米をおさめぬとてまたも强硬の態度を示し、最初小作人組合から代表交涉委員に擧げられてゐた消防小頭大×政×助(四七)は地主の筆頭渡邊勘左衞門に呼ばれて、小作人組合の意向を內通したと疑はれ組合から散々攻擊され、數日來深く煩悶してゐたが、七日午前三時ごろ遂に自宅廐舍の梁に荒繩をかけ縊死した。

■岐阜縣土岐郡橋×清×(三七)は十四日午前二時頃ナイフを以て長男松夫(七)を殺害し、自分は裏の山中で縊死した。原因は清×は二三年前より肺病に罹り、子供の松夫も不具なる爲、前途を悲觀した結果であると。

■神奈川縣橘樹郡川崎町日本鋼管株式會社事務員栗×丈×(三二)が、十四日午後七時東京驛發の上野行省線電車が有樂町驛に着いて停車しようとした刹那、プラットホームから突然線路に飛び込んで、腹部を切斷され無慘の最期を遂げたが、所轄日比谷署では死因に疑念を抱き刑事を原籍地や現住所等に遣はして取り調べを行つた結果、右は一種の精神病者と判つたが、同じ精神病でも餘程變つた珍しいもので、此の種の患者になると獨身の中は無事であるが、一旦妻を貰ふと、其の妻に對して著しい恐怖の念を抱き、家出することも度々あるものだと云はれてゐる。果して栗×も其の通り、十二日日本橋區濱町縫箔業××屋の長女きぬ(二一)と結婚の式を擧げたが、其の晩同家を抜け出して前記の始末に及んだものであつたが、日比谷署の探査の結果、此の男は其の前にも三度まで妻を棄て行方を晦ましたもので、何時も結婚披露の宴が濟んだかと思ふと、其晩から姿が見えなくなつては媒酌を手古ずらせてゐた。

■豐橋市今×忠×(三八)は名古屋郵便局に奉職して居るが、行政整理の爲め馘首されるを豫期し、悲觀の末郵便局を缺勤し、京へ赴き就職口をさがしたが思はしくないので十四日自宅に歸り益々悲觀し、十五日夜豐川に投身自殺を遂げた。因に同人の馘首は未だ決定した譯ではないと。

■長野縣更級郡更府小學校高等一年生長×久(一三)は東京府豐多摩郡內の小學校長を勤めて居る父が目下肺病に罹つてゐるのを悲觀し、十八日自宅の二階で荒繩で縊死を遂げたが、同人は秀才であつた。

■十九日午前十一時三十分東京府下玉川村農業木×與×郞三女ゆき(三二)は、自宅奧六疊間に於て天井裏に細紐を掛け縊死を遂げたが、原因は嫁の賣口なく悲觀の結果と判明。

■十九日午後五時頃本郷區眞砂町の右京ヶ原にて猫入ラズを服用し苦悶中の男があつた。右は同區下宿業光榮館方止宿荒×政×(二二)とて、昨年春以來同家に止宿し居り同年八月郵便局の事務員を解雇され、其後就職口を求めたるも思はしき處もなく、搗てゝ加へて下宿料は二百圓餘り滯納した爲め、それこれを悲觀しての結果自殺を圖つたものであると。

編輯を終へて

□「近世變態心理學大觀」も大盛況裡に愈々豫約募集を締切らんとして居ります。本誌編輯までには未だその確定數を知ることが出來ませんが、申込多數に上つてゐることは、今日までの景況に照らしても疑ひなきところであります。內容價値のあるものなれば、その時機の如何を問はず常に歡迎せられるものであることを思へば、別段怪しむに足りないことであります。

□本月號記事輻湊の結果、止むを得ず次號へ割愛したものが幾つかありました。綿貫六助氏の「私の變態心理」、大戸徹誠氏の「夢と色彩」、青木三四郎氏の「興味深き強迫觀念症」などいづれも興味に充ちたものばかりであります。何卒次號をお待ち下さい。

□「變態心理學講義錄」の組織改正の結果として、文學士葛西又次郎氏の「群衆心理講義」及び北野博美氏の「變態性慾講義」孰れも端本が少部數宛殘つて居ります。若し御希望の方がありますならば、各貳圓（送料一部拾參錢宛）宛でおわかち致します。なほ文學士寺田精一氏の「犯罪心理講義」は、從來とても非賣品として特に法曹家諸君に限り、實費壹圓六拾錢（送料前同斷）でおわかちして居りましたが、今回一般諸君の御要求にも應ずることゝ成りました。（詳細目次廣告欄參照。）

□本號より掲載しました「裸體美術と性慾」は、「變態性慾」昨年拾貳月號（第一卷第八號）所載「性的方面より觀たる裸體美術」に對する美術界諸家の同答であります。該論文と併せてごらん下されば、興趣更に深いものがあらうかと存じます。殘部少數ございます。郵稅共參拾六錢。

□田中香涯先生著「夫婦の性的生活」は翼の生えて飛ぶやうな賣行を見せて居りますが、之に一大增補を行ひ、目下增版印刷中であります。

□豫れて米國に注文してあつた實物幻燈器械が愈々到着致しました。近くその試寫會を開くことに成つて居ります。いづれその節は會友諸君にお知らせ致します。（淸）

──編輯を終へて──

本誌定價表

一部（一ヶ月分）	金五拾錢	稅壹錢五厘
六部（半ヶ年分）	金參圓	稅共
十二部（一年分）	金五圓八拾錢	稅共

注意
□御註文は總て前金御拂込のこと
□なるべく振替にて御送金のこと
□特別號は定價超過分申受のこと

本誌廣告料

表紙二、三、四面	金五拾圓
普通面一頁	金參拾五圓

大正十二年三月廿日印刷
大正十二年四月一日發行　第十一卷第四號

編輯兼發行兼印刷者　東京市外北品川御殿山七一八　中村蓊

印刷所　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　東洋印刷株式會社

發行所　東京市外北品川御殿山七一八　日本精神醫學會
電話高輪一〇四三番
振替東京三一一七七番

大賣捌　東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、盛春堂

文學士 中村古峡氏著

變態心理の研究

四六版布裝頗美本
紙數四百八十頁
定價金貳圓五拾錢
送料金十二錢

本書は其の內容の種類に依つて、上中下の三篇に分たる。——

□上篇……には催眠現象・潛在精神・二重人格・透視と念寫・幽靈の出現・狐狸の憑依等、諸種の變態心理現象を一般の讀者にも理解され得るやう極めて丁寧親切に說明す。

□中篇……には著者多年の經驗中から、精神治療に關する實例數種を詳細に報告したるものにて、就中二重人格者に對する諸種の施術法并に夢の新實驗等は全く著者の創意に屬す。

□下篇……には精神病者の心理描寫二篇并に狂人の興味ある手記繪畫二十餘種を收む。

著者の文章は世既に定評あり、讀者は小說を讀むが如き興味のうちに、此の新科學の新智識に通曉することを得べし。

忽ち九版

□取次所 東京市外品川御殿山 振替東京三一一七七 日本精神醫學會

變態心理學講義錄

四ケ月卒業

總紙數千五百頁

精神科學の一大寶庫！　精神療法の根本改造！

心靈研究の最高指南！　催眠術界の徹底革新！

組織改正

第五期新會員大募集

□變態心理講義　文學士　中村古峽氏

□精神療法講義　醫學士　森田正馬氏

□心靈學講義　文學士　小熊虎之助氏

□催眠術講義　文學士　中村古峽氏

□臨床催眠術講義　大阪實驗心理研究所主幹　向井章氏

入會者には諸種の特典あり。詳細規定幷見本入用者は往復葉書にて問合せありたし。

東京品川御殿山　日本變態心理學會　振替東京一一五〇一番　電話高輪一〇四三番

變態心理第十一卷第四號
大正六年十一月大日第三種郵便物認可　大正十二年三月廿五日印刷納本　同十二年四月一日發行

定價金五拾錢